

み言葉と分かち合い C年



カトリック鶴岡教会

蒲池明憲 著

序文

この度の『み言葉と分かち合い』C年版は、前年度のB年版よりもさらに丁寧にみ言葉を読み取り、深く掘り下げた内容となっています。それでいて、信徒の方はもちろん、未信者の方にも分かりやすい言葉で記されており、新約が旧約を土台として成り立っていること、また両者が深く結びついていることが自然に理解できます。

さらに、旧約の時代背景や政治・経済にも触れられており、その時代の出来事をより具体的に感じ取ることができます。

新約では、イエスのたとえ話の意図が丁寧に解き明かされており、み言葉の知識だけでなく、読む人の心や魂を潤し、み言葉を味わう喜びをもたらしてくれます。

著者は、約20年にわたり「MyBible」シリーズの制作に携わってこられた方であり、その豊かな経験をもとに、日常生活の中でどのようにみ言葉と共に歩むかが具体的に示されています。そのため、信徒の方にも未信者の方にも、多くの学びと気づきを与えてくれる内容となっています。

信徒がこのような冊子をまとめることは容易ではありませんが、著者ご自身にとっても、この制作を通してみ言葉を深く味わい、神の恵みに満たされる貴い時となったことでしょう。

この冊子は、信徒同士がみ言葉を分かち合うための良き助けとなります。イエスが弟子たちに宣教を託されたように、信徒が中心となってみ言葉を伝えることは、日本におけるキリスト教の広がりへの鍵となることでしょう。

著者の所属する西千葉教会では、ミサ後に「聖書と典礼」に基づくみ言葉の分かち合いが行われていると伺っています。このような取り組みが日本各地の教会にも広がり、やがて海外の方々との分かち合いへと発展していくことを願ってやみません。

この冊子との出会いを通して、み言葉への理解がいつそう深まり、日々の生活の中で神と共に歩む喜びが増し加えられることでしょう。

今後、「み言葉と分かち合い」A年版の出版を心より期待しています。

序 文

目 次

1 待降節第 1 主日	1
2 待降節第 2 主日	2
3 待降節第 3 主日	3
4 待降節第 4 主日	4
5 聖家族	5
6 主の公現	6
7 主の洗礼	7
8 年間第 2 主日	8
9 年間第 3 主日	9
10 主の奉献	10
11 年間第 5 主日	11
12 年間第 6 主日	12
13 年間第 7 主日	13
14 年間第 8 主日	14
15 四旬節第 1 主日	15
16 四旬節第 2 主日	16
17 四旬節第 3 主日	17
18 四旬節第 4 主日	18
19 四旬節第 5 主日	19
20 受難の主日	20
21 復活の主日	21
22 復活節第 2 主日	22
23 復活節第 3 主日	23
24 復活節第 4 主日	24
25 復活節第 5 主日	25
26 復活節第 6 主日	26
27 主の昇天	27
28 聖聖霊降臨の主日	28
29 三位一体の主日	29
30 年キリストの聖体	30
31 聖ペトロ 聖パウロ使徒	31
32 年間第 14 主日	32
33 年間第 15 主日	33
34 年間第 16 主日	34
35 年間第 17 主日	35
36 年間第 18 主日	36
37 年間第 19 主日	37
38 年間第 20 主日	38
39 年間第 21 主日	39
40 年間第 22 主日	40

41 年間第 23 主日	41
42 十字架称賛	42
43 年間第 25 主日	43
44 年間第 26 主日	44
45 年間第 27 主日	45
46 年間第 28 主日	46
47 年間第 29 主日	47
48 年間第 30 主日	48
49 死者の日	49
50 ラテラン教会の献堂	50
51 年間第 33 主日	51
52 王であるキリスト	52

【付録】

1 人生のトータルソリューション 概要図	
2 人生のトータルソリューション 概要図 解説	
3 ヨハネの黙示録 概要図	
4 現生幸就	
5 御言葉典	
6 御言葉典 解説	
7 国際 MyBible 協会のビジョン	
8 国際 MyBible 協会創立記念ミサ & MyBible 出版記念ミサ	

■第62回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 エレミヤ書 33・14～16

神は将来、イスラエルとユダに対して、再び回復させると約束した日が到来し、これが成就するについて、神は忠実にこの言葉を守り、実現させると宣言します。神は、ダビデの子孫から若枝（メシア）が現れ、イスラエルの民に対して、メシア（救い主・イエス）は、神の完全な支配と霊的な正しさに基づき、安定をもたらす存在となり、神の救いと統治を実現します。神の救いと回復の結果、ユダ（統一後の国名）とエルサレム（首都）は平和を享受し、「主は我らのすくい」とあるので、神は人に「神の業による正しい基準」を示しますが、人はこれを全て守り切ることは不可能ですが、神の愛と恵みにより、たとえ違反し罪を犯しても赦され、正しい者とされ、人の努力や行動によらず、神は人を受け入れてくださるので神と人との和解は成立し、平和の中に安息の希望を見出します。

【イスラエルとユダ】

イスラエル王国はソロモン王の死後に分裂し、北の国を「イスラエル」、南の国は「ユダ」と呼ばれ、イスラエルは紀元前722年にアッシリアに、ユダはバビロンに滅ぼされた。エレミヤは、神によってイスラエルとユダに対して、2つの民を再び一つ（国名はユダで後にイスラエル）にする、と語ります。バビロン捕囚帰還（ユダの民）後、イスラエルとユダの区別は薄れ、ユダヤ民族全体を「イスラエルの民」と認識されるようになりました。

【メシア（イエス）の役割】

1. 神についての真実・真理についての証言。

- 1) 神の救済計画は、(ヨハネ 3・16) イエスの贖罪で罪が赦され、永遠の命を与えるのに遣わした。(ヨハネ 14・6)
- 2) 新しい神の国の到来が近づいていることを人々に語り、悔い改めを促す。(マタイ 4・17)
- 3) 世の終末には、最後の審判により、善人には永遠の命を、悪人は裁かれます。(ヨハネ 5・28-29)

2. イエスの贖罪で、永遠の命への扉が開かれ、人類の未来を根本的に変える新たな時代が到来します。

●第2朗読 1テサロニケへの手紙 3・12～4・2

パウロは、テサロニケの信徒間での愛に留まらず、まだ信仰を持っていない未信者の人に対しても、イエスに倣って無条件の愛を現すことは、信仰が成熟させる上では必要で、信徒は愛を实践（他者を思いやり、助け合う）をするように言っています。また、信徒は主の再臨を意識し、この世の誘惑に打ち勝ち、神の前では潔白となるよう、神に喜ばれる生き方を目指します。信徒たちは既に教えられたことに従って歩んでいますが、更に愛の実践を深めるようにと勧めています。信仰を成長させるためへの終わりはなく、日々の生活を通して愛の実践が求められています。イエスの「命令」は、神に喜ばれる愛の実践であり、これを日々の行いで現すようにとっています。

●福音書朗読 ルカ 21・25～28、34～36

太陽、月、星に徴が現れ、海は荒れ狂い、世界が終末に向かう時は、天変地異の異常な兆候が現われ、全ての被造物に終わりが近いことを知ります。「天が揺り動かされる」ので、宇宙全体が変化し、神の力が発揮されることを示唆していますが、この異常な現象が起きた際、人々に何が起こるかは理解されておらず、恐怖を抱き、不安に陥ります。このような時、信徒が待ち望んでいる再臨は、イエスが雲に乗ってこられるのを人は見ますが、不信仰者にとっては、私審判（黙示録 20・12-15）が待っているのが恐れます。信徒は、このような異常な現象が起り始めたなら、恐れることなく、救いの希望が近づいていることを知ると共に、終末への備えと警戒を怠らないようにします。人は日常生活での煩い、苦悩、快樂などで、主よりの教えを忘れることなく、終末は誰も予想することができずに訪れるので、信徒は、日々の祈りと警戒心を持ち、イエスの前に出たとき恥じることをないようにします。

■第63回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 バルク書5・1～9

エルサレムとイスラエルがバビロン捕囚から解放されることが記されており、喪服（悲しみ）を脱ぎ捨て、神の栄光（救い）を身に着けよ、とあるので、捕囚が終わり、希望が現実することが語られています。捕囚で失われたエルサレルの誇りや名誉は、神の救いにより「尊厳」は回復され、神の救いは全世界に及び神による平和は永遠に続き、エルサレムが神を崇めることで、神の栄光を現し、この名も神の特別な存在として永遠に残されます。東の方角は、神の臨在を示しており、神の救いを見るよう促しています。捕囚となり離散したエルサレムを母親として擬人化し、お前の子らを神は見放さず、神との契約に基づく救いの実現を民は喜び、神や神が遣わすメシア（救い主）の「言葉」によって、散らされた民は地の果てから集める、との希望や神は民を忘れずに見守るとの約束に変更はない。

捕囚で、困難や屈辱的な経験をしても、神の計画では回復と栄光が約束されており、神の救いの言葉は確実で、神は、イスラエルの悔い改めにより、山（高慢）や丘（権力）は低く、谷（抑圧者）は平地となり、神の前では分け隔てされることはなく、神の憐れみにより、イスラエルの民を喜びと平和のうちに導くとの希望が語られています。

苦難（自因自果）に遭遇した際は悔い改め、希望を持ち続けることの大切さを教えています。

- 【エルサレム】1. エルサレムは、神の臨在と救いを強調する特別な都市です。（出エジプト記25・22、イザヤ書60・1-3）
2. エルサレムを擬人化することで、神との深い絆や親密な関係を表現しています。
3. エルサレムの回復は、全世界への救いを象徴し、希望と救いの中心であることを表しています。

●第2朗読 フィリピへの手紙1・4～6、8～11

パウロは、フィリピの教会とは特別に関係が深く、信徒への喜びと感謝を込めた執り成しの祈りは、彼らの霊的な成長と行動へととなり、神の栄光になることを目指す人生は、神の御業が完成することにもなり、信徒同士の霊的な支えとなる大切な祈りです。最初の日とは、フィリピで初めて信仰を受け入れた時、獄吏の回心（使徒16・30）などのことです。み言葉を信じて受け入れるのを「福音にあずかる」で、神の恵みをいただき、み言葉を生活の中で実践し、宣教活動を支え、福音の喜びと希望を他者と分かち合い、宣教の使命を果たすことです。救いの働きのことが「善い業」で、①神の恵みと賜物によります。（エペソへの手紙2・8-9）②信徒はイエスに似た者へと変えられていくよう（聖化・1ヨハネの手紙3・2）招かれています。（ローマ書8・29）この業は、イエスが再臨される時に成就する、とパウロは確信しており、この根拠は、神は信徒に対して「最後まで責任を持つ方で、約束を守られる方」だからです。（ヘブル人への手紙10・23）パウロは、イエスの自己犠牲と無条件の愛によって、彼らに溢れる愛情を示され、この行為は単なる口先だけの言葉ではなく、全能の神が見ておられるので（ヘブライ人への手紙4・13）偽りはなく、神の言葉や教えを理解し、何が正しいか、優れているかを見極める力を身につけ、最重要なことに集中し、イエスの再臨に備えます。霊的なことや善行による成果「義の実」は、神の栄光を表し、信仰のありようと実践の両方を教えています。

●福音書朗読 ルカ3・1～6

ルカは、ヨハネの働きは歴史的に信頼できると位置付けており、ティベリウスの治世第15年は、紀元28～29年の頃です。ザカリアの子ヨハネは、荒野で神の言葉を受け、彼が預言者の役割を担い、イエスの到来の先駆者としての役割は、「悔い改めて罪の赦し」として、水の洗礼を受けて準備することです。み言葉に、荒れ野に主の道を備えよ。荒れ地に……街道をまっすぐに……谷（抑圧者）は高く……山（高慢）と丘（権力）は低くされ、起伏は平坦に、陰しい所は平野とされ……すべての肉なる者はともにこれを見る。（イザヤ書40・3-5）ので、神の前に悔い改めることで、神は人を分け隔てすることなく、全人類は神の救いにあずかるための道は整えられており、神の救いの計画は普遍であることを明確に語っています。（ルカ3・6、ルカ2・30-32、ルカ24・47）

■第64回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 ゼファニヤ書3・14～17

待降節の第3主日は、喜びの主日と言われており、主が近くまで来られているとの喜びは、他の朗読箇所とも共通しています。神の民であるシオン（エルサレム）が喜ぶ歌には、神の救済と回復、そして、神が新たな祝福をもたらすとの確信に基づいています。イスラエルの民が犯した罪に対する神の裁きは、バビロン捕囚の悔い改めで終わり、神の愛と憐れみや罪の赦しで神との関係は回復され、恐れず信仰を持ち続けることで、「力なく手を垂れる」こともなく、絶望や無力感を捨てよう励ます。神は「救いの勇士」として、民を守り救い、愛による「静けさ」と「喜びの歌」には、神の喜びが満ち溢れ、民を安心させ慰めることで、神と民の親密な関係を表しています。

【シオン、エルサレム、イスラエル】

シオンは、エルサレムの一部にあるダビデの町（エルサレム南東部の丘）のことで、神殿がある聖なる場所や神の民が集う特定の場所（詩篇48:2-3、イザヤ書2:2-3）として使われ、エルサレムはシオンを含む都全体を表します。イスラエルを女性として擬人化し、シオンやエルサレムを娘として感情を与え、神と民との親密さを表します。

●第2朗読 フィリピへの手紙4・4～7

パウロは獄中の中より、フィリピの教会の信徒宛に、困難な状況にあっても喜ぶことを勧めています。これは、ストレスが減少し、思考がクリアとなり、新しいアイデアや建設的な考えが浮かび、心理的な効果と共に霊的な平安が与えられます。信徒には、主の再臨又はご降誕が近く、これが実現すると、主がいつも一緒におられる（インマヌエル）ことになるので、他者には忍耐強く、優しい態度で接します。煩わしい問題や不安なことは、自分一人で悩むことなく主を信頼し、与えられた恵みにまずは感謝してから、具体的な要望を主に祈り求めることにより、人知を超えたことが主より与えられ、心には安らぎが訪れ、恐れから解放されます。

●福音書朗読 ルカ3・10～18

ヨハネの言葉を聞いた群衆は悔い改め、自分たちは何を具体的に行動したらよいのかヨハネ尋ねます。悔い改めを表す体的なことは、隣人への愛の践です。持っている者は、持っていない者を助け、徴税人は、不正や搾取をせず、正直で誠実な行動を行い、兵士は、職権を濫用して害を与えず、与えられた給料で満足せよ、（足を知る）と語ります。ここで大切なことは、「受けた親切は忘れず、与えた親切は忘れる」ことです。群衆はメシアの到来を熱望しており、ヨハネの行動を見ている民衆は、彼が救い主メシアではないのか、と期待します。そこでヨハネは、わたしはメシアではなく、偉大な方（イエス）が来られます。この方は「聖霊と火」のバプテスマ授け、霊的な働きと清める力を持っておられると語ります。農機具である箕は、脱穀（穀）して穀物の実（善人）と殻（悪人）を分けるように、ヨハネは、イエスの到来を予告し、悔い改めには具体的な行動で表す（ルカ3:8）必要性を説き、イエスの救いには裁きが伴うことを教えます。

【聖霊と火のバプテスマ】

1. 聖霊のバプテスマ

- 1) 神が人に聖霊を注いで、新しい命が与えられ、神との親しい関係を築きます。（ヨハネ3:5-8、使徒2:1-4）
- 2) 信徒には「助け主」（聖霊）を送り、導き、教え、力を与えることを約束します。（ヨハネ14:26）
- 3) 信者に聖霊が働くことで、与えられた神よりの使命を果たす力が与えられ、地の証人となる。（使徒1:8）

2. 火のバプテスマ

- 1) 火は、聖書において、清めや裁きを表し、罪を焼き尽くし、人々を清くします。（マラキ3:2-3）
- 2) 火は神の裁きを表し、（マタイ13:40-42）悔い改める者は救いが、しない者は裁かれます。（ルカ3:17）

■第65回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 ミカ書5・1～4

預言者ミカは、預言者イザヤと同じ時代にユダで活躍し、ベツレヘムからイスラエルを治めるメシアが現れると、希望に満ちた神の救を預言します。ベツレヘムは小さな町で、ここから生まれるメシアの存在は「永遠の昔から」とあるので、永遠になることを暗示しています。メシアの到来までには一時的な離散がありますが、母親からメシア（イエス）が誕生することで、再びイスラエルを統一します。メシアの支配力は強く、平和と安全をもたらし、神の権威と支配を示し、メシアの救いは普遍的で、この影響力は全世界に及びメシア自身が平和の存在となります。（イザヤ書 9・6）メシア（救い主）は、単に戦争の終結や物理的な平和だけでなく、神との和解と完全な霊的な平和をもたらす方です。「平和」は、ヘブライ語で「シャローム」と言い、単なる争いのない状態だけに留まらず、調和や繁栄に満たされた状態も含み、メシアは完全な平和を提供します。

【エフラタ】「豊かな土地」との意味があり、ユダ族の一門や家系の名前を表し、（ルツ記 4・11）ベツレヘムの古い名前や周辺地域のことです。（創世記 35・19）

【ユダ族】アブラハムの子孫でヤコブの4番目の息子がユダ族の祖（創世記 29・35）となり、ここからダビデ王が生まれ、イスラエル王権の中核をなし、メシアの系譜の中でも重要な位置を占めます。（1サムエル 16章）

【ベツレヘム】「パンの家」との意味があり「いのちのパン」（ヨハネ 6・35）と結びつきます。エルサレムの南約 8kmにある町で、ダビデ王の出身地で、（1サムエル 16・1、ルカ 2・4）新約聖書ではイエスの生誕地となり、旧約の預言が成就した場所です。（ミカ書 5・2、マタイ 2・1-6）ベツレヘム・エフラタとの表記は、他の同名地と区別するためです。

●第2朗読 ヘブライ人への手紙 10・5～10

ヘブライ人への手紙は、パウロの書簡と断定はできないのですが、ユダヤ人の信徒を意識した霊的な書簡です。

旧約の律法による動物の犠牲や供え物（詩篇 40・6-8）は真の贖いにはならず、イエスの体による献げ物が唯一、神の意志を成就するための贖いになります。何故なら、旧約の律法による動物による犠牲の献げ物は人が考えたことなので、一時的で永続的な贖いにはならず、神もこの不完全な犠牲を喜ばれず、（イザヤ書 1・11-17、ホセア書 6・6）大祭司も旧約（人）と新約（イエス）とでは異なります。旧約にはイエスの使命が預言（イザヤ書 53章）されており、神の御心を行うためにイエス自らが地上に来られました。神の救いの計画では、旧約での律法の犠牲を廃止し、イエスの一度だけの自己犠牲による贖いを永遠に有効とするのが、イエスによる第2の犠牲のことです。イエスの福音（死・復活・み言葉）を信じる者は完全に清められ（原罪が赦されること）、神の前で正しい者となり、神に喜ばれる聖なる者への生き方を目指す（1ペテロへの手紙 1・15-16）ことで聖なる者とされます。受洗後に罪の赦しを得るには、悔い改め、自分の罪を告白（1ヨハネの手紙 1・9）することやイエスに似た者へと変えられるように歩むことです。（ローマ書 12・1-2）、主の祈り（マタイ 6・12）、他者の罪を赦すことで赦される（マタイ 6・12）

●福音書朗読 ルカ 1・39～45

マリアは天使ガブリエルより、救い主を身籠（みご）もることを告げられた（受胎告知）（^{じゅたいこくち}）時、エリサベト（マリアの親戚）が妊娠していることを聞かされ、（ルカ 1・36）エリサベトと喜びを共にしたいとの思いから、彼女はエリサベト（ユダまでは約 80 km、数日の旅）に挨拶するために出かけ、彼女に会うと、胎内の子（後の洗礼者ヨハネ・イエスの^{せんくしや}先駆者）が踊ったのは、イエスが来たことを聖霊（当時は一時的に、聖霊降臨後は、信徒一人ひとりに恒久的に聖霊が住まわれる。ヨハネ 14・16-17）で感じたのでしょうか。エリサベトは、マリアが宿している子は「救い主」として既に認識しており、マリアの訪問に感謝し、主の恵みを謙虚に受けとめます。マリアは神の計画を信じ、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」（ルカ 1・38）と応答したことで、神よりの祝福を受けます。また、エリサベトも霊に満たされマリアを祝福し、互いに励まし合うことの大切さを教えています。

■第 66 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 サムエル記上 1・20～22、24～28

紀元前 11 世紀頃の出来事。エルカナの妻ハンナは、子ができない苦悩について、主に子を与えられるようにと熱心に祈ったのは、「あなたのはしための苦しみを目を留め、……男の子を授けてくださるなら、わたしはその子の一生を主にささげます。」と誓願ちいがんしました。(サムエル記上 1・11) この祈りに神は応え、男の子を与えられ、その名をサムエル(神が聞かれた)と名付けたのは、彼女の長い間の祈りを神が聞かれたからです。エルカナは毎年のように、シロに行き神に献げ物を奉納に行こうとすると、ハンナは子が乳離れするまで手元で育てた後、「生涯、そこにとどまらせる」と語ったのは、子を生涯シロの幕屋で神に仕えさせるためです。(サムエル記上 1・24-28) これは、自分の誓願を厳格に守り、神より与えられた一人子を惜しみなく神にお返しすることで、感謝を表します。ハンナは子が乳離れし後、「雄牛 3 頭、小麦粉、ぶどう酒」を献げ、神へ感謝の気持ちを表します。ハンナはエリ(祭司)に、自分が以前ここで祈りを献げ、この祈りを主が聞かれて子を与えられ、自分の誓いを果たすため、子を主に献げに来たことを語り、子をエリに託します。ハンナの行為は、主への完全な信頼と献身を表しています。

【エルカナ】

レビ族の血筋で、この家系は神殿や会見の幕屋で奉仕を行う役割を担っていました。エフライムの地域に住む一般的な信仰深い人で、毎年祭りにシロに行っては献げ物を奉納し、律法を守る家庭(サムエル記上 1・3)で、特に高い社会的な地位や富を持つ人物ではなかったようです。

【シロ】

旧約では、ここは重要な場所で、エフライムの山地に位置し、イスラエルの宗教的な中心地です。イスラエルの民が出エジプトの旅で、約束の地に入った後、最初に幕屋(神の臨在の場所)を設置した場所です。(ヨシュア記 18・1) シロは、イスラエルの民が神に従った時代の象徴的な場所でしたが、ペリシテ人に契約の箱を奪われた後(サムエル記上 4 章)は荒廃し、霊的な堕落と不忠実な出来事が起きます。(詩篇 78・60-61)

【契約の箱には】

十戒の 2 枚の石板。(申命記 10・2-5) マナを入れた金の壺。(出エジプト記 16・32-34) アロンの杖。(民数記 17・23)

●第 2 朗読 1 ヨハネの手紙 3・1～2、21～24

主が私たちをどれほど愛しておられるかを考えてみます。近くにあるスーパーに買物に行くとしします。人が生きるのに必要な空気が(詩篇 24・1)与えられ、目的地へ行く健康と道が示され、仕事が出来たことでお金が与えられ、必要な物を購入することができます。(ピリピ書 4・19) これらより、神の溢れる愛の恵みに触れることができます。イエスが再臨される際の似姿に私たちもされ、神の国に入ります。信徒は、神に咎められることがなければ、神の前で大胆な祈りと確信を持つことができるので、日々の生活においては自己反省をし、心に平安を保つよう努めます。神の掟(愛の掟や十戒)を守り、神に喜(もうこきとせ)ばれることを行動で示すなら、神への願いは適います。神の掟は互いに愛し合うことなので、相互に思いやり、掟を守る者には、神の存在を聖霊で知ることができます。

●福音書朗読 ルカ 2・41～52

イエスの両親は毎年、過越の祭りには都に上っていました。ユダヤ人の男子は 12 歳で宗教的責任を負うので、イエスもこの年齢になると、与えられた使命により神殿に留まりますが、両親はこの思いには気づかず、大集団の移動中に彼を見失います。都に戻ると、彼は聖書や律法への深い知識を持ち、人は彼の理解力と能力に驚きます。マリアは母として彼に注意をすると、彼は「神の計画に従った」まで、と語ります。マリアは天使ガブリエルより、彼は神より特別な使命が与えられていると告げられており、この気持ちを心に納め、両親と彼はナザレに帰り、両親の言葉に聞き従い、神の愛に育まれて成長していきます。

【宗教的責任】1.内面：聖書や教義に基づく生活。2.外面：隣人愛(マタイ 22・37-38)の実践、社会奉仕、宣教(マタイ 28・19)

■第67回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書60・1～6

第3イザヤと呼ばれるこの箇所は、バビロン捕囚（紀元前586年～紀元前538年）から帰還したイスラエルの民に対し、エルサレムの復興と繁栄への希望を預言します。世界は暗闇に覆われていますが、神はエルサレムに光を注ぎ、この光（希望）は全世界に輝き、この輝きを見た各国の王たちは集まります。そして、散らされていたイスラエルの息子や娘たちもエルサレムに戻ります。富は海を渡って運び込まれるので、都は富と繁栄に満ち溢れ、ミディアンとエファの人からは若いらくだが押し寄せ、シェバの人からは、金と乳香が持ち込まれ、イスラエルの民は喜び、エルサレムの繁栄は国際的になります。バビロン捕囚後のエルサレムの繁栄は、神がイスラエルと契約されたことの成就であり、この奇跡的な復興で、人々は神の偉大さと力を知り、神の栄光が世界に宣べ伝えられました。

【ミディアン】アラビア半島北西部に位置し、ヨルダンの一部に住む遊牧民で、アブラハムの子孫になります。

【エファ】ミディアンの子の名前で、この子孫が住んでいた地域を示します。

【らくだ】貿易を行う時に使い、荷物を長距離運ぶ移動手段として用いられました。

【シェバ】貿易が盛んな都市で、金は貴重な品となり、乳香は高価な香料として重要な交易品でした。

●第2朗読 エフェソへの手紙3・2、3、5～6

パウロは、神から異邦人への宣教の使命が与えられ、福音の秘められていた計画は以前、隠されていましたが、今はパウロに聖霊が働き、これを知ることができました。イエスによって、ユダヤ人と異邦人とが教会の一員となり、一体化されたことにより、神が約束された相続についても共同で引き継ぐことになります。

【秘められた計画】

- 1.ユダヤ人と異邦人とがイエスによって統合され、一体になること。
- 2.救い主の誕生と十字架の死による罪の贖いの計画。（ガラテヤへの手紙4・4、1ペトロの手紙2・24）
- 3.旧約時代の普遍的な救いは民族単位でしたが、イエスの救いは全人類を対象とします。（詩編22・27-28）
- 4.教会は、神の計画を具体的に推進する場所となる。

【相続内容】

- 1.神の国の民になること。（マタイ25・34）
- 2.永遠の命を得ること。（ヨハネ3・16）
- 3.霊的な祝福を受けること。（エフェソへの手紙1・3）
- 4.イエスの苦しみを共に苦しみ、栄光にも与ること。（ローマへの手紙8・17）

●福音書朗読 マタイ2・1～12

イエス（救い主）の誕生を星（民数記24・17）で知った東方（ペルシャやバビロン地方）の博士（異邦人）たちの3名は、エルサレムでヘロデ王と会い、「新しい王になられた方を拝みにきた」と言ったのは、神の救いの計画の到来を告げに来た、と考えます。これを聞いたヘロデ王は自己中心的な思いから動揺し、祭司や律法学者を集めてこの情報を収集すると、「ベツレヘム……イスラエルの統治者となる者が出る。」（ミカ書5・2）ことを掴みます。東方で見た星が、博士たちを道案内するのに従って（従順を表す）歩むと、イエスが誕生した場所で星は止まります。博士たちはこの家に入りマリアと幼子に会って喜び、黄金・乳香・没薬を献げて礼拝します。博士たちは夢でのお告げを受けたとおり、別の道で帰路につきます。ヘロデ王は権力や欲望に支配され、罪深く破壊的な行動として、ラマにおける幼児の虐待を実施します（エレミヤ31・15）が、この虐待も未来への希望となります。（エレミヤ31・17）

【贈り物】黄金：王としての権威を表す。乳香：神の子の象徴。没薬：イエスの死と埋葬を暗示しています。

■第 68 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 イザヤ書 40・1～5、9～11

ここは第2イザヤと呼ばれる箇所、バビロン捕囚時代についての預言がされています。

神はイザヤに、イスラエルの民に対する慰めを語るよう命じられ、「慰め」は、バビロン捕囚からの解放と罪の赦しを表し、「慰めよ」と2度命じているのは、神の約束は確かであると言っています。神はイスラエルの咎は償われ民を赦し、試練の時は終わり、メシアが到来するための備えをなすように呼びかけます。これは新約聖書で洗礼者ヨハネが、イエスの先駆者としての役目を果たすのと類似しています。(マタイ3・3) 山や丘は低くなり、険しい道は平らに、狭い道は広くなるとは、人が悔い改めることで神は道を整え、全ての人が神の救いに与ることができ、神の栄光と力が現されるとの預言であり、神の救いの計画は全人類に及ぶことが宣言されています。預言者イザヤはイスラエルの民に、高い山に登り、神の救いの知らせを力強く、また大胆に、多くの人々に語り伝えよ、と言っています。神の権威と救済を表し、神が力強い王としての統治が始まることは「神の力」です。救い主である神を、羊飼いの姿にたとえ、羊飼いは羊の群れを愛情深く守り導き、優しい存在だと言っています。

●第 2 朗読 テトスへの手紙 2・11～14、3・4～7

神からの救いは、イエスを通して全ての人に向けられます。世俗的な欲望は捨て、この世で信心深い生活を送り、物質的なことを得ることに固執することなく、主の再臨に希望を持ち備えよと教えます。イエスの自己犠牲による死で、私たちは罪から解放されて清くなり、民は「良い行いを熱心」にするようにと教えています。神が人類を救うのは、私たちの行いによらず、神の一方的な憐れと救いからです。私たちが受洗することで神と繋がり、聖霊が豊かに注ぎ出し、新しい命が与えられるので、神との親しい交わりが生まれます。神の前に正しい者(義)とされた私たちは、神より「永遠の命」の相続者とされ、これこそが信徒にとって最終的に得たい希望です。

【テトス】

1. クレタ島は、異文化の影響を受け、悪い習慣が広まり、(テトス1・12) 彼が教会の長老を任命した。(テトス1・5)
2. 信者に模範を示し、敬虔な生活をするよう指導し、(テトス2章) 神を証し (テトス2・7-8)、教会の基盤を固めた。
3. パウロの良き協力者であり、エルサレム会議に参加 (ガラテヤ書2・1-3)、コリントの教会を支援。(2コリント8・16-17)

【信心深い生活とは】

1. み言葉を学び、主が望まれる生き方を目指し (詩篇119・11)、隣人愛 (マルコ12・31) の実践について日々省みる。
2. 聖霊で自己の罪を知るのを求め (詩篇139・23-24)、己の弱さや過ちに気づき、足を知り、欲望の奴隷を断つ。
3. 罪を認め (1ヨハネ1・9)、心から悔い改めて主に立ち返り、神の愛に応えた生活をして、感謝を忘れない。

●福音書朗読 ルカ 3・15～16、21～22

民衆は、メシアを大望しており、ヨハネがこの人ではないかと思っていた。ヨハネは民衆に、わたしは水で洗礼を授けるが、メシアは偉く、聖霊と火で洗礼 (待降節第3主日で説明) を授ける。イエスがヨハネより受洗した理由は、①民衆と同じ立場に立つ (ヘブライ書4・15) ②神の義を成就させる (マタイ3・14-15) ③神の子として公生涯の開始を告げる。これらは、神の救いの計画を示し、イエスがこの中心人物であると宣言しています。神の声は、神とイエスの特別な関係を示し、彼の公生涯の幕開けであり、彼の神性と使命が明確に告げ示された瞬間です。

【メシアの大望理由】

1. 紀元前63年、ユダヤはローマに征服され、重税を課せられ、自由が奪われ、ローマからの解放を期待した。
2. メシアがイスラエルを回復するとの預言がされており、(イザヤ書9・6-7、エレミヤ書23・5-6) この成就を願っていた。

■第69回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書 62・1～5

この箇所は第3イザヤと呼ばれ、紀元前586年にエルサレムが陥落し、多くのユダヤ人がバビロンに連行され、ここから帰還後についてのことです。この時代、イザヤは活躍しておらず、イスラエルの回復と神との関係についての預言がされます。神はシオン（エルサレムのこと）の救いと回復を確約し、エルサレムの救いと正義が明らかにされるまで沈黙することなく、神はイスラエルが再び栄光ある民として回復し、全世界にその姿と新たな名を与え、栄光に満ちた姿に変えると言っています。エルサレムは神の手に握られた「冠」や「王冠」として描かれているのは、ここが特別に栄光と美しさを現す存在にしたいためです。今やイスラエルは過去の苦難や見捨てられた状態は終わり、神はイスラエルを「望まれるもの」と呼び、夫を持つ者として「結ばれた」と、新たな名を神はイスラエルに与え、過去の苦しみを癒し、神との新しい関係を築くことへの希望と祝福を表します。神はエルサレムを花嫁として迎え入れ、結婚を喜ぶ姿が描くことにより、神とイスラエルの民との関係を表しています。神はこの民を深く愛し、共に永遠に喜びたいとの希望が込められています。（イスラエルとの表現は、土地と民が一体化されています。）

●第2朗読 1コリントへの手紙 12・4～11

各信徒が異なる働きをするために与えられた賜物（ギフト）はいろいろありますが、これは全て同じ聖霊によるもので、これにより教会共同体が形成されます。奉仕の仕方にもいろいろとあり、これらも同じ主（イエス）のために行われます。賜物や奉仕などにはいろいろありますが、これらを可能にするのは、神が聖霊となって人の中で働いてくださるからです。聖霊によって与えられた賜物の使用目的は、個人の自己満足や欲望を満たすためではなく、教会共同体の成長や他者に喜ばれるために用います。聖霊を、①知恵としては、神の視点に立った洞察力や最善の解決策を見出し、人が正しい道を歩むためです。（1列王記 3・16-28）、（マタイ 22・15-22）②知識としては、特定の事柄についての超自然的な知識を与え、他者の心理状態を知り、必要な言葉を語る力や分かりやすく教える力のことです。（ヨハネ 4・16-19、使徒 5・1-11）信徒は、神に対して確信と信頼を持って従うことで、病を癒したりする能力が与えられます。（1コリント 12・9、マルコ 16・17-18、使徒 3・1-10）このような奇跡は、神の御心によって与えられた一時的な能力ですが、単なる奇跡に留まらず、信仰を強め、神の栄光を表すために用いられます。聖霊は奇跡を行い、神の言葉を預言し、異言で祈る能力が与えられます。これらは霊的に識別され、与えられた賜物や働きが神からなのかを見極め、この働きによる聖霊の実り（ガラテヤへの手紙 5・22-23）と教会の成長を確認します。これらの賜物を配分するについては、個人の実績や選択によらず、神の計画と聖霊に基づきます。

【異言】

聖霊の賜物の一つで、特定の信徒が聖霊に満たされた時、超自然的に出る言葉です。この言葉は、本人や他者には理解できない場合（使徒2・4）が多く、賛美、祈り、霊的な成長など、多くの目的を持ちます。

●福音書朗読 ヨハネ 2・1～11

ガリラヤのカナで婚礼に参加した弟子たちは、イエスの公生涯が始まったばかりで、参加者4～5名程度だったようです。婚礼の場で、「ぶどう酒が切れる」ことは、「世間に恥をさらす」と考えられており、マリアは我が子への信頼と、神の子への「執り成し」の両面から、何とかとかなるとの思いから、彼女は彼に結果を委ね、「ぶどう酒がない」と言ったのでしょう。彼は彼女に、「時はまだ来ていない」と言ったのは、彼の救いの計画は既にあったのですが、彼は彼女の願いに対して奇跡で応えます。ユダヤ人が儀式に用いている物で奇跡を行うことで、律法による清めから新たな恵みへの移行を表します。イエスの奇跡は、物理的な世界を超越し、彼が与えるものは、最も良いものなので、「良いぶどう酒」と言ったのです。この奇跡は、イエスが最初に行ったことから、神の栄光を表し、イエスが神から遣わされたメシアであることが明確となり、弟子たちも彼を信じます。

【カナ】イエスが幼少期を過ごしたナザレの場所から近い所です。

■第70回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 ネヘミヤ書 8・2～4、5～6、8～10

7月1日（ラッパの祭り）、民衆は自発的に集まり、律法を聞きたいと祭司エズラに願うと、彼は木の台に立ち、律法を分かり易く教える多くの助手（レビ人）たちと共に律法の書（トーラー）を読み聞かせ、民はこれに耳を傾けます。朗読された箇所はモーセ五書の内、申命記 28 章（祝福と呪い）、申命記 31 章（律法を読む命令）、レビ記 26 章（祝福と呪い）、レビ記 23 章（ラッパの祭りなどの規定）と思われます。民は全員、神の言葉への敬意を表して立ち上がり、神を礼拝する思いが民全体に満ちていたので、「アーメン（確かにそのとおり）」との唱和（しょうわ）の声生まれます。ユダヤ人はアラム語を話し、律法の書はヘブライ語で書かれていますので、レビ人が通訳をして解説したので、民は内容が理解できました。民は律法に照らして自らの罪深さを悔いて泣くと、エズラは民全員に、「今日は主に捧げる聖なる日だ。嘆いたり泣くな、主を喜び祝う日だ。」と励まし、感謝の日とするよう力強く語ります。

【ネヘミヤ】バビロン捕囚後、彼がペルシャ王（アルタクセルクセス）に城壁の再建許可と資金援助（ネヘミヤ記2・6-8）の許可がされた背景には、国の維持強化と政治の安定、彼への信頼（ネヘミヤ記1・11）、神の計画からでしょう。

【ラッパの祭り】神に仕える新しい年の始まりを記念し、特別な悔い改めと献身の時とし、（レビ記23・23～25、民数記29・1）聖なる日として、労働は禁じられていました。

【主を喜び】イスラエルの民は律法を守れず罪を犯しますが、神の愛は変わることなく、憐れみと赦しにより捕囚より帰還でき、再び神を礼拝できる恵みに感謝し、主が共におられることを喜びます。（詩篇103・8-12）

●第2朗読 1 コリントへの手紙 12・12～30

パウロは、教会共同体について、キリストの体を用いて説明します。体は一つですが多くの部分から成り立っているように、教会も一つですが、多様な人たちが集い一つの共同体を形成します。異なる民族が集まっても、聖霊の働きで一つの体となります。自分の体の一部にする行為を「霊を飲ませる」です。教会は多様な人が集って構成されており、自分と他者とを比較したり、自分を卑下（ひげ）することを戒めており、すべての人は重要で、教会のメンバーは異なる賜物や役割を担っている（ひげ）ので、調和が必要で、同質化することではないのです。神はその人にふさわしい役割や賜物を与えるので、これを尊重します。教会のメンバーは互いに他者の必要性や重要性を認め合います。人から見れば弱いと思う部分でも、体にとっては重要な役割を担っているように、神からすれば、すべての部分は尊く大切な存在なのです。互いに配慮し合い、調和を取り、一部が苦しめば、全体が共に苦しみ、一部に名誉が与えられると、全体が共に喜びます。信徒はキリストの一部なので、責任と重要性を自覚し、信徒に教師やその他、いろんな賜物が与えられたなら、これに応じた役割を担い、教会は一つの目的のために働きます。各人に与えられた賜物への感謝と、これを十分に発揮することが求められます。

●福音書朗読 ルカ 1・1～4、4・14～21

イエスが活動された出来事について、口伝（くでん）や初期の文書から、これらの記録を正確に編集することを試みようとしています。ルカは、イエスの初期のことから詳しく調べてこの福音書を書き、テオフィロ氏（神を愛する者、使徒 1・1）より教えられた内容は確実で信頼できると考え、この資料を纏（まと）め上げ、再度彼に献上し、個人へのお礼とこの文書を一般に普及させることを目的とします。イエスは荒野で試みられた後、聖霊を受けてガリラヤに戻ると、すでに彼の活動は評判になっており、会堂では多くの人々から尊敬されます。イエスはいつものように会堂に通い、イザヤ書を受け取り（イザヤ 61・1-2）朗読します。この箇所は、メシアの使命である救いが記されており、イエスは「今日、実現した」と、宣言したことで、彼がメシアであると解釈されています。ルカはこの宣言を、イエスの公生涯における最初のメッセージだ、としています。

■第71回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 マラキ書 3・1～4

ここでの使者は、新約聖書に記されている洗礼者ヨハネと考えられています。(マタイ 11・10、マルコ 1・2-3) 使者は主(メシア)が来られるために準備をする役目を担います。主(神又はイエス)は突然、神殿に来られます。主の到来は喜びと共に、恐れや試練の日にもなります。なぜなら、正し者とそうでない者とは選別され、不正な者は裁かれるからです。(マラキ書 3・5) 不純物を取り除き純粋な金や銀にするのを精錬と言ひ、主が精錬の火になることで、レビ人(祭司)を清めて神の前に立てる者にして仕えさせ、神に喜ばれる礼拝を行い献げ物をささげます。

【マラキ】

1. 旧約聖書における最後の預言者で、バビロン捕囚後(紀元前5世紀頃)に活躍されたと考えられています。
エルサレムの神殿は再建されますが、民の信仰は墮落し、神への礼拝は形式的となっていました。
2. 彼は、祭司や民の墮落を指摘し、誠実に神に仕えるように求め、希望の言葉を伝えます。(マラキ書 3・16-18)
礼拝では傷のある動物を献げたり、(マラキ書 1・6-14) 祭司が律法を正しく教えず、(マラキ書 2・7-9) 彼は民に、律法に基づいて生きるよう呼びかけ、救いと裁きのある「主の日」についても語り、終末の到来やメシアがこられることに備える使者(洗礼者ヨハネ)についても預言します。(マラキ書 3・1、3・23-24)
3. 旧約聖書の最後を締めくくる書で、新約聖書のメシア(救い主)到来に備えるための連結役を担います。

●第2朗読 ヘブライ人への手紙 2・14～18

人が肉体(血と肉)を備えているように、イエスも同じ肉体(受肉)を備えています。人が経験する死への恐怖は、人の心を束縛し、自由を奪って奴隷状態にするので、これよりの解放と、死を滅ぼすためにイエスは来られました。イエスの贖いによる救いの対象は、アブラハムの子孫であるユダヤ人と異邦人に向けられており、神の深い憐れみとイエスが大祭司となり、民の罪を贖います。

イエスは、すべての点において人と同一の行動をした背景には、神は人の心を見抜いておられ、主の行為によって、主と私たちとは同じ体験をしている、との共感を人に抱かせ、主と人との隔たりをなくしたい、との思いからです。ここでの学びは、経験の有無で人を理解するだけでなく、これを超え、他者の立場になりきり、今ある状況を想像(イメージ)することで、他者をより深く理解することができ、寄り添えるので、助け合いの社会が築けます。イエスは本来、人の試練や苦しみなどを経験しなくても、苦しむ者たちを助けることができる方なのに、イエスは人が理解できるよう、あえて行われたのです。

●福音書朗読 ルカ 2・22～40

イエスの両親は、初子(イエス)をモーセの律法に従って、神に献げるために神殿に連れて行き、貧しい犠牲を献げました。シメオンは、信仰深く正しい人で聖霊に満たされ、両親がイエスを連れて神殿にきた時、彼はイエスを抱き、神に賛美と感謝を献げ、イエスは救いをもたらす光であると告げます。この言葉に両親は驚きます。また、シメオンはマリアに、イエスは多くの人々を立ち上がらせるが、倒れの原因や反対されると告げ、マリアはイエスの使命は対立や拒絶を生み、苦しみを受けることを知って、驚いたことでしょう。預言者アンナもイエスを見て神に感謝し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々にイエスのことを話します。両親は律法の定めに従って献げ物をささげ終えると、ガリラヤのナザレに戻ります。その後イエスは成長し、知恵に満ち、神の恵みが注がれました。

【初子を捧げる】

1. すべての初子……人であれ家畜であれみな、これをわたしにささげて聖別しなければならない。(出エジプト記 13・2)
2. 出エジプトの旅が開始される際、最後の災は、エジプトでのすべての初子(息子や家畜の初子)の死です。(出エジプト記 12・29) 神はモーセに、家の戸口の両側と上部に羊の血を塗ることを指示。その夜、戸口に血のある家は過ぎ越(通過)し、初子の死を免れました。これを記念し、今でもイスラエルでは過越祭を行い祝います。

■第 72 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 イザヤ書 6・1～2、3～8

ウジヤ王が逝去された年、イザヤは神殿で幻を見る。御座に主が高く上げられた姿を見ると、^{すそ}裾は神殿を満たし、神の圧倒的な存在感と栄光を感じた。セラフィム（燃える者）は、神の栄光と聖性を^{まも}護る謙虚な天使で、神の命令を即座に対応できるよういつでも飛べる準備が整っています。「聖なる」を 3 度言ったのは、神の完全な聖性を現し、「万軍の主」は、神が天と地を統治する主権者となり、「主の栄光」は、宇宙全体に神の存在が及びます。「敷居の基が揺れ」たのは、神の栄光と^{いげん}威厳を表し、「煙」は、神の^{りんざい}臨在を表します。イザヤはこれらの幻を見たので、自らの罪深さを悟ります。心や言葉の罪を「唇の汚れ」と言い、「万軍の主を見た」人は、生きることが出来ない（死ぬ）と言われています。（出エジプト記 33・20）祭壇より運ばれ、神による浄化と罪の赦しを「燃える炭」と表現し、「炭」がイザヤの唇に触れたので、彼の罪は赦されて清められ、神の働きに用いられる器になります。イザヤは神より罪が赦されたことへの感謝と、神から与えられた召命に応じた場面での、旧約における救い・召命のプロセス（罪の自覚、悔い改め、赦し、信仰で義とされる流れ）は、新約聖書に引き継がれます。（創世記 15・6、ローマ書 4・20-25）

【ウジヤ王】（アザリヤ王とも呼ばれていた）

強力な軍隊を編成し、周辺国と戦って勝利し、領土を拡大しました。（歴代誌下 26・6-15）^{かんがい}灌漑設備や農業技術を改良し、ユダ（南イスラエル）の地は豊かになり、国の経済は発展しました。有能だった王も晩年は^{まんしん}慢心・^{ごうまん}傲慢となり、祭司の忠告も無視したので、神よりの罰は、重い皮膚病（らい病）を患います。王の死後は、（紀元前 740 年頃）国の政治・経済・宗教は混乱・^{こうはい}荒廃し、イザヤや他の預言者が活躍することになり、民衆には神の裁きや悔い改めをするように訴え、バビロン捕囚（バビロン捕囚は紀元前 586 年頃）を預言します。

●第 2 朗読 1 コリントの教会への手紙 15・1～11

パウロは、コリントの信徒たちが受け入れた福音を再確認します。信仰をしっかりと保ち続けることが救いに^{あずか}与れる、と言います。福音の中心は、聖書に預言されているように、①イエスがわたしたちの罪のために死なれたこと。②三日目に復活されたこと。（詩篇 16・10-11、イザヤ書 53・6-12）イエスが復活された目撃者として、ケファ（ペトロ）の名が^あ挙げられたのは、福音宣教の中心人物であり、（使徒 2・14-41）彼は、信徒たちにも信頼されており、多くの証人がいることから、復活の事実が裏付けられました。ヤコブは初期の教会（紀元 30 年頃）のリーダー（使徒 15・13-21）として活躍しました。パウロ（サウロ）は、過去に教会を迫害したことを告白し、彼が使徒になり、働くことができたのは、ただ神の恵みのお陰であり、この恩に報いたいとの思いが込められています。パウロは、誰が語ったのか、ではなく、自分が信じることの大切さを語っています。

【コリントについて】当時、ギリシャの主要な商業都市として繁栄していましたが、コリントの教会は外部からの影響と内部分裂により、道徳的に墮落し、多くの課題に直面していました。パウロは教会が抱える諸問題への対処策と福音について、教会の成長と一致を目指した内容を書簡にしました。

●福音書朗読 ルカ 5・1～11

ゲネサレト湖畔（ガリラヤ湖の別名）に、群衆は神の教えを聴きたくて集まります。漁師たちは網を洗っている所にイエスが来て、シモンの船に乗り沖に出るように依頼すると、彼がこの言葉に^{ただ}直ちに従ったのは、イエスへの敬意（ルカ 4・38-39）、言葉の力、^{けんきよ}謙虚さからでしょう。イエスは船に腰を下ろして教え始めます。この内容は（ルカ 4・43）、悔い改め、神への信頼と従順、不可能と思えることに対する神よりの恵みでしょう。イエスはシモンに、沖に出て網を降ろすように言います。プロの漁師であるシモンは、信仰の^{たんれん}鍛錬としてとらえて網を降ろすと、奇跡が起き大漁となります。シモンはイエスの神聖さと己の罪深さを悟り、仲間たちは魚の多さにびっくり^{ぎょうてん}仰天します。イエスは「恐れるな、これから人を漁る漁師になる」と、「心に灯をともし」言葉に、彼らは生活の糧を得るための船や網を即座に捨て、イエスに従います。

■第73回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 エレミヤ書17・5～8

エレミヤは、紀元前6世紀頃にユダ王国（南イスラエル）の末期に活躍した預言者で、民が犯した罪を指摘し、バビロン捕囚を預言し迫害されます。自分や他人の能力、物質的な物に依存する人は呪われ、神から離れるので、孤独や困難に遭遇し、生命力は弱くなり、枯れた存在になるので、神の祝福は遠のく。一方、神を信頼する者は祝福され、水辺に植えられた木のように繁栄し、水路のそばに根を張る木のように、困難（暑さや干ばつ）に直面しても枯れずに平安が保たれるので、神の業を成し遂げられ、豊かな実を結び、人生に平安と繁栄がもたらされます。

【呪い】

旧約聖書での「呪い」は、戦争、病気、飢饉や他の困難（バビロン捕囚）にも遭遇します。（申命記28・15-68）

新約聖書での「呪い」は、永遠の命を失うことで、神との関係が永遠に断たれ、（マタイ25・41）偶然による不幸への遭遇ではなく、神による報いと考えられています。また、自力や他力に頼ることで、エレミヤ書17・6にあるように、不安定な心理状態になるので、絶えず恐れや迷いが起こることでしょう。エレミヤ書2・13では、自分で築いたことも不完全で役には立たず、神への背きが呪いにつながる、とされています。神の教えに従うことで祝福（申命記28・1-14）されます。今を生きる者が、神との縁を断つと、虚しさや迷いが生じ、自分や世俗的な価値に頼ることになるので、不安定な状態が続き、平安を得るのは難しくなるでしょう。

●第2朗読 1コリントへの手紙15・12、16～20

コリントの教会では、人の死後における復活を否定する者がおり、パウロは、イエスの復活についての真実を語ります。イエスは既に復活されており、死者の復活はあります。イエスの復活は、罪が赦された証拠であり、もしも復活がないとすれば、信徒の信仰は虚しくなります。イエスを信じて亡くなった者も、復活がなければ、単なる滅びとなり、希望などありません。だが、イエスの復活により、彼らにも希望が与えられたのです。「人の思い」と「神の計画」にギャップのある人を「最も惨めな者」と言っており、前者は、イエスを信じることで、この世で成功し祝福されると考えられ、後者は、この世での成功や楽しみよりも、（2コリント11・23-27）復活によって「永遠の命」が与えることに確信を抱くことです。イエスが「初穂」（最初の実り）になられたのは、イエスの復活を信じることで、私たちの復活は「保証」されており、（1ヨハネの手紙3・2）肉体は神の国に入ることはできないのです。（1コリント15・50）

【復活】

ラザロ（ヨハネ11・43-44）は一時的には肉体は蘇生したのですが、やがて死を迎えました。復活は、単なる肉体の蘇生ではなく、神の力で新しい「霊の体」（栄光の体）にされ、復活する時には滅びることのない者となり、（1コリント15・42）復活後は二度と死ぬことはないのです。（ローマ書6・9）

●福音書朗読 ルカ6・17、20～26

イエスは、山から下り平地において、民衆に話し始められました。（マタイ5・3-12「山上の説教」とは異なります。）

1. 貧しい者（経済的に貧しくて苦しみ、神に助けを求める者）は、神により豊かにされます。
2. 飢えている者（神との交わりを求め、〔詩編119・103〕神の愛に飢え渴いている人）は、神によって満たされます。
3. 泣いている者（この世での苦難、悲しみで泣く者）は、神よりの慰めを受けます。
4. 人から憎まれ、ののしられ、悪者にされる時、（神に従い迫害を受ける者）神によって報われます。（マタイ5・11-12）
5. 今、富んでいる者（この世で富を得て、報われている者）は、神よりの慰めは遠ざかるでしょう。
6. 今、満ち足りている者（神を必要としていない者）は、神から遠ざかり、虚しさを感じる（黙示録3・17）ことでしょう。
7. 今、笑っている者（喜びや快楽を得て満足している者）は、やがては悲しむことになるでしょう。
8. 人にほめられるとき、（人の評価や称賛を求める者）神よりの評価は受けられないでしょう。（ヨハネ12・43）

神の国は、実にあなた方の間にあります。（ルカ17・21）

■第74回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 サムエル記上 26・2、7～9、12～13、22～23

サウル王はジフの荒野へ行き、ダビデを殺そうとします。きっかけは、民が「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」と歌ったことで（サム記上 18・7）、サウルは、王位を奪われるのではとの恐れや妬み、敵意からです。ダビデは王からの追跡を逃れ、ジフの荒野に身を潜めますが、住民に密告されます。ある夜、ダビデとアビシャイ（**ダビデの姉の子で忠実な勇士**）は、敵陣に忍び込み、サウル王とその護衛アブネルが眠っているのを確認し、アビシャイは「今がチャンス」だ、王を討てと進言しますが、ダビデは断固として拒否します。なぜなら「主が油注がれた方を殺すと罪に問われる」と言って（サム記上 26・9）、主の御心に委ねます。この態度は、律法に基づく信仰と深い敬神が表れており、（出エジプト記 22・28）ダビデは「復讐は神に任す」（ロ・マ書 12・19）との信仰に立ち、王の槍と水差しを持ち去ります。これは、自らが王を殺す力を持ちながら、あえてそれを行わなかった証拠にするためです。このような行動ができたのは、主が彼らを深い眠りに導いたからです。（サムエル記上 26・12）その後、ダビデは山の頂に立って、王の槍を掲げ、サウルの軍に呼びかけます。そして、「主は正義と誠実を報いてくださる」と語り、和解と赦しの姿勢を示しました。ダビデの言葉と行動は、力による支配ではなく、神への信頼と、信仰による統治の理想が見えてきます。

【ジフの荒野】

ジフはエルサレムの南、ヘブロン^{ヘブロン}の南東に位置する丘陵地帯で、隠れやすい地形です。ダビデはここを拠点に逃亡生活を送ります。後にヘブロンは彼が王となった際に最初に統治した町となり（サム記下 2・1-4）、ユダ族の中心地にもなります。この地は南北王国の分裂の舞台にもなっています。

■第2朗読 1 コリント 15・45～49

パウロは、人間の本质と復活の希望について語ります。「最初の人」はアダムであり、「神は土の塵^{ちり}で人を形づくり、生きる者とされた」（創世記 2・7）とあります。これは肉体に命がある存在であり、一時的な命を持つ者です。アダムは地に属し、罪を通して死をもたらししました。一方、イエスが「最後のアダム」となり、復活によって霊の命が与えた者となります。イエスは天から来られ、天に属し、永遠の命をもたらしした方です。人は最初にアダムのような肉体を持って生まれますが、イエスを信じることにより、復活する際は霊的な体に変えられます。肉か霊かのどちらに属するかで、その人の終わり方が決まります。私たちは今、土から造られたアダムの姿をしており、死を避けることはできませんが、イエスのように天に属する者の姿をも持つことができるとの希望が、信仰によって与えられています。復活の主^{キリスト}に信頼する者は、やがて栄光の体となって永遠の命にあずかります。（フィリピ書 3・21）

■福音朗読 ルカ 6・27～38

この箇所では、イエスが弟子たちに語った「敵を愛し、赦す」ことの大切さが語られています。神の子としてどのようにすべきかを教えています。憎む者には善を行うとは、怒りや憎しみに囚^{とら}われず、積極的に隣人を思いやり、無欲の愛を実践します。（マタイ 22・37-40）やり返すことで怒りの連鎖が続くのでこれを避けるために、頬を打つ者には、もう一方の頬を差し出し、赦しと寛容で関係を修復します。求める者には惜しみなく与え、この世のものに執着せず、すべては神から与えられたものと心に留め、取り返そうとしないことです。いわゆる「黄金律」であり、すべての交わりの基本は、人にして欲しいことを人にするということです。「おもてなし」や、相手の立場に立った生き方が求められています。自分に善くしてくれる人に善くするのでは、主からの報いはなく、イエスは、見返りを求めない無償の愛を十字架で示されました。敵をも思いやる愛こそ、神に報われる生き方です。分け隔てなく降る雨のように、神はすべての人に善を施します。私たちもこの憐れみに倣います。主の慈しみや深い憐れみに倣い、他者の苦しみに寄り添う心を養います。裁けば裁かれ、赦せば赦される。「自因自果^{じいんじか}」の原理を意識し、日々の言動を顧みることが大切です。惜しみなく与える者には、神の祝福が注がれるとの約束がされており、すべての恵みに感謝して歩むことが求められています。

■第75回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 シラ書 27・4～7

陶器は釜で焼かれることで強度が増すと同時に、欠陥の部分に分かるのと同様、人は会話を通して、普段では見えていない本心や欠点を知ることができます。特に、問題が生じた時や食事をしている時は、その人の本心を知る機会になります。良い木には良い実を結ぶ、とあるように、良い心の人は良い言葉が、悪意のある人には愚かな言葉が発せられます。(マタイ7・16-20) 人を知ろうとする際は、その人の言葉をよく聞くことです。

【シラ書】

- 1.成立時期：紀元前2世紀頃、イエス・ベン・シラ(ユダヤ人学者)によって、この書が編纂され、個人の名を取りシラ書となります。当時のユダヤでは、アレクサンドロス大王の遠征(紀元前4世紀)の影響で、彼はイスラエルの伝統的な知恵(律法や預言者の教え)の大切さを説きます。制作は、彼の孫が(紀元前132年頃、)ギリシャ語に翻訳。
2. 主なテーマ：①神を畏れること。②正義と誠実。③言葉と行動。④家族・社会・指導者の役割。⑤律法を守ることなどです。本書は、箴言やコヘレト言葉(伝道(の)書)と同様、知恵文学に属します。
3. 影響：ユダヤ教の正典(ヘブライ語聖書)ではなく、祭司たちはこの本を活用しました。カトリック・正教会では、旧約聖書の一部とし、プロテスタントでは外典(第二正典)です。本書は、日本の論語、菜根譚などとも類似しており、「言葉が人の本質を映し出す」との考えは、「口は災いの元」とあるように、日本の格言との共通点やユダヤの伝統に根ざした、普遍的な知恵が語られており、日本の道徳観とも重なります。

●第2朗読 1コリントの教会への手紙 15・54～58

パウロは、神の御業によって、イエスが復活されたことで死が滅ぼされ、もはや死を恐れことはなく、死に打ち勝ったことへの勝利宣言をします。イエスの再臨時は、「朽ちる現世の肉体」が「復活後には朽ちない霊の体」に変えられ、死は完全に滅ぼされます。(イザヤ書25・8) 死が勝利することなどない(ホセア書13・14)と、死に対する神の勝利宣言です。律法により、罪を知り、自分の罪を自覚することができます。(ローマ書7・7-13) イエスの十字架の死と復活により、私たちは罪から解放され、永遠の命が与えられました。これは神の約束なので実現したので、神の御心(み言葉)に従って生き、福音を宣べ伝え(宣教)、愛(愛の掟・戒)を実践することの労苦は決して無駄にならず、永遠の命が与えられているので、新しい神の国では、主と共に居ることが出来ます。(インマヌエル・アーメン)

【老い・死】門松や 冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし。 一休禪師

お正月が来ると、楽しい気分になりますが、老いや死に一步近づきます。現代人は、苦難は避け、快適な生活を得ようと、六欲を追い求めます。必ず到来する老いや死への備えをなすことで、現世も死後も共に幸福に生きることが出来ます。(詳細は、「み言葉と分かち合い」付録「ヨハネの黙示録概略図」「現生幸就」をご参照)

●福音書朗読 ルカ6・39～45

イエスが言われる盲人とは、霊的な盲目で、神の御心を正しく理解していない指導者(律法学者など)が人を指導すると、両者は共倒れするでしょう。弟子は師から学び成長します。師が間違った教えをすれば、弟子もこの影響を受けます。正しい師から学ぶなら、修行をすることで、わたしがしたことを、あなたがたもするようになる。(ヨハネ14・12) 正しい師か否かの判断は、①聖霊が真理に導くので、(ヨハネ16:13、1コリントへの手紙2・12-14) 聖霊に委ねます。②権威ある方の教えでも、み言葉や福音と合致しているかを確認します。(ガラテヤへの手紙1・8) ③師の実(生き方や行動)を見ます。(ルカ6・43-45) 人を批判する前に自分を顧みて、他者を裁かないようにします。「因果応報」良い行いには良い実が、悪い行いには悪い実が結びます。「因果益成」たとえ悪い結果になったとしても、主はこれを益にします。(ローマ書8・28) 心のありようが、言葉・行動・祈りとなるので、心をいかに鍛錬し自制するかです。

■第76回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 申命記 26・4～10

イスラエルの民は、収穫の初物（初穂）を神にささげる儀式では、祭司をとおして祭壇に供えるのは、神より民が祝福されていることへの感謝を表します。イスラエル民族のルーツを思い起こさせるのが「告白」で、ヤコブ（イスラエル・ヨセフの父）が「滅びゆくアラム人」のことで、飢饉^{ききん}が起きてカナン^{カナン}の地からエジプトへ移住します。その後、神の祝福を受けて人数は増え、大いなる民となります。成長するイスラエルの民に脅威^{きょうゐ}を感じたエジプト人たちは、彼らに過酷な労働を課して虐げます。民は神に助けを求め、神は彼らの祈りに応えます。神は、エジプトからの救済計画を立て、モーセを通して十の災いをエジプトに与え、紅海では海を分けるなどの奇跡を行い、救済計画を成功させ、イスラエルの民を約束の地（カナン）に導き入れます。この地は豊（乳）かで、神が祝福された（蜜の流れる）地で、イスラエルの民は神に初物を献げ、神にひれ伏し礼拝します。（創世記 17・3、ヨシュア記 5・14、黙示録 4・10）心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。（申命記 6・5、マタイ 22・37）とあるので、礼拝は心（内面）と体（態度）で表現するのが理想のようです。

【初物・初穂】^{はつもの はつほ} イスラエルの民は、律法に基づき収穫の初物を神に献げ、神への感謝を表しました。

1. 神に初物を献げることで、その後の収穫全体を神は祝福すると約束しています。（箴言 3・9-10、マラキ書 3・10、ヨシュア記 5・10-12）他の箇所では、出エジプト記 23・19、民数記 18・12-13、申命記 18・4、申命記 26・4-10、レビ記 23・9-14 初穂祭（過越祭後の安息日の翌日）には、大麦の収穫（物）の最初の束を神に献げます。新約では、イエスの復活が「初穂」（1 コリント 15・20）として献げられた日であり初穂祭なので、信者の復活はこの日以降に起きることが保証されました。
2. 初穂は、旧約では、神への感謝として物を献げ、神から祝福（良いものを受け取ること）される秘訣と考えていました。新約では、イエスの復活や聖霊降臨において、信者が初穂とされ、信者が聖化（神に仕える者になるためのプロセス）（ローマ書 11・16、ヤコブ書 1・18）されることになりました。

●第2朗読 ローマへの手紙 10・8～13

パウロは、神の救いのみ言葉は、人の口や心の手の届くところにあるので（申命記 30・14）、信仰によって、すぐに受け取れます。人は心で、イエスが「復活」されたことを信じ、口で「イエスは救い主」である、と宣言することで救われます。主を信じる者は「失望」することはない、（イザヤ書 28・16）との確信が得られます。神の救いは、ユダヤ人のみならず、異邦人にも、神を信じて従う人には与えられます。

【救い】

- ① 罪から解放され、神と和解すること。（ローマ 5:10）②神より永遠の命が与えられること。（ヨハネ 17:3）③神が創造された新たな国に入れること。（フィリピンへの手紙 3:20-21）④自力によらず神よりの賜物。（エペソへの手紙 2:8-9）

●福音書朗読 ルカ 4・1～13

イエスは受洗（洗礼者ヨハネより）後、聖霊に導かれ、神の子としての働きを開始します。荒野は試練の場（申命記 8・2-3）を表し、四旬節（レント）の原点（断食・祈り・悔い改め・イエスの苦しみを知る）であり、復活祭への準備期間です。40は、神とモーセとの出会いや（出エジプト記 34・28）四旬節の期間でもあります。自分の欲望を実現しようとするのを「石をパンに変える」と言い、「人はパンだけで生きるのではない。」（申命記 8・3）ので、欲望を断ちます。「全世界は神の支配下」にあり、「世界の権力と栄華の一切は、わたしを礼拝するなら与えよう。」との悪魔の誘惑を受け入れると、暗闇^{くらやみ}の生活が始まるので、「神である主を礼拝し、ただ主のみに仕えよ」（申命記 6・13）との言葉で、偽証^{ぎしやう}と誘惑を断ちます。[神の子なら……あなたを守らせる。]（詩編 91・11-12）と、悪魔は試みます。「あなたの神、主を試みてはならない。」（申命記 6・16）とあるので、「主の祈り」で、これを断ちます。その後、悪魔は次の機会を狙って立ち去ります。（ヨハネ 13・2、ルカ 22・3）

■第77回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 創世記15・5～12、17～18

神はアブラムに夜空を見せ、「あなたの子孫（イスラエルの民）はこのように数えきれなく増える」と約束しました。（出エジプト1:7）アブラムは神のこの約束を疑わず「信じた」ので、神は、彼の信仰を「義」と「認」めました。（ローマ書4:3、ガラテヤ書3:6）神はアブラムに、カルデヤのウルから（アブラムの出身地で、現在のイラクの南部に位置する古代都市）導き出し、カナンの地よりさらに広大な領土を嗣業（^{しぎよう}神の地を相続する。：エフェソ書1:11）とする約束をします。アブラムは神がこの約束をどのようにして成立させるかを尋ねると神は、「契約儀式」（裂かれた動物の間を双方が通る）について語ります。これは「契約を破ると動物（律法の献げ物と一致：レビ記1章～3章）のように裂かれます。」（エレミヤ書34:18-19）アブラムは深い眠りに^{おちい}陥り、イスラエルの民が今後経験するエジプトでの奴隷生活を「恐ろしい暗闇が^{のぞ}臨む」と言い、神の契約では、裂かれた動物の間を一方的【神の人に対する一方的な無条件の恵みの原点で、イエスの十字架を連想します】に通り返したことで、「神はこの契約」を保証したことになります。この契約によりイスラエルの領土は、エジプトのアリシユ（エジプトの川）からユーフラテス川までとなり、最盛期（^{ダビデ・ソロモン王の時代}）はこの地域を支配しました。（1列王記5:1）

【アブラムとアブラハム】

- 1.アブラム（Abram.）は「高められた父」（Exalted Father）家族や血統、地位を表し、個人的な名のようにです。
- 2.アブラハム（Abraham）は、「多くの国民の父」（Father of Many Nations）「お前の名をアブラムと呼んではならない、お前の名はアブラハム……お前を多くの国民の父とする。」（創世記17:5）この言葉で、全世界における祝福の源（創世記12:3）となり、信仰の父（ローマ書4:16-17）としての使命が明確になりました。

【信じた】

「確固たるものに頼る」ことで、「しっかり立つ」ことから、「確信する」となり、アーメン（Amen）と同じ「その通りです」との意味です。アブラハムの信仰は、「心で信じ」「態度」で表しました。（創世記12:1-4、ヤコブの手紙2:23）彼の「義」は、行いによらず、神への信頼にあり、神の言葉を疑うことなく、自分の全てを神に委ね切り、（ローマ書4:20-21）神の約束を受け入れます。「信仰とは、希望…を保証し、見えていないものを確認する」（ヘブライ人への手紙11:1）旧約の「義」は、新約に引き継がれ、（ローマ書3:28）彼の信仰は、「神の言葉を最後まで信じ抜きます」

●第2朗読 フィリピへの手紙3・17～4・1

パウロは、フィリピにある教会の信徒に対して、わたしに倣う者になりなさいと言います。（1コリントへの手紙4:16でイエスも言う）倣う内容は、①心②言葉③行動④祈り、の各ありようです。（具体的には、み言葉と分かち合いの冊子 付録^{げんせこうじゆ}現生幸就を参照）教会では、信徒間での信仰やみ言葉の分かち合い、励まし合いが求められ、世俗的な価値観、肉の欲望に執着する人たちを、「十字架の敵」と表現しています。「腹が神になる」との解釈には、律法主義と快楽主義があり、後者は自己の快楽や欲望で現世を生き、死後のことなど全く考えない人のことで、どちらも結果は滅びで、神との関係や永遠の命は断たれます。わたしたちの国籍は天なので、在日天国人となり、イエスの再臨時、肉体は栄光へと^{へんぼう}変貌され、新しい神の国に入る準備は整い、信仰生活にとって大きな励みとなります。「冠」は、この世の生活における栄冠を表し、たとえ試練や逆境に遭遇しても、主の知恵と希望を握りしめて歩みます。

●福音書朗読 ルカ9・28～36

イエスが話されてから（ルカ9:18-27）8日目のこと。3名の弟子【ペトロ：リーダーシップ（使徒2:14-41）がある。ヨハネ：霊的な洞察力があり、「神は愛なり」（1ヨハネの手紙3:16）を説く。ヤコブ：最初の殉教者（使徒12:2）となる。彼らに、霊的な体験をさせるために】とタボル山に登り祈を献げていると、イエスの姿は^{へんぼう}変貌して神性を現します。そこにモーセ（律法）とエリヤ（預言者）が登場し、旧約に記されたこと（イエスの受難・死・復活）の成就について話し合われます。主の栄光を見たペトロは^{たんろうてき}短絡的に仮小屋を提案したので、神は、自分の思いからではなくイエスより、「受難・十字架の死・復活（ルカ24:26）の計画を聞け」と語ります。

■第78回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 出エジプト記3・1～8、13～15

モーセはエジプトより逃れ、ミディアンで羊を飼っていた時、ホレブの山（シナイ山で後に十戒法を授かる場所）に来た。「柴が燃えているのに燃え尽きない」のは神の臨在を表します。（詩篇 19・5-6、核融合エネルギーを思わせます）神はモーセに、「履物を脱げ」と言う。神殿や聖なる場所に入る際、履物は汚れた物とされており（ヨシュア記 5・15）脱ぎ、神の前に立つ際は、へりくだりと敬意を忘れない。モーセの父（アブラハム、イサク、ヤコブ）の神は、今も変わることのない真の神です。モーセは神を見るのを恐れて顔を覆ったのは、「神への畏れ、栄光の光がまぶしかった」からです。（出エジプト記 33・20、マタイ 17・2）神は、イスラエルの民が苦しむ姿を見て、カナンの地（乳と蜜の流れる地）への救出計画を立てます。モーセは、「神がわたしをイスラエルの民に遣わした」と民に言えば、民は神の名を問うので、神は、「わたしは『ある』者である」と答えよ、と言ったのは、神は全能で、いつも共におられ、永遠に不変で、他者に依存せず独立した存在で、「永遠の名」だからです。イエスも「わたしで『ある』」と仰せになる。（ヨハネ 18・6）

【ミディアン人】モーセは、ミディアン（部族の名）の地でエトロの娘ツィボラと結婚します。（出エジプト記 2・15-22）

【カナンの地】いくつかの地名をまとめた総称で、旧約と新約において、神が計画された中心地です。

①エルサレム（2サムエル記 5・6-9）②ヘブロン（創世記 23・2-20）③シエケム（ヨシュア記 24・25）④ベツレヘム「パンの家」（ミカ書 5・2、ルカ 2・4-7）⑤ギルガル（ヨシュア記 5・9）⑥ベエル・シェバ（創世記 21・31）⑦ヨルダン（ヨシュア記 3・14-17）

これらの地は、神がアブラハムの子孫に与えると約束した地です。（創世記 15・18-21）神は、イスラエルの民をエジプトから救い出し、「カナンに導く」と宣言します。（出エジプト記 3・8）この地には3部族がいましたが罪（偶像崇拜他）を犯し、（創世記 15・16）神はこの民を裁き、（ヨシュア記 3～6章）イスラエルの民をこの地に導くのですが、（占領ではない）一部族がその後、イスラエルの民と一緒に、これが危機を招きます。（士師記 2・1-3）

●第2朗読 1コリントへの手紙 10・1～6、10～12

パウロは、コリントの信徒への手紙で、出エジプトでイスラエルの民が経験して神が臨在し所（出エジプト記 13・21-22）を「雲の下」で、紅海を渡って「海を通り抜けた」ので、（出エジプト記 14・22）受洗者となり、新たな者にされたのですが、不信仰を続けます。霊的な食物とはマナ（出エジプト記 16・4）であり、霊的な飲み物とは、モーセが杖で打った岩から湧き出た水のことです。（出エジプト記 17・6）この岩こそがイエスであり、人の魂を養うために必要な真の糧となるみ言葉（水）を与えます。神よりの豊かな恩恵をいただきながら、不信仰と罪で裁かれ、カナンの地に入れない者もいました。（民数記 14・29-30）神よりの祝福を受けるには、物質的なことへの価値観や肉の欲望（ガラテヤへの手紙 5・19-21、民数記 11・4-6）を満たそうとはせず、愛の掟（マタイ 22・37-39）と十戒（出エジプト記 20・3-17）を実践します。不平や愚痴は、神への不満と取られ、（民数記 14・2）神の怒を買って滅びます。旧約の出来事を、歴史物語として読まずに、終末へと歩む私たちへの警告と捉え、日々の自分を顧みては「悔い改め」、主に立ち返ります。（ヨエル書 2・13）

●福音書朗読 ルカ 13・1～9

ピラトは、殺されたガリラヤ人の血を神聖な儀式で献げ物に混ぜたことで、この儀式が汚され災難に遭遇したと、民はイエスに告げます。ピラト（ローマ人）は、ユダヤ人たちへの威圧と見せしめから血を混ぜたのでしょう。当時、「災難」に遭うのは、罪を犯した罰とみなしていました。民は、律法を知らながら自分の罪を認めず、他人を裁く態度を、「悔い改め」（反省して以後の行動を神に向き直す）ないと、永遠の命は与えられずに滅ぶ、とイエスは言います。シロアムの塔（エルサレムの近にある）が倒れて、18人が亡くなったのは偶然であり、罪とは無関係ですが、死は突然やってきます。ぶどう園は収穫（神の栄光）をもたらす神の国であり、（イザヤ書 5・1-7）いちじくの木は、信仰が熟成すると豊かな実を結ぶ木に見たてています。ここの主人は神、園丁はイエス。主人は実のない木（不信仰者）を見て、3年間（桃・栗3年）神の教えを知らながら、それを実践せずに、実らない木の伐採を命じます。園丁は主人に執り成して、1年の猶予期間を申し入れます。悔い改めには、正しい指導者より、適切な育成期間が必要になります。

■第79回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 ヨシュア記5・9、10～12

主は、ヨシュア（モーセの次のリーダー）に言われた。ギルガル（取り除く：ヨルダン川西岸）に到着したことで、エジプトでの奴隷の恥辱は取り除かれ、民の新たな歩みが始まります。約束の地（カナン）に入って初めての過越祭をエリコ（ギルガル近くの平野）で祝います。翌日、カナンで初めて収穫された麦（初穂）を、酵母を入れないパンや炒り麦にして食べます。（レビ記 23・10-11、14）神は民に、出エジプトの旅から 40 年間にわたりマナを与えます。約束の地に入り、荒野での歩みを終えたので、マナも不要となり、民は自らの土地から収穫を得る農耕生活へと移行します。

【過越祭】

律法の規定では、毎年ニサンの月（3～4月頃）で、14日の夕方に実施します。（レビ記 23・5、出エジプト記 12・6）酵母を入れない種なしパンは、出エジプトの際には、醗酵時間を短縮したパンとして、（出エジプト記 12・39）また、酵母（パン種）は「罪」や「腐敗」を表し、（1 コリント書 5・6-8）イエスもパリサイ派のパン種に注意するように言います。（マタイ 16・6）最後の晩餐で用いられたパン（マタイ 26・26）も、種なしパン（罪がない）です。

●第2朗読 2コリントへの手紙5・17～21

パウロがコリントの教会を去った後、偽牧師、偽使徒が現れ、パウロを非難する問題が起こり、パウロは真の使徒である、とコリントの教会宛に送ったのがこの手紙です。受洗により、イエスと信徒とは聖霊で結ばれ、新しく創造された者（ローマ書 6・3-4、ガラテヤ書 2・20）となり、過去の罪は既に無く、イエスの十字架の死により神との和解が成立しました。この和解のメッセージを他者に伝える任務を私たちは担っています。この宣教活動は、主ご自身が私たちを通して人々に語られます。また、「神との和解の道」はいつも開かれており、これを受け入れるか否かは、個人の自由意志に委ねられています。神は、罪を犯したことなどなく、聖なるイエスに人類の罪を負わせ、十字架上で罪人として裁かれたことで、私たちは神に義（正しい者）と認め（義認）られたのです。

●福音書朗読 ルカ 15・1～3、11～32

イエスは、罪人にされても拒絶されている人たちを愛し、彼の話しは希望を与え、食事を共にします。これを見たパリサイ人や律法学者たちはイエスを非難したので、彼は「悔い改め」についての喩え話をされました。父親（神）に息子が2人（兄は独善者・弟をば罪人）おり、弟は父に生前贈与（父の死を望む行為：動産が対象）を申し入れ、自分の財産を受け取ると、短絡的で欲望のままに行動した後に苦難を招く「自因自果」となります。弟は放蕩の限りを尽くし、持ち金を使い果たして飢饉に遭遇します。豚（汚れた動物）の世話（最も卑しく、罪に溺れた状態）をして、豚の餌「いなご豆」ですら食べられず、飢えと惨めさで苦しみ、自らの行動を反省し、父（神）のもとに帰る決意をします。苦しい時こそ遠慮せずに神に頼み、委ねます。（2コリントへの手紙 12・9）遠くから息子の姿を見つけた父は駆け寄り、たとえ罪を犯したとしても、父（神）の愛は変わらずに赦し、人には帰る場所がある、との希望を与えます。弟は「罪を告白」し、新たな歩みを始めます。父は「最上の服・指輪・履物」を息子に与え、子牛を屠り宴会をします。兄は弟の宴会を知って怒り、父に今まで忍耐した行為を語り、父を非難します。神の愛は無条件・無償の贈り物。父は兄に、「わたしは、あなたといつも共にいる。弟が生き返ったのだから喜ぶのは当然だ。」と言います。

【罪人】

罪を犯した人（売春婦・盗賊・犯罪者）、社会で軽蔑された徴税人（裏切り者、不正な取り立手者）、律法違反者。（律法を守れず貧しい者、病者）パリサイ人や律法学者は、詳細な律法の遵守を求め、庶民はこれを守れず「罪人」にされました。

【食事】

重要な行為で、「交わり」の象徴とされ、人との関係を認め合い、（ガラテヤ書 2・12）身分や立場によって厳格に区別されていた壁を、イエスは壊してまで食事をしたのは、神の国が近づき罪人を招こうとしたからでしょう。

■第80回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書 43・16～21

主は、イスラエルの民をエジプトから解放するため、エジプトからの脱出計画（出エジプト記14章）を断行します。神は自然も支配しており、^{こうかい}紅海を分けて海の中に通路を設けるなど、不可能なことなど何もない方です。「共に引き出し」とは、民を救い出し、エジプト軍を撃退することです。これは、「新しい神の救い」の始まりであり、昔の救いの業（バビロン捕囚からの解放・メシアによる救い・不毛の地に命の水を与える）を思い巡らさず、神は今も「新しいこと」が進行しているのです。ことに目を向けよ、と語ります。神の恵みは、イスラエルの民や自然界の生き物を対象に与えるので、最終的には全世界が神の存在を認めることになります。「荒野に水を、砂漠に大河を、選んだ者に水を」とは、イスラエルの民が、バビロン捕囚からエルサレムに帰還する際、厳しい環境に直面するので、「命を支える水」や食料を備える必要があります。民の帰還は、メシアによる救いの預言とも言われており、「水を与える」についてイエスは、「わたしが与える水を飲む人は、永遠に^{かわ}渴くことがない。」（ヨハネ4:14）と語っており、最終段階における新しい神の国では、「神と小羊の玉座から出ている水晶のように輝く命の水の川を、わたしに見せた。」（黙示録22:1）とあり、この箇所における預言は、バビロン捕囚の帰還から始まる神の壮大な救済のビジョンが語られています。

【共に引き出し】神はイスラエルの民を引き出し（救い出し）、圧倒的な力を誇るエジプトの精鋭部隊（戦車・馬・兵士）を紅海におびき寄せ、イスラエルの民を追撃（出エジプト記14:7）した軍隊を、神は滅ぼすと言っています。

●第2朗読 フィリピへの手紙 3・8～14

パウロは、かつてはユダヤ人としてファリサイ派に属し、キリスト教徒を迫害していましたが、イエスを信じることのすばらしさに出会い、今までユダヤ教徒として誇っていた一切のものを損失と見なしたのは、イエスとの交わりで、新たな「価値」と出会ったからです。人生を歩む上で、どのようなことに価値を置くかでしょう。

【価値】

1. この世での地位や名誉、自己の義（正しさ）や誇りなどの一切を「損失」「無意味」と考えた。（フィリピ書3:5-6）
2. 行いや功績によらず、イエスを信じる信仰による義（正しさ）のゆえに、神に受け入れられる。（フィリピ書3:9）
3. イエスの復活を信じる者には、「罪」と「死」に打ち勝ち、（ローマ書6:4-5、1コリント書15:54-57）「新しい命」（エペソ書2:5-6）と「希望」（ローマ書8:11）が与えられ「永遠の命」へと至る。（フィリピ書3:10）
4. イエスの苦しみに共にあずかり、イエスと共に生きる。（フィリピ書3:10）
5. 人が復活することで、イエスの^{にすがた}似姿にされ、神の国ではイエスと共にいる。（フィリピ書3:11）
6. 現状に満足せず、イエスに倣って行動することを目標にし、ひたすら走り続ける。（フィリピ書3:12-14）
7. イエスを知ること、神よりの知恵が与えられ、正しい人生の歩みに導かれる。（1コリント書1:24, 30）

●福音書朗読 ヨハネ 8・1～11

オリーブ山（エルサレムの東側）は、イエスと神との語らい（祈り）の場所です。（ルカ22:39）イエスが神殿に入り民衆を教えていると、律法学者たちは、彼を^{わな}罠にかけようとして、^{かんいん}姦淫の女を連れて来ます。律法（旧約）では、この女に石打（死刑）ちを命じており、イエスの考えを尋ねます。ローマの法律ではユダヤ人に死刑の権限はなく、死刑に反対すれば律法の違反者となり、訴えの口実を探ります。イエスは地面に、罪人の名や律法の一節を書いたと推測されます。イエスの無言の行為は、訴えた者たちや民衆の心を動かしします。イエスは、「罪を犯したことのない人が、……石を投げなさい」と言う。最後にイエスと女性の2人になり、彼は「罪に定めない」と語り、悔い改める者に赦しを与え、新たな歩みへと導きます。（ローマ書8:1）

【罪】①「あなた（神）の前で正しい者は一人もおられません。」（詩編143:2）②律法の姦淫罪は男女双方を裁くので（レビ記20:10）公正を欠き、偽善となります。（マタイ23:27-28）③他者の罪を暴くのも罪となり、人を裁くな。（マタイ7:1-5）

■第81回 み言葉の分かち合い

●入城の福音 ルカ 19・28～40

イエスは、オリーブ山の麓^{ふもと}で（ラザロ、マルタ、マリアの住まい）で、エルサレム入城の準備をします。2人の弟子への指示は、「ろばに乗って来られる」（ゼカリヤ書 9・9）との預言の成就です。「主の名によって来たる者に祝福あれ。」（詩編 118・26）道に自分の服や枝を敷いたのは、イエスを王として認められ、メシアとしての歓迎であり、「いと高き天には……人々に平和」（ルカ 2・14）と、天使が賛美します。ファリサイ派の人たちは、イエスをメシアとは認めておらず黙れば、石（創造物全体、イザヤ書 28・16、マタイ 21・42）は叫びだし、神の計画を止められずに神の栄光を表します。

●第1朗読 イザヤ書 50・4～7

弟子の舌は、神の知恵を持ち、人にみ言葉を正しく伝え、疲れた者を励まし、慰める使命を持ちます。弟子は神の教えを毎朝聞いて、これに従うことで、使命を果たします。弟子は神の命令には聞き従い、どのような困難にも退かず、肉体の苦しみ（打たれ、ひげを抜く）にも耐え、恥辱^{ちじよく}や嘲り^{あざけ}を避けようとせず、メシア（イエス）の受難を預言します。（マタイ 26・67、27・30）イスラエルの民や預言者は、神の助けを確信しており、どんな迫害にもひるまず、「顔を硬い石^{かた}」にするので動揺せず、最終的には辱め^{はずかし}られることもなく、神の業が明らかにされます。

●第2朗読 フィリピへの手紙 2・6～11

イエスは、神の立場を捨て、人になってこの世に来られました。もしイエスが、神としてこの世に来られたとの仮説を立て考察^{こうさつ}することで、人としてこられた理由が理解されるでしょう。イエスが神に対して「へりくだる」についての言動を思い巡らせてみてはいかがでしょう。自分を「無」にすることは、自分の思いを優先させずに、神の思いや他者の思いを優先します。イエスが神の前で従順になられておられる姿を黙想してみます。神に対すイエスの「愛に満ちた言動」や「神の御心に積極的に応答」したことにより、復活・昇天・栄光へと高く引き上げられ、「イエス・キリスト」を偉大な名とされ、天使や人類、地の下にいる死者や悪霊を含む全ての被造物は、イエスの前にひざまずき、「イエス・キリストは主（神・救い主）である」と告白し、神を讃美します。

●福音書朗読 ルカ 23・1～49

イエスの罪状は、ユダヤ人の王と名乗ったことへの反逆罪^{はんぎやくざい}。ピラトとヘロデ王（ガリラヤを支配）は、イエスに罪はなく、2度と騒ぎを起こさぬよう、鞭を打って釈放する予定でしたが、民衆の声に負け、イエスを最も残酷^{ざんぎやく}な十字架刑にします。イエスの十字架をシモンが背負ったのは、「自分の十字架を担^{にな}って、わたしに従いなさい。」（マタイ 16・24）とのみ言葉を思わせます。信仰深い娘たちに、未来（紀元70年ローマ軍に滅ぼされる。ルカ 19・41-44）に苦しみがかかることへの予告として「自分の子供たちのために泣け」言います。ローマ軍がエルサレムを攻めて破壊させ、極度の飢餓^{きが}や虐殺^{ぎやくまつ}に苦しみ、母親は我が子を養うことが困難（ホセア書 9・12、エレミヤ書 19・9）となり絶望へと陥^{おちい}るので「子を産めない女……ない乳房は幸いだ」と語り、最終的には地上に神の裁きが来ると語ります。人は神の裁きに逃げ隠れしようとしませんが、神の前から逃れることはできず、（詩編 139・7-12）悔い改めて神に立ち返ることを「人々は山に向……を覆ってくれ」言っています。イエスのことを『生の木』と言っており、一時的な苦しみを味わいます。罪人を『枯れた木』と言っており、終わりの日には神の裁きを受け、永遠の滅びへと向かいます。イエスの十字架（メシアによる罪の贖い）を理解も（無知）せず、「自分が何をしているのかも知らない」ので、神は忍耐し、彼らを救いへと招きます。（使徒 17・30）犯罪者の1人は「悔い改め」、イエスは彼に「今日、あなたはわたしとともにパラダイスにいる」と言われたので、天国に行ったことでしょう。「神殿の垂れ幕が裂けた」ことで、神と人との隔たりは取り除かれました。「父よ、彼らをお赦してください……分からないのです」（ルカ 23・34）とのイエスの言葉で、百人隊長は、人が死の直前ではとても語れない言葉だ、とのことから、「本当に、この人は神の子だった」と語ります。

■第 82 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 使徒言行録 10・34、37～43

復活節の主日、第 1 朗読は使徒言行録が読まれ、復活された主に力づけられ、聖霊に導かれた初代教会を思い起こさせます。この箇所は、ペトロがローマ軍のコルネリウス（百人隊長）の家に招かれ、「主なる神の霊が……わたしに油を注がれた」（イザヤ書 61・1）イエスについての説教をする場面です。イエスの公生涯は洗礼者ヨハネの受洗後、ガリラヤからユダヤ全土に広まった出来事について語ります。「聖霊と力により油注がれた」イエス（・救い主）は、神より任命された者として、「巡り歩いて……癒された」者は、イエスの業により救われたので、これはイエスと「神が共におられた」からであり、彼の言動は、神の御業でもあり、弟子たちは、かれの生涯を直接見た証人です。イエスを「木にかけて殺した」（申命記 21・23）十字架刑を、当時のユダヤ人は、「呪われた者の死」と見ていました。イエスが「3 日目に復活された」のは、旧約の預言（ホセア書 6・2、ヨナ書 1・17）と一致しています。エスの復活後に、「神によって選ばれた証人」に限定されて彼が現れたのは、①イエスの復活の証人としての使命が与えられていた。（使徒言行録 10・41、使徒言行録 1・8）②彼らによる世界宣教の計画が既に立てられていた。（ルカ 24・46-48）人が死ぬとイエスが裁き手となった私審判（ヨハネ 5・22-23、ルカ 16・19-31）を受け、陰府・煉獄・天国・地獄への選定がされた後、天国と地獄の者は、イエスが裁き手となり、最後の審判（マタイ 25・31-46、ヨハネ 5・27、黙示録 20・11-15）を受け、新しい神の国に入ることになります。（み言葉と分かち合い 付録 ヨハネの黙示録概略図を参照）主は、弟子たちにこれを宣べ伝えるよう求めており、旧約の預言者もイエスの救いについて証言しています。（イザヤ書 53 章）

●第 2 朗読 1 コリント 5・6～8

パウロは、コリントの教会の人々の中で罪を放置しているのを非難しており、パン種（酵母・イースト菌）の喩えで説明します。少しのパン種（罪）が教会に入ると全体に悪影響を及ぼすので信徒は、イエスの十字架の死により、古いパン種（罪）は取り除（過去の罪を脱ぎ捨て）かれて、イエスと新しい生き方を選択し決断したので、罪を起こさないように、種なしパンで過越祭を祝います。キリスト教では、この祭りの第 1 日目（除酵祭）が最後の晩餐の日となり、イエスを過越の子羊として献げ、これを聖体拝領（聖餐式）します。

【パン種】良い意味では、「天の国はパン種に似ている。女がそれを取って、3 サトンの小麦粉の中に混ぜると、やがて全体が発酵する」（マタイ 13・33）悪い意味では、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい」（マルコ 8・15）人に少しのパン種（悪意や邪惡）が入り込むと、全体が汚されると説いています。

●福音書朗読 ヨハネ 20・1～9

日曜日の朝早くマグダラのマリアはイエスの墓に行きます。入口の墓石を動かしたのは、「主の使い（天使）が……石を脇へ転がし、その上に座った。」（マタイ 28・2）イエスは既に復活されたので、石を動かす必要もないので、マリアや弟子たちのために動かしたのでしょう。もう 1 人の弟子とは、使徒ヨハネ（ゼベダイの子ヨハネ）で、ヨハネ福音書には名が記されてはいない。ヨハネが墓に入らなかったのは、彼の思慮深さやペトロへの気遣いからでしょう。亜麻布と覆いは離れた所にあり、遺体が盗まれたのではなく、イエスの遺体がないことを弟子たちは信じました。復活について、2 人はまだ理解していなかった。旧約には復活についての箇所（詩編 16・10-11、ヨナ書 2・1）があります。

【マグダラのマリアが最初に墓を訪れたのは】

1. イエスに「7 つの悪霊を追い出していただいた。」（ルカ 8・2）ことへの深い愛や献身の思いが強く、イエスを見届け、（マルコ 15・40）埋葬の場所も知っており、（マタイ 27・61）弟子たちは、迫害を恐れ隠れていました。（ヨハネ 20・19）
2. イエスの埋葬には時間的な余裕がなく、（ヨハネ 19・42）準備（遺体に香油を塗る）が不十分で、女性たちが埋葬を担っており、イエスの遺体に香油を塗るため早朝、墓に行きます。（マルコ 16・1）
3. 復活を最初に目撃するのは女性だと、主より「復活を伝える使命」が与えられていた。（ヨハネ 20・17-18）

■第83回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録5・12～16

使徒たちは、民衆が悩んでいることについて、イエスの名によって病を癒し、奇跡を行い、神の御業を人々に理解される形で現しました。使徒や信徒は「心をつつ」にして、エルサレム神殿の一角にあるソロモンの回廊に集まって主の教えを学んでいると、未信徒の中には、アナニアが不正をしたことで息が絶えた事件で、(使徒5・1-11) 神に対する恐れや、使徒たちに反感をいだいていた長老たちから、迫害を避けたいとの思いから、弟子たちの仲間に加わらない者がいた。しかし、民衆は福音に引き寄せられ、外部よりの圧力や不安があるにもかかわらず、信徒の数はますます増え、初代教会では、人による力だけでなく、神が共に働いてくださることで急速に成長しました。会衆は、使徒たちの良い評判が広がるので、希望と期待が膨らみ、病人を通りに運び出しては積極的に癒しを求め、神の救いに与ろうとしました。癒やしは完全なもので、地域全体にこの話しは広がり、一人残らず癒されました。

【心をつつ】教会成長のエンジン(核心)となる言葉です。

- 1.心をつつにした集いは、聖霊が働く土台となり、祈りが一致することで聖霊が降り、心が動かされ、奇跡が起きて癒され、人は教会に引き寄せられ、主は願いを適えてくださる。(マタイ18・19)
- 2.初代教会では、互いに財産を分け合い、支え合い、愛の姿を具体的な形で現すことにより、主と出会い、主と共にいることを実感できるようになります。(使徒4・32)

●第2朗読 ヨハネの黙示録1・9～13、17～19 (C年の復活節第2～6主日の第2朗読は、ヨハネの黙示録が読まれ、A年:1ペトロの手紙、B年:1ヨハネの手紙)

使徒ヨハネは、信徒と聖霊で結ばれて兄弟となり、数々の苦難に遭遇することで、イエスの苦しみと共に、今はパトモス島(エーゲ海にある小島)にローマ帝国より流刑にされます。「主の裁きの日」に、聖霊に満たされると、神の威厳を感じさせるラッパのような力強い明確な声を聞きます。「見ている幻を巻物に書き、7つ教会に送れ」と、主はヨハネに新たな使命を与えます。ヨハネが見た幻の場所は、人が思う「天国」ではなく、神が完全に支配される「新しい神の国」です。天国での人の姿は「魂」の状態なのでしょう。「新しい神の国」に入る際、復活されたイエスの似姿になります。教会を7つの燭台と言っており、この中央には栄光に輝くイエスがおられます。この姿を見たヨハネは、恐怖と畏れで倒れると、主はヨハネに手を置いて励ます。聖書の最初は、神は天と地を創造された。(創世記1・1)とあり、聖書の最後が、主イエスの恵み……ありますように。(ヨハネの黙示録22・21)までとなり、これが「最初の者であり、最後の者」のことです。イエスが生死の「鍵」を握っており、人が決めることはできない。

【7つの教会が選定された理由】①ローマ街道に沿った郵便ルートにあり、地理的なつながりがある。②当時の教会が抱えている問題点や長所がこれらの教会にあった。

【鍵】人の誕生と死を支配している鍵を固く握って持つておられる主。「天の下のすべてのものには、その時期があり」(コヘレト3・1) 主がこの鍵を持つことで私たちの命は保障されており、これが死後の希望となります。①人が自分の生死を決めることはできない。(詩編139・16) ②死の時を引き延ばすことを人にはできない。(コヘレト8・8)

●福音書朗読 ヨハネ20・19～31 (復活節第2主日の福音書朗読はここが読まれます)

イエスが復活された日曜日の夕方、弟子たちはユダヤ人やローマ兵を恐れ、信仰に挫折して戸に鍵をかけます。そこにイエスが入ってこられて真ん中に立ち、「平和があるように」との言葉は、①主を裏切ったことへの恐れと不安を取り去り。②主の赦しと和解がされ。③聖霊による新しい使命に力が湧き、弟子たちの「心に灯」が灯され、与えられた命を惜しまずに差し出し、イエスの宣教に生涯を献げる強い決意となります。この場面、この瞬間こそ、キリスト教における世界宣教の源流となり、人類史上、最も大きな影響を与える宣教活動へと発展します。イエスは弟子たちに罪を赦す権威を授け、トマスに「見ずして信じる者」になれ、と言います。この言葉は、私たちへのメッセージであり、①聖霊で復活されたイエスを信じる者になれ。②信仰とは「見ずに信じる」(ヘブライ人の手紙11・1、2コリントへの手紙4・18) ことで、黙想(イメージ)せよ。③疑わずに信じる者になれ。(マタイ14・31)

■第84回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録5・27～32、40～41

ペトロと使徒たちは、ユダヤ人の最高議会に連れ出され、「イエスの名による教え」をしてはならないと命じられたことを破り教えを広め、民衆より称賛を受けたことへの妬み、イエスを処刑した責任を議会や祭司たちに負わせようとしたことへの反発、権力への執着が彼らに働きます。使徒たちは、「人間に従うよりも神に従う。」と語る。「わたしたちの仕える神は、わたしたちを火の燃え盛る炉から救い出す……王よ、あなたの神々には仕えず、拝むこともしません」(ダニエル書3・17-18)と、火の炉に投げ込まれることも恐れない、この場面を思い出します。ペトロたちとダニエルたちの共通点は、命を惜しまず、「神こそ我が主」とする生き方の選択です。私たちの神は、イエスを復活させ、「導き手(リーダー)」であり「救い主」として神の右(権威・栄光を表す。詩編110・1、左は裁きや拒絶を表す。マタイ25・33-43)に上げます。使徒たちには、イエスの復活・昇天・救いの真理を証し(生きざま)する使命(ヨハネ14・6)が与えられ、聖霊の働きで「証しする人」に用いられます。私たちが迫害や苦難に遭遇した際は、み言葉と聖霊の導きにより、己を磨き上げる砥石(といし)にすることで、喜びへの信仰に変えられるでしょう。

【イエスの名による教え】

- ① 神はイエスをメシアとし、救い主とされた。(使徒2・36) ② イエスの死で罪が贖われ、復活された。(使徒4・10)
 ③ 復活したイエスは、今は神の右に座しておられる。(使徒3・15) ④ イエスを信じて悔い改め、受洗で罪は赦され、聖霊の賜物と、永遠の命が与えられる。(使徒2・38) ⑤ イエスを信じることで救われ、行いによらない。(使徒4・12) ⑥ イエスを信じる者は、聖霊で真理を知り、主に導かれ、証しをする人になる。(使徒1・8)

●第2朗読 ヨハネの黙示録5・11～14

ヨハネが見た場面は、神の御座と生き物と長老(24人の内、旧約の12部族・新約の12使徒)のまわりには被造物と幾千万もの天使たちが集い、神と小羊(イエス)を礼拝している壮大な光景。これは、やがて到来す『新しい神の国』の姿を描いています。十字架上で死なれたイエスに、7つの賛美の言葉「力・富・知恵・力・誉れ・栄光・賛美」が献げられ、天には天使、地には人や動物、地の下には死者や黄泉(よみ)にいる魂、海には魚や海に生きる被造物が神と小羊を賛美します。「四つの生き物」とは、「獅子ライオン」[子牛]「人間」「鷲」のような顔をした4つの姿を持ち、それぞれ翼を6つ持っています。(黙示録4・6-8)彼らが言った「アーメン(まことにそのとおり)」は、イエスに献げられた7つの賛美への返答です。長老たちは玉座にいる方を「ひれ伏し」て礼拝した。

【ひれ伏す】

聖書には、モーセが神の前で顔を伏せる。(出エジプト記3・6) イエスに癒しを求めてひれ伏し、(マタイ8・2)心のありようを態度で現す。具体的には、頭を低め、身を地に伏せます。この姿勢から、「主にすべてを明け渡す」との思いが湧き上がって心を作り、これが主への思いをさらに深めるでしょう。(毎日、家庭祭壇の前で実践しています)

●福音書朗読 ヨハネ21・1～19

イエスが復活された後、ティベリアス湖畔(ガリラヤ湖の別名)にイエスは弟子たち(7名)に姿を現します。ペトロは以前、ここで漁師をしていたのですが不漁となる。イエスは弟子たちに、「獲物はあるのか」と尋ねると「ない」と答える。イエスは「舟の右側(主の方向)に網を打て」との指示で網を打つと大漁になる。ペトロはイエスと知らずに彼の声に従ったのは、①「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」(ヨハネ10・27) ②「勘」や「ひらめき」からで、「主だ」との声で、ペトロはイエスを裏切った後悔と主の愛が、湖に飛び込ませたのでしょうか。岸では「炭火」がおこされ、弟子たちの心を先取りした「おもてなし」を思わせます。イエスは弟子たちに「今とった魚を持ってきなさい」との言葉は、主の正しさと仕えることへの暗示なのでしょう。イエスはペトロに、「小羊を飼い・世話をしなさい」と3度、念を押したのは、赦しと使命の重さを表しており、「わたしに従いなさい」と言われます。

■第85回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録13・14、43～52

パウロとバルナバはアンティオキアに着き、安息日に会堂で説教をするため、聴衆の前にある席に着く。集会が終わるとユダヤ人・異邦人・ユダヤ教からの改宗者に2人は、神の恵みに生きるよう励ます。アンティオキアにおいて1年間集会で教えた方々を初めて『クリスチャン』と呼ぶが、(使徒11:26) まだ「キリスト教」の名称はなく、信徒は「その道の者」「イエスの弟子」と呼ばれていました。2人の話しを聞こうと集まった人たちを見たユダヤ人の指導者は妬み、2人は彼らに、「み言葉……を拒絶するなら、異邦人の地に行く」そして、神は異邦人伝道を計画しており、「わたしはお前を諸国の光とし……わたしの救いとする」(イザヤ書49:6)との預言は、民族の宗教から世界宣教へのビジョン(未来像)を明確にすることです。これを聞いた異邦人たちは喜びの讃美を献げ、永遠の命に希望を抱き、神の計画を受け入れる者は皆、信仰に入った。主の言葉は地方全体に広まるが、2人は迫害され、足の塵を払い、(マルコ6:11) イコニオンへ行きます。弟子たちは迫害されても、聖霊に満たされた信仰者になります。

【バルナバ】

本名は「ヨセフ・慰めの子」(使徒4:36)と呼ばれ、キプロス島生まれのレビ人。信仰深く、聖霊に満たされ、(使徒11:24) 人を励まし、財産を売って教会に献げ、初期の教会における模範信徒です。(使徒4:37) パウロは教会を迫害しますが回心の後、バルナバがパウロを弟子たちに紹介します。(使徒9:27) 信仰が成長したパウロをバルナバはタルソスから連れ出します。(使徒11:25-26) この時の協力関係が、2人の宣活動の絆となります。(使徒13:1-3) アンティオキア教会(異邦人伝道の宣教拠点)で祈っていると、聖霊が「バルナバとパウロを主の働きのために祈れ」と語り、教会の祈りと^{あかし}接手を受けた2人は「最初の宣活動」へと旅立ちます。

●第2朗読 ヨハネの黙示録7・9、14～17

ヨハネが見た新たな神の国は、全世界から救われた群衆(あらゆる国民)が数えきれないほど集い、神とイエスの前に立ち、白い衣(殉教者・罪の赦しを表す)を身に着け、手にはナツメヤシ(勝利と喜び、ヨハネ12:13)の枝を持っていた。ヨハネが主に、あの方々をご存じですか、と尋ねます。天の秩序では、神とイエスの真理を人に伝える仲介役は長老や御使いが担っていた(モーセが神の声を伝えたように)と考えられており、長老がヨハネに、[彼ら(殉教者・大難難者)は信仰のゆえに迫害や試練を受け、イエスの十字架の死(血)によって罪が^{あがな}贖われた(白い衣を着ける)]と語ります。群衆は永遠に神を礼拝し、主と共に住まうことを、幕屋を張ると言い、これは神との親しい交わりを持つことができます。神の国において群衆は、物質的な欲望(6欲)の渇きから解放(ヨハネ4:15)されます。この世では、イエスが救い主(牧者)であり、命の泉(永遠・聖霊・神の恵み)の源(黙示録21:6)なので、彼を信頼することで、たとえ苦難に遭遇しても「涙はぬぐわれる」(^{なぐさ}慰め・^{いや}癒しが与えられる)民となります。【殉教者：個別案件の死者。大難難者：終末で試練を受けた者。】

●福音書朗読 ヨハネ10・27～30(復活説第4主日は、ヨハネの福音書10章 羊飼いとその羊について読まれます)

イエスは「羊飼い」従う者が「羊」です。「従う」とは、信徒・未信徒を問わず、主の声を聞いて信じ、み言葉や聖霊の導きで、生き方を主に向かって歩むことです。主との祈りを通して親しい交わりを持つことで、「わたしは彼らを知っている」ことになり、最初のステップが洗礼です。洗礼は「イエスに従う」ことを「公に表す信仰の行為」です。主の命令には「すべての国の人々を弟子にしてください。父と子と聖霊の名に入れる洗礼を受け、わたしがあなた方に命じたことを、すべて守るように教えなさい。」(マタイ28:19-20)との実践です。ただ、洗礼が形式的(ローマ2:28-29)に終わらせないためには、聖霊の導きを求めて日々の実践(愛の掟)をします。主を信じる者は、永遠の命が与えられ、新しい神の国では、確実な救いと神の守りで、どのような悪にも、主の手から切り離すことはできない。信徒は神が主に託した存在なので、この世のいかなる力や権威にも屈することなく、神と主とは同一の存在「目的・働き・志」で一致しており、主の両手でガチッと^{つか}掴まれ守られており、「安心」して従って行くことができます。

■第86回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録14・21～27

この箇所は、第1回の宣教ルートを出発して帰路につき、出発点のアンティオケア（トルコ）に着くまでのことが記されています。この活動中、弟子たちを力づけ励ましたみ言葉は、①「お前とともにいる。わたしはお前から離れることも、お前を見捨てることもない。」（ヨシュア記1・5）②「恐れてはならない。わたしがお前とともにいる。……あなたの苦みの時に、わたしはあなたを助け、あなたを強める。」（イザヤ書41・10）③「わたしはお前を永遠の愛をもって愛してきた。……わたしはあなたを愛している。」（エレミヤ書31・3）④たとえ、女^{母親}たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。（イザヤ書49・15）パウロたちは教会を訪れ、長老たち（指導者）を選ぶリスクを恐れることなく取り組みます。当時のアンティオキア教会（シリア）は異邦人宣教の重要拠点でもあり今回、2人が体験した福音宣教では、多くの異邦人がイエスを受け入れ、信仰の扉が開かれた成果を報告します。

【主な経路と計画】

アンティオケ（シリア・出発地）⇒セレウキア（港町）⇒サラミス（キプロス島）⇒パフオス（キプロス島）⇒ペルゲ（パンフィリア地方）⇒ピシディアのアンティオケ⇒イコニオン⇒リストラ⇒デルベ（終点）（帰路）⇒リストラ⇒イコニオン⇒ピシディアのアンティオケ⇒ペルゲ⇒アタリア（港町）⇒アンティオケ（シリア・帰着地）

この宣教は、事前にルートなどの計画はなく、アンティオケア教会で、「聖霊がバルナバとサウロを特別な働きに召された」（使徒13・2-3）とあるように、神よりの召命で進められました。最初のキプロス島はバルナバの出身地です。小アジア（現トルコ）に渡ると、大きな都市を拠点として、ユダヤ人の会堂がある町を優先して選びました。迫害や危険が生じた場合は次の町に移動することにして、状況に応じて柔軟にルートを変更したようです。

●第2朗読 ヨハネの黙示録21・1～5

今の世界は終わり、新しく神が創造された国の始まりのことが「新しい天と地」です。古代の人は「海」には嵐などが起こることから、恐ろしい生き物が住むと考えられ、悪や不安の象徴でしたが、ここには「海がなく」この存在はなくなります。神が用意された完全な共同体のことを「新しいエルサレム」と言い、神と人々が永遠に住む場所のことです。イエスを信じて救われた人の「花嫁」です。イエスが「花婿」で、花婿と花嫁との結婚により、神と人々が永遠の交わりに入ります。神の幕屋とは、旧約時代ではここに神が臨在されておられる場所と考えられており、この神が人と共に住まうので、「人は神の民となり、神は民の神となり、インマヌエル（神は我らと共にいる・マタイ1・23）のみ言葉が成就する場所となります。」ゆえに、悲しみ、苦しみ、嘆き^{なげ}、死、罪など、以前にあったこれらはなくなり、神は万物を新しくされ、世界と人のありようを一変させ、新しい神の国の到来を告げます。

●福音書朗読 ヨハネ13・31～35 復活節第5主日の福音は、最後の晩餐でイエスが語る言葉を読み、主の掟が復活で成就したことを味わう。

最後の晩餐で、ユダがイエスを裏切り席を立つ場面です。イエスはユダの裏切りにより、彼の十字架の死と復活が、「イエスが偉大な名」として高められることで、（フィリピ書2・9-10）神はイエスにより「栄光」を受けることになります。人への救いの完成により、「天は神の栄光を語り、大空はみ手の業^{わざ}を告げる。」（詩編19・2）「聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ」（イザヤ書6・3）となります。弟子たちはまだ不安を抱き、幼い子のような「子たち」と言っています。イエスは復活後、弟子たちとしばらく一緒にいますが、天に帰るので会えなくなります。イエスは新しい掟として、「互いに愛し合いなさい。」と語ります。律法の掟で最も重要なのは、「神と隣人への愛」（マタイ22・37～40）です。律法の掟を「形式」や「義務」とは考えずに、彼が実践した①弟子たちの足を洗う、へりくだりの奉仕。②十字架で自の命を捨てた自己犠牲。弟子たちや信徒同士も、イエスに倣い「互いを愛する」を実践（忘己喜主・忘己喜他・ありがとう）することで、未信者の方より、イエスの弟子と思われることで、「地の塩・世の光」の役目を果たせるでしょう。

■第87回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録 15・1～2、22～29

パリサイ派（ユダヤ教徒）の人が、アンティオケア（異邦人への宣教拠点）に来て、「割礼（創世記 17・10-11）を受けないと救われない」との教えと対立で論争が生じます。パウロ・バルナバと数名がエルサレム教会（初代教会・本部）に行き、この件を話して、使徒たちや長老に委ねます。公会議での結果は、アンティオケア教会にパウロとバルナバ、他の代表を派遣し、公式文書（手紙）を届けます。この内容は、①異邦人の信徒に割礼を義務づけず、偶像に献げられたもの、血と絞め殺した動物の肉、淫乱（いんらん）を避ける。②律法の割礼を異邦人の信徒から解放し、「真の救いは信仰による」ことにする。③現地の信徒から「エルサレムでの決議は主の教えなのか」との疑問が生じないように、パウロ・バルナバ・使徒・長老たち（ユダ、シラスら）を現地に行かせます。

【割礼】

男性のみに実施されたのは、子孫を誕生させる肉体を持ち、これに印（しるし）をすることで、神との契約とした。旧約での「外面の割礼」から、新約では「心の割礼」（悔い改めや回心）へと移行し、（ローマ書 2・29）これが「洗礼」へと発展し、イエスの言葉が聖書とに文書化される際、「洗礼」（マタイ 28・19）の言葉が使用されたようです。「心と耳への割礼」（使徒 7・51）とは、「霊的な割礼」（神に心を開き、み言葉に聞き従う）のことです。旧約の「心の割礼」としては「割礼を受け……心の包皮を取り去れ」（エレミヤ書 4・4）「心に割礼を施し」（申命記 10・16）があります。

●第2朗読 ヨハネの黙示録 21・10～14、22～23

天使がヨハネに見せた都とは、神と人々が共に住まう新しい神の国（永遠の住処）です。都は「神の栄光に輝き」都の城壁（じょうへき）と12の門の入口（救いへの門）には12部族の名前が刻まれているのは、神の救いはイスラエル（アブラハム、イサク、ヤコブ…）から始まったので、この名がつけられます。イエスは言う、「わたしは道……わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（ヨハネ 14・6）と、主を信じる者こそが、新しい神の国に入れます。城壁の12の土台には12使徒の名が刻まれているのは、12使徒の教えと証し（生きざま）を土台にした救の完成を表します。神と主が都におられて礼拝をするので、神殿は不要となり、神の栄光と小羊が都を照らし、太陽も月も無用です。ここでの学びは、①悔い改めや回心から受洗し、罪・死の闇を断ち、新しい人生を歩む。②聖書を読み、み言葉に慣れ親しむ。③聖霊の助けを得てイエスを理解する。④主に倣った日々を歩み、新しい神の国に入る準備をする。

【神の栄光に輝き】

神の栄光を、五感や言葉で思い描くのが難しいのは、霊的だからでしょう。聖書では神の栄光を「光・火・雲・宝石」などに例えます。碧玉（へきぎよく）（ジャスパーのような輝き）は、「透明さ・輝き・純粋さ」を強調し、霊的な性質を、「宝石の輝き」と言います。旧約に、「主の栄光は……焼き尽くす火のように見えた。」（出エジプト記 24・17）とあるのは、神の栄光の一部を「火」で表しているからで、黄金は「栄光・純粋・尊さ」を象徴としています。「透き通ったガラスのような純金であった。」（黙示録 21・21）とあるのは、黄金は神の臨在を象徴し、「ガラスの金」は「この世にないほど清く、霊的な金」を表し、「金」は純粋で、腐らず（不変）、価値も高く、神の栄光を表すのは不可能としても、「黄金の輝き」との表現で、理解されるでしょう。

●福音書朗読 ヨハネ 14・23～29（この主日では、最後の晩餐の席で、イエスが弟子たちに約束した、聖霊について読まれます）

主を愛する者は、わたしの言葉を守る。（主に心に向けること）とあり、人が100%これを行うのは不可能であり主は、聖霊を内なる教師（導き・教え・思い起こさせ）にします。（1コリント書 2・10、ローマ書 8・26）これで人の内に神と主が共に住まわれ日々、み言葉を充電（MyBible シリーズみ言葉をインプット）しておくことです。主の昇天（ダニエル書 7・13-14 預言の成就）に伴い、弁護者（そばに呼ばれた者）として聖霊が遣わされます。主が与える平安は一時的なものではなく、永遠に続きます。（平和は外的安定、平安は内的安定・霊的な安らぎ）主の昇天を「去って行く」と言い、主の再臨を「戻って来る」と言います。信徒の死去は、神のところに帰るので（天国に帰還・凱旋する）喜びになるはずで

■第 88 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 使徒言行録 1・1～11

ルカ（ルカ福音書を著す）は「テオフィロ様」にこの書簡を送付します。彼は信仰に関心を持つ人物のようで、ルカにも名前が出ています。（ルカ 1・3）。弟子たちがイエスの教えを世界に伝える使命（マタイ 28・19-20）のことが「聖霊による指図」です。イエスは復活後の 40 日間、弟子たちに「新しい神の国」について語ります。聖霊を与えることが神の「約束」です。（ヨハネ 14・16-17）。「水による洗礼」は悔い改めのしるしで、イエスの「聖霊による洗礼」は、神の力・命と結ばれた霊的な経験、知恵・変革が伴います。弟子たちがイエスに、「国を建て直す時」について尋ねたのは、政治的に国が変わることへの期待からです。神が霊的に支配し、愛・正義・平和のある新しい神の国のことをイエスの言う「神の国」で、これが到来する「時期は神の御手にある」（コヘレト書 3・1）と語ります。「聖霊が……降ると、力を受ける」ので、神より勇氣・愛・知恵が与えられ、自分の力ではなしえないことが、可能となります。この力により、弟子たちは「イエスの証人」となり、現在の環境で言動を通して、主を証しする存在になります。旧約で「雲」は神の臨在を表し、（出エジプト記 13・21）イエスが神の栄光に包まれている状態を「雲」に覆われていると言います。イエスが昇天されるのは、地上「神の愛」と「失われた人々を探して救い」（ルカ 19・10）新しい神の国に導く使命を終えたからです。天使が「イエスは……再び来られる」と語り、イエスの再臨を約束したのは、信仰者に希望を与えよ、との神の預言です。（黙示録 22・7）

●第 2 朗読 ヘブライ人への手紙 9・24～28、10・19～23

旧約時代、大祭司（罪のある人）は年に 1 度、幕屋（神が臨在する場所）に入り、雄牛・雄羊の血で民の罪を贖^{あがな}います。（レビ記 16 章）イエスは人が造った写し（模倣^{もほう}）の聖所でなく、天上に臨在されます。地上で、イエスは十字架の血で人の罪を贖い、（マルコ 10・45）彼の復活で永遠の命が与えられ、（ローマ書 6・4-5）神より救いの「扉を開く鍵」を持っています。天上では、イエスが自らの「血」を携え、彼が持つ鍵で「至聖所（神の御前）」に一度入り、罪の贖いを完成させます。（ヘブライ人への手紙 9・12）人は死後に裁かれます。（私審判：イエスへの信仰と行動で、陰府・煉獄・地獄・天国に選別）イエスも一度、人の罪を贖うために死（陰府）に、2 度目（再臨）は彼を待望する人の救いを完成させるために現れます。（マタイ 24・30-31）わたしたちは、天の聖所に入れると確信するのは、主の血潮により「新しく生きる道」（ヨハネ 14・6）が開かれ、信じる者は「インマヌエル」とあるので、神に近づくことができるからです。心は十字架の血で、体は洗礼の水で清められたので、偽りのない信仰、悔い改め、従順な姿で神に近づけます。（詩編 51・19）罪の赦しと清めにより、新しい礼拝（神との交わり）がもたらされました。永遠の命を「約束」してくださった主は、真実な方で、（民数 23・19）公に言い表されたこの希望を持ち続け、み言葉を学び、祈り、互いに励まし合います。（ヘブライ人への手紙 10・24-25）

●福音書朗読 ルカ 24・46～53

イエスは弟子たちに、「メシア（救い主）が苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する」と語ります。（ホセア書 6・2、詩編 16・10、※イエスは 12～30 歳の間、旧約聖書を学ばれた）イエスは預言通り、人と同様に陰府^{よみ}へ下り、（1 ペトロへの手紙 3・19）ここにおられる方々にも、救いの宣言をします。「悔い改めと罪の赦し」はイエスの名（権威と救いの力）によって、あらゆる国へ宣べ伝えられます。使徒 4・12 宣教が「エルサレムから開始された」のは、神の計画の中心地がシオン（エルサレム）だからです。（イザヤ書 2・3）ここから全世界に福音が発信されます。弟子たちはこの「証人」となり、見聞きした事実（イエスの死・復活・奇跡）を語る使命を受けます。父が「約束」したのは「聖霊」のことです。（ヨエル書 2・27、使徒 2・1-4）聖霊の力を「高い所の力」と言い、弟子たちはこの力を得て恐れず福音を宣べ伝えます。イエスが弟子たちをベタニアに連れて行かれたのは、ラザロを甦^{よみがえ}らせた復活の地だからです。（ヨハネ 11 章）祝福をしたのは、彼らに神の平安と使命を与えるためです。（民数記 6・24-26）イエスが天に上げられた後、弟子たちは伏し拝み、大喜びでエルサレムに戻ったのは、イエスが今も生きておられ、再び来られるとの希望が与えられたからです。（使徒 1・11）神殿では絶えず神をほめたたえ、救いの御業^{みわざ}への感謝と喜びが彼らの心に満ちています。（詩編 100・1 編）主を証し、神の約束を信頼して日々、主を賛美するのは、私たちの務めと言えます。

■第89回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 使徒言行録2・1～11 この箇所は、毎年読まれる大切なみ言葉です。

この箇所は、キリスト教が全世界の宣教に踏み出す出発点であり、聖霊の働きと教会の誕生日の場面です。

五旬祭は、主のご復活から 50 日後の祝日です。この日、各地からエルサレムへ信徒たちが、巡礼にやってきます。
そして、120 名程（愛弟子と信徒）が祈っていると突然、激しい「風」のような音が天から響きます。旧約で「風」は神の霊を象徴しており、（エゼキエル書 37・9-14）新しい時代の幕開となります。「炎」は神の臨在（出エジプト記 3・2）を、「舌」は言葉と宣教を表します。弟子たちは聖霊に満たされ、多言語で語った内容は「神の偉大な業」のことで、
①主の十字架の贖い ②復活 ③永遠の命です。人々はこれらを自の故郷の言葉で聞きびっくり仰天。これはバベルの塔で人類の言葉が分裂（創世記 11・1-7）したのを、聖霊が一つにしようとしたのではなく神は、福音で人々を再び一つの民にしようとしたのです。（ヨハネ 17・21）弟子たちの多くはガリラヤ生まれで、特別な能力はなく、多言語で話せたのは、神の力（奇跡）です。列挙されている地域は当時、ローマの支配下にあり、神の救いは全世界を目指しています。聖霊降臨で霊が働き、恐れを希望に、語る力が与えられ、今もなお主の偉大な業は続きます。

※1.収穫祭の山場の日、「七週の祭」と同一。神は、旧約の祭りと新約の救いの調和を計画された祭日。過越祭は、主の死と復活の期間の祭り。

●第2朗読 ローマの教会への手紙8・8～17

自分の欲望（ガラテヤへの手紙 5・19-21）や価値観を優先する人のことを、「肉の支配下にある者」と言い、旧約のアダムの原罪（創世記 3 章）を背負っているに等しく、神とは断絶状態です。信じる者には「聖霊」が宿り、（1 コリントへの手紙 3・16）神の神殿となり、聖霊が臨在する器にされます。（ヨハネ 14・17）霊は、イエスの十字架の死により私たちは義（正しい者）とされ、神との関係は回復しました。（ヨハネ 11・25）復活への希望（1 コリントへの手紙 15・52）だけでなく、現世においても聖霊で新しく生きる力を得ることが「死ぬはずの体をも生かす」です。信徒には「一つの義務」として、霊によって歩む責任が生じます。肉に従うと霊的な死が待っており、（ヤコブの手紙 1・15）聖霊の助けで欲望や自己中心の思いを断つことで、永遠の命へと導かれます。（ガラテヤへの手紙 5・16-17）霊に導かれている人は「神の子」となり、自由と愛に満たされるので、「アッパ、父よ」（お父さん）と、神を呼べます。（マルコ 14・36）聖霊は、私たちが神の子であることを証ししてください。（エフェソへの手紙 1・13-14）神の子は、新しい神の国をイエスと共に相続する相続人になるので、栄光（ルカ 9・23）の喜びと同時に、十字架の苦しみをも共有します。（マタイ 5・10-12）私たちは、自己中心的で、欲望を追い求める存在ですが、聖霊に導かれることで、「歩むべき道」が示され、困難の中にあっても、「父なる神さま」と呼ぶことで、静かに救いの手が差し伸べられ、希望と確信とを握りしめて歩むことができます。

●福音書朗読 ヨハネ14・15～16、23～26

イエスを「愛」（アガペー）するとは、彼を思いやり大切にし、彼に従い、信頼することです。イエスの命令（ヨハネ 15・17）は、「掟」の「互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 13・34）で、「神への愛・人への愛」（マタイ 22・37-40）も含みます。聖霊（助け主・そばに呼ばれた者）を「弁護者」と言い、聖霊は信じる者には永遠に住みます。（ローマ書 8・9-11）礼拝で説教を聞き、（ローマ書 10・17）聖書を学び実践することが「言葉を守る」です。人はみ言葉を完全に守るのは不可能なので、（ローマ書 7・18-19）聖霊の助けを得ます。（ガラテヤ書 5・22-23）「父とわたしはその人と一緒に住む」ので、心に主が住まう神殿（1 コリント書 3・16）となります。心が動揺（怒り・不安）すると、主にとっては「居心地の良い神殿」とはならず、平常心（一の心・^{ひとこころ} 玲瓏）を保つことで、聖霊を感じ取れます。（箴言 4・23）み言葉を知りながらこれに従わないのが「み言葉を守らない」人のことです。み言葉は、神からイエスに託された真理で、（ヨハネ 7・16）これをイエスは弟子たちに、最後の晩餐の席で、彼らの不安を払拭するために語ります。聖霊は、「すべてのことを教える教師（知識・理解・導き・力を与える）であり」み言葉集（MyBible み言葉の宝石箱 実践編・実践編Ⅱ）を活用し、み言葉を「インプット」して蓄えておくことで、「思い起こさせる」ことができ、聖霊は必要な時、思い出させて導いてくださいます。（詩編 119・11）聖霊が自らに働いているかは、聖霊の実（ガラテヤへの手紙 5・22-23）をチェックしてみます。

■第 90 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 箴言 8・22～31

この箇所は、「知恵」が人格を持つ者のように、「主は……その業の初めに、わたしを造られた。」とあり、天地創造の前から神と共に存在した表現になっています。(箴言8・22) 注目する点は、「わたしは建築士のように神の傍らにいた。」とあるので「知恵」は、天地創造にも参画しており、この「知恵」が「ことば(ロゴス)」としてイエスを象徴しているようです。(ヨハネ1・1-3)「知恵」は神を楽しませ、「人の子らとともに楽しんだ。」とあるので、神は創造することや人との交わりに深い喜びを持っておられ、神はこれらを見て「極めて善かった」(創世記1・31)と言われました。知恵は「真珠にまさり、どのような財宝も比べることはできない」(箴言8・11)と、神は言われました。「自分のために長寿を求めず……正しい裁きを行う判断力を求めたので……見よ、わたしはお前に賢い英明な心を与える。……さらにわたしは、お前が求めなかったもの、富と誉れを生涯にわたってお前に与える。」(列王記上3・11-13) 王の祈りに応えた神の言葉で、栄華を極めたロモン王朝が誕生します。「知恵」は知識だけでなく、神の御心にかなった判断や行動を行う「聖霊」の働きもします。(ヤコブ書3・17) この箇所が、三位一体の主日の第1朗読に選ばれたのは、神が創造を計画し、神の子(知恵・ことば)がこの計画を遂行し、神の霊(知恵)が完成へと導く、三位一体の調和がとれた働きをしているからでしょう。知恵・聖霊は「いつも・どこでも・どこまでも」働いておられ、み言葉に耳を傾け、これに従うことにより人生は正しく歩め、神との関係も豊かになることでしょう。

●第 2 朗読 ローマの教会への手紙 5・1～5

私たちは、イエス(御子)の死と復活を信じることで、神(父)から義(正しい者)とされ、神との関係は回復し、神と敵対する者から、神の家族として迎え入れられた今、平和(シャローム)を得て、(ヨハネ 3・16、ローマ書 3・22-24) 与えられた恵みは、①義とされ②神の愛と臨在の中で生かされ③聖霊で神と交わり④祈りが聞かれる者とされ⑤聖霊を受けられる者にされました。(エフェソ書 2・8、ガラテヤ書 4・6) これらの恵みは、「父」(神)が救いを計画し、「御子」(イエス)が贖いを成し遂げ、「聖霊」が導き役となり、これらの働きが「信仰」を支えます。さらに私たちは、「神の栄光にあずかる希望」を持てるのは、(ローマ書 8・17) 神が支配される御国では、神と共に栄光に生きるとの確約がされており、イエスの再臨により主と永遠の交わりができます。(コロサイ書 3・4) この希望こそが、苦難は「忍耐」(逃げずに神に信頼して踏みとどまる力)を生み出し、忍耐が「練達」(真実な信仰・確かな人格)を生み出し、練達が「希望」(神は必ず良くしてくださるとの確信)を生み出すので(ヤコブ書 1・2-4)「苦難を誇りとする」のです。「希望は決して私たちを欺かない」のは、「聖霊」が私たち神の愛を豊かに注ぐからです。(ローマ書 5・5、ガラテヤ書 4・6) この「愛」こそが、私たちがいかなる状況でも、神の臨在と助けが実感でき、知恵・導き・慰め・癒し・行動など、人に関わる全てなのです。(詩編 23・1-6) 私たちは三位一体の神の愛と恵みの中で生かされ、「信仰」に生き、「希望」で満たされ、神の「愛」に支えられ、主からの栄光を待ち望む者にされています。

【三位一体】①神(父)が、人との関係を回復する救いの計画を立案。②イエス(御子)の死で罪を贖う。神と和解、復活、恵みに導く。③聖霊が、私たちに愛を注ぎ、神の臨在を実感させ、希望を確実にする助け主となる。

●福音書朗読 ヨハネ 16・12～15

イエスは弟子たちに、聖霊について復活する前に話さなかったのは、彼らがまだ聖霊を受けていなかったからで、人は神の霊がないと神は悟れないし、(1 コリント書 2・14) 弟子たちに聖霊が注がれるのは五旬祭以降です。(ヨハネ 7・39) 聖霊は、イエスの真理について、弟子たちを導きます。神の救い・御心・神の国の実現(ヨハネ 14・6)について真理は、祈り、み言葉、礼拝で聖霊が語られて理解された確信です。(1 コリント書 2・10-13) 聖霊は、父と子から受けた啓示を私たちに告げます。(ヨハネ 15・26) 聖霊は「これから起こる」神の計画・再臨・御国の成就・教会の歩みなどを告げます。聖霊は、イエスの「栄光」である、十字架の死、復活、み言葉の偉大さを明らかにし、イエスの教えの真理を「告げ」悟らせます。神の知恵、真理、救いのご計画、権威が「父が持っているもの」で、これをイエスに委ねます。父と子は一致・共有しており、(ヨハネ 10・30) 神の権威と啓示も「父のものは、わたしのもの」なので、子に委ねます。神はイエスに、彼は聖霊に、聖霊は私たちに伝えるので、イエスの教えが必要になる度、霊的な知識が伝えられ、実践へと導かれます。

■第91回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 創世記14・18～20 (キリストの聖体の祭日は聖木曜日と、復活節後、再度聖体を祝う。この祭日で、聖体の神秘を味わいます。)

この箇所は、アブラムが甥のロトを救うため、少数の従者で敵を打ち破り勝利します。戦いの後、「サレムの王であり神(エル・エリオン)の祭司」メルキゼデクは、アブラムを祝福し「パンとぶどう酒」を出し、主の晚餐を思わせます。天地創造の唯一の神の呼び名が「いと高き神(エル・エリオン)」です。一方「ヤハウェ」はモーセに示された神の名前は「わたしはある」(出エジプト記3・14) イエスもこれを言われました。(ヨハネ18・6) 呼び名は異なりますが、同じ神です。アブラムは、戦利品から、十分の一を王に贈ります。これが神への感謝を表す「十分の一献金の原点」となり、モーセの律法では十分の一が義務となります。(レビ記27・30) 新約では、「心の中で……思ったとおり人に与え……快く与える人を、神は愛してくださる」(2コリント9・7) 神は「十分の一税をすべて宝物倉に携えて来て……わたしを試してみよ。」(マラキ書3・10)と、神は言われます。これは信仰をもって献げる者を神は祝福します。現代では、十分の一献金はなくなり、「感謝の日安」となります。神への感謝の姿勢が大切なので、神に喜ばれ(もうこきしゅ 忘己喜主)、罪を断つ(ぜんぎょうざいだん 善行罪断)ことで(マタイ6・33)、祝福へと導かれます。

●第2朗読 1コリントへの手紙11・23～26

パウロはこの箇所で、主の晚餐(ばんさん 聖餐式)の意味と起源を記した背景には、コリントの教会内の分裂や自己中心的な言動が、主の晚餐の本質を見失わせたからです。ユダの裏切りでイエスが捕らえられる木曜の夜(マタイ26章)のことを「引き渡される夜」です。死を目前にしたイエスが「感謝の祈り」をささげたのは、人として絶望の中にあっても、神の御心に信頼をして、救いの計画に従順に従うためです。ギリシャ語の「感謝(エウカリスティア)」は、「聖餐(せいさん エウカリスト)」が語源です。イエスの体が十字架で裂かれることを、「パンを裂く」と言い、「彼は私たちの背きのために刺し貫かれた」(イザヤ書53・5)のです。主の晚餐は、イエスが自己犠牲となった、十字架の出来事を忘れず、感謝し、謙虚な心で臨むことを(詩編103・2)「記念」と言い、「信頼関係」や「誓約」についての契約を、イエスが言われる「この杯は……新しい契約」です。「新契約の背景」には、「わたしは新しい契約を結ぶ」(エレミヤ書31・31-34)との神の約束が、イエスによって成就されます。旧約の契約(モーセの律法)内容は石の板に、新約の契約内容は、心に書かれます。(2コリント3・3)「契約開始日」は、イエスの十字架での死の日(血が流された瞬間)です。「契約内容」は、私たちはイエスの血によって罪が赦され、(ヘブライへの手紙9・15-22)神と直接つながる関係になることです。イエスが再臨される日まで、この式を続け、イエスの十字架による贖いの証しは、(マタイ5・16)「主が来られるときまで、主の死を告げ知らせ」ます。聖餐は過去(十字架)を記念し、現在(信仰と感謝)を新たにし、未来(再臨)に希望を抱き行われます。この式にあずかることで、私たちも「自を神に献げる」者にされ、(ローマ書12・1)愛と献身の日々を歩むよう招かれています。

●福音書朗読 ルカ9・11～17

イエスの名が広まり、ヘロデ・アンティパス(ヘロデ大王の子)は「イエスとは何者だ」との疑問を抱き、この箇所はその答えが語られています。イエスは群衆に、神が完全に支配し、愛と正義に満ちた秩序ある所が「神の国」と語ります。(マタイ6・33) イエスが病を癒す際は、手を置く・言葉・唾など、様々な手段を用います。(マルコ7・33、ルカ4・40) 癒しは「神の権威と憐れみ」によります。夕暮れ時、弟子たちは群衆を解散させる提案をイエスにしたのは、常識的で配慮ある判断ですが、イエスは「あなたがたが食物を与えよ」と語り、彼らを訓練へと導きます。群衆を50人ずつに座らせたのは秩序ある配膳のためで、荒野における神の民を思わせます。(民数記2章) イエスは①天を仰いで②祈りをささげ③パンを裂き④弟子に渡す。この動作は、最後の晚餐(ばんさん ルカ22・19)と重なり、聖餐(せいさん)の原型となります。12の籠(かご)に余ったパン屑は、旧約の12部族・新約の12使徒を象徴しており、神の恵みは完全で、余りあることを表しています。(出エジプト記16・1-18) この奇跡により、イエスは「神の国をもたらし、霊的・物質的な必要を満たされる救い主」であることが明確となり、ヘロデ王の問い対しても答えています。

■第 92 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 使徒言行録 12・1～11

ペトロが奇跡的に救出されたのは、①人の思いを超えた神の計画②教会で一致した熱心な祈り。これが使徒たちの働きを支え、ペトロがこの証人となります。(ローマ書 8・28) ヘロデ・アグリッパ王(ヘロデ大王の孫)は、ユダヤ人の^{かんしん}歡心を買うために教会への迫害を始めます。キリスト教は、ユダヤ教の伝統に反しており、民衆やユダヤ教の指導者たちから反感を買います。ヤコブが「剣」で処刑されたのは、ローマの市民権を得ていないためで、使徒として最初の殉教者です。ペトロは初代教会において中心的な指導者なので、彼を排除して教会の力を抑えようとした時、過越祭の期間と重なり、翌日より 7 日間は^{じょこうさい}除酵祭(種なしパンの祭り・出エジプト記 12・15-17)となるため、処刑を延期します。教会ではペトロのために「熱心な執り成しの祈り」がささげられ、全身全霊を込めた祈り(ゲッセマネの祈りを思わせます)は神に届き、天使が遣わされます。ペトロは鎖につながれ、「兵士の間で眠っていた」のは、彼は以前、奇跡的な脱出を図ったので、(使徒 5・19)今回は嚴重な警備となります。この時、天使が現れ彼を解放します。天使は、神よりの命令を受け、奇跡を行う霊的な者で、人に理解できる言葉で語り、行動を助け、救いへと導きます。旧・新約聖書では、天使との出会いが「幻」とされる例は他にもあります。(ダニエル書 10・5-21、マリアの受胎告知・ルカ 1・26-38)天使は神の任務により現れ、これが終わると姿を消します。ペトロを裁判にかけ、公開の場で処刑することが「ユダヤ人のもくろみ」です。【天使】神により天地創造の段階で創造され、(詩編 148・2-5、コロサイ書 1・16)守護者、賛美の役割を担います。

●第 2 朗読 2 テモテへの手紙 4・6～8、17～18

パウロが「^{いげんぎ}犠牲として献げた」と言って、自らの命を神への供え物にしたのは、殉教が迫っていたからです。(フィリピ書 2・17)信仰のゆえに命を絶つ時が「世を去る時」です。迫害や苦難と霊的に戦い、信仰を貫き通すことが「戦いを立派に戦い抜く」ことです。神より与えられた使徒の使命である異邦人への宣教を忠実に果たし、(使徒 13・47)「決められた道を走り」ます。イエスを信じて見失うことなく、どんな苦難になろうとも、み言葉に従うことが「信仰を守り抜く」ことです。永遠の命と神の国に入ることが「義の栄冠」なので、主の再臨の日に与えられます。(ヤコブ書 1・12)イエスが「審判者である主」となり、審判では①神を信じたか②イエスを救い主としたか③み言葉に従い歩んだかが問われます。(ヨハネ 12・48)主の再臨の日を「かの日」と言い、(マタイ 25・31-34)これへの希望は「主を慕い待ち望む人」に与えられます。イエスの十字架と復活による、罪の赦しと永遠の命のことが「パウロの福音」であり、全人類に語られています。(ローマ書 1・16)聖霊の助けによりイエスが共にいることが(ヨハネ 14・16-17)「主はわたしのそばにいる」ことで、死や悪魔のことを、(1 ペテロ書 5・8)「獅子の口」と言い、主が霊的、肉体的にパウロを守ります。聖霊が欲望や誘惑から守ることを「悪い業から助け出す」と言い、新しい神の国を「天の国」と言い、正義と平和に満ちた永遠の住まいのことです。(黙示録 21・1-4)最後に「主に栄光が世々限りなく……アーメン」とあるのは、すべての栄光が永遠に神に帰すように、との賛美と祈りの言葉です。

●福音書朗読 マタイ 16・13～19

フィリポ・カイサリアの地は異邦人の影響が強く、ユダヤ教の指導者たちの影響が少ない地で、イエスは弟子たちに「人々はわたしを誰だと言っているのか」と尋ね、洗礼者ヨハネ。(マタイ 14・2)終末に再び来られるエリヤ。(マラキ書 4・5)悲しみの預言者エレミヤなどと答え、弟子たちも「メシア」とはまだ理解していないのです。イエスは弟子たちに「わたしを何者だと言うのか」と尋ね、ペトロが代表して「メシアで、生ける神の子です」と告白します。これは、イエスの奇跡や教えを通して築かれていった彼の信仰告白です。これを聞いたイエスは「バル・ヨナシモンよ、あなたは幸いだ」と言ったのは、天の父が彼に啓示したことが理解されていたからです。信仰は知識だけでなく、神の霊による導きです。(ヨハネ 6・44)ペトロの信仰告白の上に、信仰で集められた民による教会(エクレシア)が築かれることは、「この岩の上にわたしの教会を建てる」ことになり、この教会は死や悪(悪魔)の力(陰府)に打ち勝ちます。イエスはペトロに、教会の使命は外への宣教(ペトロ)と内への司牧(パウロ)で教会を整え、信者の育成を委ねることが「天国の鍵」を授けることで、赦しや教会規律に関わる決定は天にも反映されるのが、(ヨハネ 20・23)「つなぐ」「解く」で、神の御心と一致する教会の働き、み言葉と聖霊に従った行いは、神ご自身が保証し、支えてくださいます。(マタイ 18・18-20)「わたしを何者だと言うのか」との応答が、信仰生活の土台になるでしょう。

■第93回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書66・10～14

この箇所は、バビロン捕囚から帰還し、エルサレムが回復する預言、神の母性的な愛の慰め、そして、神と民との再構築が語られています。「エルサレム」を母なる都として擬人化し、「彼女」として描いています。「喜べ」との命令は、神と民との回復が既に始まっており、バビロン捕囚の期間中に荒廃した都（エルサレム）が再び喜びの源となることです。エルサレムの破壊や民の苦しみで悲しんだ者たち、捕囚の痛みを共有した人々のことを「喪に服した」と呼び、この人たちにとって回復が喜びとなります。エルサレムを「母」として描き「乳房」や「栄え」はその豊かさにより養われます。神によって回復された都は、民にとっては精神的・物質的な満足を与える存在となり、神によって回復されたエルサレムは、民を豊かに養う「母」としての役割を果たします。神の祝福は絶えず豊かに流れるのを「平和が川のように」と表現し、他国の富や栄光までもが、エルサレムに流れ込む姿を「国々の栄え」と言います。神の平和と祝福が、母のように優しく、豊かに注がれ、「抱かれ、あやされる」ことから、神ご自身が「母」のように民を慰めます。この表現は、旧約でもめずらしく、慰めの場である「エルサレム」は、神との交わりと回復の中心地となります。神の愛は父よりも、母のような深い慰めを備えています。回復していく民の内面と外面の両面において力強くなって行く様子を「心は喜びにあふれ」「骨は青草のように」と表現しています。一方、「主の怒り」は敵に向けられ、敵には裁きを下して神の正義を示し、神は自らの民を祝福し、回復と正義を両立させ、バビロン捕囚により「断絶」を体験させた神は、民を再び豊かに、癒し、育てます。

●第2朗読 ガラテヤへの手紙6・14～18

パウロは、名誉や業績、欲望の達成ではなく、主の死で、私たちの罪が赦された事実こそが、真の誇なので、「イエスの十字架のほかには誇るものはない」と語ります。（ガラテヤ書2:20）彼は、この世の価値観（財産・名誉・数々の欲望など）と決別した今、これらの影響は一切受けず、新しい価値観で生きる者となります。イエスにより古い自分に終止符を打つことで「新しく創造される」こととなり、神の子として聖霊に導かれ、新しい存在に変えられます。（2コリント書5:17）これは自らの努力ではなく、神の一方的な恵みによるのです。この原理に従って生きる人々にパウロは、神の「平和と憐れみ」があるよう祈ります。ユダヤ人に限らず、信仰によって神に属するすべての人を「神のイスラエル」と呼びます。（ガラテヤ書3:7、29）律法主義者との論争に疲れたパウロの訴えが「わたしを煩わさないでほしい」です。イエスに属することで、自らの体に受けた迫害の傷を、イエスの「焼き印」と言います。最後に①信仰により救われた無償の愛。（ガラテヤ書2:16）②聖霊と共に生きる新しい人生を「イエスの恵み」と呼びます。パウロは、律法から解放され、聖霊によって自由な信仰生活を歩めるように人々を導きます。

●福音書朗読 ルカ10・1～12、17～20

イエスは12人の弟子とは別に、72人の弟子を任命し、宣教に遣（2人1組で）わします。これは「2人の証人」の原則に基づき、（申命記19:15）困難な伝道において互いに励まし合うためです。イエスは、福音を待っている人は多いが、担い手不足を、「収穫は多いが、働き手は少ない」と言います。弟子たちを、たとえ困難や迫害に遭遇しても、神を信じて出発せるのは「狼の中に子羊を送る」ことだと言います。神の備えに信頼し、自分の思いで歩まないよう「財布や袋を持たずに行け」と命じます。形式的な「挨拶」は省略し、宣教活動に専念せよと、言います。訪れた家では「平和があるように」と祝福し、該当する家ならばこれが留まります。神の平和を受け入れる人を「平和の子」と呼びます。宣教者は、与えられたもので満足し、「家から家へ渡り歩くな」との命令は、一箇所に落ち着いて宣教に取り組み、報酬は当然のことであり、（1テモテ5:18）忠実に働く者に神は報います。町で拒絶されたら「足の塵を払う」ことで区切りをつけ、福音を拒む者には、「かの日（神の裁きの日）には、罰が下されると警告しています。弟子たちが宣教より帰還して、イエスの名で悪霊が服従したのを喜ぶと、イエスは「みんなの名が天に書き記されることを喜べ」と語ったのは、神との永遠の交わりこそが最も喜ぶことだからです。（出エジプト記32:32、黙示録3:5）

■第94回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 申命記 30・10～14

申命記は、モーセが死の前にモアブ（死海の東側）で語った説教集です。民が約束の地（カナン）に入る直前、これまでの歩みと律法などを振り返り、神との契約を再確認させます。特に30章は、イスラエルの民が罪を犯し、神から離れても「悔い改めて主に立ち帰るなら」神は彼らを赦す、との希望が語られています。罪を「悔い」、神のもとへ行動を「改める」ことが「悔い改め」で、受洗前は、神に向かう第一歩であり、受洗後は、神との交わりを回復する行為となります。一方、受洗後、神を中心とした生涯を歩むことの決意が「回心」で、できない日もあり、「日々の回心」を積み重ねながら、神に立ち帰り続ける旅路となります。神の言葉を聞いて実践することが「主のみ声に従う」です。十戒のような命令が「戒め」で、礼拝の儀式などの規定が「掟」です。イエスは「戒め」（十戒：前半は神への愛、後半は人への愛）と「掟」の律法を「神への愛」と「隣人への愛」（出エジプト記20・3-17、マタイ22・37-40、マタイ7・12）に要約され、律法は愛が土台となっています。神の言葉は、遠くて手の届かない「天にも海のかなたにもない」存在ではなく、人に理解され、容易に行うことができよう「あなたの口と心にある」ので、「神の言葉は遠くにあるのではなく、すべての人に開かれており、信じれば従うことができる」と励ましています。パウロは「信仰は聞くことから始まり、聞くこととは、キリストについての言葉を聞くことです」（ローマ書10・17）と、福音の核心を語ります。旧約（律法）の中心は、「神を愛し、隣人を愛する」生き方であり、新約の中心は、「わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ13・34）との教えです。これらの愛の掟を通して、聖書全体は一貫して「愛に生きよ」と教えています。この「愛」は感情ではなく、相手を思いやり、主や人に喜ばれることを実践し、相手の方より「ありがとう」の言葉をいただき、感謝されることです。主が求めておられるのは、心と行動が伴った「生きた愛」です。

●第2朗読 コロサイへの手紙 1・15～20

神は霊で見えない存在ですが、イエスは、「神の姿」となり世に現れました。（ヨハネ 14・9）、神が創造を「計画」し、（創世記 1・1、エフェソ 1・3-10）、イエスが「すべての造られたものに先立って生まれ」て、創造の実行者（コロサイ 1・16）となり、創造に命を吹き込むのが聖霊（創世記 1・2、ヨブ記 33・4）で、三位一体の各々が役割を担い、天地を創造します。万物は、「御子（イエス）によって、御子のために」造られ、宇宙も被造物も、イエスによって完成へと向かう存在です。さらにイエスは、人として死に、最初に復活された方で、（1 コリント 15・20）人類史上初めて死に打ち勝ち、新しい命を得た方です。彼の復活で「新しい霊的な命の創造」が開始され、彼が新しい命の最初の者（初穂）として、人類の「頭」となり、この「体」が教会です。教会には主を信じる者たち同士が結ばれます。（エフェソ 1・22-23）神はイエスの内に、「余すことなく宿らせ」ることで、神としての本質のすべてを与え、神の救いの計画は、イエスにより成就するので、神は喜ばれます。これは、イエスが完全な神であり、人でもあると宣言している所です。イエスの十字架の死により、「天地にあるもの」すべてが、神との和解を実現します。教会はこの和解の「証拠」であり、「新しい共同体・生きた器」として、生き続けます。この箇所は、イエスがすべてにおいて「第一の者」と言っています。

●福音書朗読 ルカ 10・25～37

「永遠の命を得る」には、現代では「受洗」です。イエスの時代、律法学者は律法を守ること（割礼、安息日、各規定）で義とされることで、これが得られると考えており、イエスの教えは「形ではなく心」です。律法学者は律法の教え（申命記 6・5、レビ記 19・18）を答え、イエスは、「これを実行することで永遠の命が得られる」と語り、彼の教えは「知識と実践です」エリコは当時、危険な場所ですが、「おいはぎ」が出ました。司祭とレビ人は、宗教の指導者であり、律法をよく知っている存在ですが、「向こう側を通った」のは、死者に触れると汚れる、との律法の教えを優先します。一方、サマリア人は、ユダヤ人からは嫌われ、軽蔑されていましたが「憐れに思って近寄り、介抱します」イエスは、「隣人とは誰か」ではなく、「助けを必要とする人」の立場（イメージする）になりきることで、（マタイ 7・12）実践する姿が見えてくると、（顧客志向・おもてなし）手を差し伸べます。イエスはサマリア人に倣い、『あなたも同じようにしなさい』と語り、慣習・偏見・差別を超え、愛を実践する大切さを教えます。

■第95回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 創世記18・1～10

この箇所は、神がマムレ（エルサレムより南36kmに位置する）の榿の木のもとでアブラハムに現れます。アブラハムは3人の来訪者を見てすぐに走り出し、地にひれ伏して迎えます。3人の内1人は神で、他の2人は天使とされており、（創世記19・1）アブラハムは彼らをただの旅人ではなく「聖なる存在」だと直感し、神の訪れを逃すまいと積極的にもてなします。古代の中東では、旅人をもてなすのは重要な社会的・宗教的な義務であり、特に水で足を洗うのは、長旅の疲れを癒すための配慮です。木陰で休ませ、上等な小麦粉（約13kg）でパンを作らせ、子牛や乳製品による「おもてなし」は、社交辞令を超えた礼拝行為であり、信仰が込められた愛と敬意の表れです。（ヘブライ人への手紙13・2）アブラハムが立って旅人に給仕をする姿勢は、富と地位を持つ者がへりくだって人に仕え、信仰者の模範を示しています。（ルカ22・26）「誰が一番偉いか」を問う弟子たちに対して、イエスは「上に立つ者は、給仕する者のようになりなさい。」（ルカ22・26）との教えと重なります。旅人が「お言葉どおりにしましょう」との言葉は、マリアの「お言葉どおり、この身になりますように」（ルカ1・38）とあるように、神の計画を全面的に受け入れることを表します。サラは「主人であるアブラハムの指示に従い、家庭内の主婦としての役割を果たします。」サラがアブラハムを『主』と呼んで従った（1ペトロの手紙3・6）と紹介されており、信仰の模範となります。老いたサラに子が与えられるとの約束は、人には不可能に見えても「神には、何一つおできにならないことはない」（ルカ1・37）との信仰の真理を伝えています。後に誕生するイサクから、やがてメシアに至る系図へと展開されます。「アブラム」（高められた父）から「アブラハム」（多くの国民の父）に神が改名を命じたのは（創世記17・5）契約に基づきます。（創世記17・4）「サライ」（わたしの姫）から「サラ」（貴婦人）の変更により、個人から普遍的な母の名前になります。

●第2朗読 コロサイへの手紙1・24～28

この箇所は、パウロが獄中からコロサイの教会に宛てに書いた手紙です。彼が、教会のために自らが担う使命のことを「苦しむことを喜ぶ」と言って、神の働きに参加することです。（フィリピ書1・29、ローマ書5・3-5）イエスの昇天後、教会が受ける迫害や困難のことを「教会に欠けたところ」です。パウロの使命は、「み言葉を余すところなく伝える」ことで、（使徒20・27）ユダヤ人・異邦人を問わず、全人類に福音の真理を宣べ伝えることで、この手段は、説教、祈り、手紙、教会の設立など、多岐にわたります。天地創造の前から備えられている神の救いが「秘められた計画」で、この実行がイエスの死による贖いと復活です。（エフェソ1・9-10、黙示録13・8）イエスを信じて歩むすべての信徒が「聖なる者たち」です。（ローマ書1・7）異邦人もこの救いに与れる福音は、当時としては画期的で「栄光に満ちた希望」であり、（ローマ書9・11）イエスは、彼を信じる者の内に住まい、新しい神の国に入ることが約束されていることが「栄光の希望」（ローマ書8・18）です。パウロは、相手に届くよう、「上からの知恵」（ヤコブ3・17）によって「すべての人に対してすべてとなる」（1コリント9・22）のは、人々を「キリストに結ばれて完全」（エフェソ4・13）にするためであり、これにより「人を柔和に諭して」誤りを正し、真理へと導きます。（2テモテ2・25）

●福音書朗読 ルカ10・38～42

この物語の舞台は、エルサレム近郊のベタニヤ（ヨハネ11・1）で、マルタ・マリア姉妹と兄ラザロが住んでいた村です。マルタはイエスを深く信頼し、（ヨハネ11・5）自宅に迎えました。妹のマリアは、（ルカ10・39）イエスの足もとに座り、み言葉を聞くことにしたのは「信仰は聞くことから始まります」（ローマ書10・17）との実例です。一方、マルタは「おもてなし」に心を奪われ、「良いこと」をしているのですが「最も大切なこと」を見失っています。マリアが手伝わぬことに不満を抱き、イエスに是正を求めますが、イエスは「マルタ、マルタ」と優しく呼びかけ諭し、世の思い煩いから離れ、「必要なことは、ただ一つ」（ルカ10・42）「神との交わり」を優先するよう語ります。ここでは「奉仕（行動）」と「礼拝（信仰）」のバランス感覚と、優先するのは、み言葉を聞くことです。

■第96回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 創世記18・20～32

神と天使はマムレの木のもとでアブラハムに現れ、ソドムとゴモラの罪を訴える叫びを聞き、地上に降りてこの事実を確かめにやって来ます。(創世記18:20-21) ソドム(焼かれた)、ゴモラ(埋没)は、死海の南部にあり、これらの町での罪とは、①性的墮落(エゼキエル書16:49-50、ユダの手紙1:7)、②弱者への無慈悲、(エゼキエル書16:49) ③社会全体の腐敗。これらによって、神の裁きを受けることになります。「叫び」声は虐げられた人々の訴えであると同時に、罪そのものが満ちている状態でもあり、神に従い、信仰によって歩む人(詩編1:1-6、創世記15:6)が「正しい者」です。「神の基準」は町の霊的な状態と義人の数に基づいて裁きを決断されるので、叫ぶ者を義人とは見なしていないのです。天使の2名はソドムの現状視察に向かい、アブラハムは主の前でとりなしの交渉を始めます。彼は「正しい者が50人いたなら町は滅ぼさないか」と尋ね、神はその人数がいれば「赦す」と答えます。その後、人数は45人、40人、30人、20人、10人と減り続け、神はすべて赦すと約束します。結論として、10人の義人すらいない町だったので神は滅ぼします。ロトの家族は天使の導きで救われますが妻は、後ろを振り返り(過去の思い出に心が引かれた)「塩の柱」となります。(創世記19:26、2ペトロの手紙2:7) この箇所は、神の正義と憐れみ、とりなしの祈り、少数の義人が社会に与える影響、霊的な墮落の末に訪れる神の裁きが語られています。

●第2朗読 コロサイへの手紙2:12～14

洗礼は、「罪の赦し」(使徒2:38)と「キリストとともに葬られ……死者の中から復活させられた」(ローマ書6:4)との霊的なしるしです。洗礼式(浸水式)では、水に沈められることで「罪によって死んだ者」(エフェソ2:1)古い自分は死に、私たちはイエスと共に霊的に葬られます。水から上がることで「生かし(復活)……救われた」(エフェソ2:5)ことが実現し、神の家族(教会)の一員(1コリント12:13)となり、新たな信仰生活が始まります。洗礼は、旧約の「割礼」から、新約では契約のしるしになり、(ローマ書2:29)外面から内面への変化を表します。洗礼により、原罪と受洗までの罪はすべて赦され、その後の罪は、悔い改めと赦しが繰り返される信仰生活となります。(1ヨハネ1:9)カトリックでは「ゆるしの秘跡」があり、プロテスタントでは「悔い改め」により、神との交わりを保ちます。律法は、人間の罪を裁く基準になり、私たちの罪を証明する「罪状証書」のようなものが「証書」です。イエスはこれを、十字架に釘付けにして破棄しました。(ローマ書8:1-3)受洗者は、隣人愛や試練を通して信仰を鍛えて、(ヤコブ書1:2-4)教会での交わりを通して霊的に成長させ、神より与えられた使命を生きるようになります。洗礼の遅れは、神の恵みや悔い改めの機会を失う可能性を秘めており、死は予告なく訪れることから、(ルカ12:16-21)今日、主の声を聞いたならこれに従いなさい。(ヘブライ書3:15)洗礼は、自らの人生を神に委ねる「信仰告白」であり、神は真の信仰を喜ばれます。今、神に立ち帰り、罪の赦しと主の導きの中で生きることこそが、最良の人生と言えるでしょう。

●福音書朗読 ルカ11・1～13

イエスは「祈る」ことを日常の習慣(ルーティン)にしています。(ルカ5:16、6:12、9:18)「ヨハネが教えた祈り」とは、祈りの型式や心構えのようです。「主の祈り」の正式文(マタイ6:9-13)を参考に記載します。『天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。み国が来ますように。み旨が天に行われるとおりに、地にも行われますように。今日の糧を今日お与えください。わたしたちの負い目をお赦しください。同じようにわたしたちに負い目のある人をわたしたちも赦します。わたしたちを誘惑に陥らないよう導き、悪からお救いください』このたとえ話に出てくる人物は、旅人を「もてなす」ためにパンを求めます。これは「隣人愛」や当時の「おもてなし」に合致した行為であり「求めなさい、そうすれば与えられる」と教えています。この話しは、他者への配慮と愛からの願いは必ずや神に届く、とのメッセージです。「求めなさい、探しなさい、門をたたきなさい」とるのは、自己実現を奨励しているのではなく、神の「御心に適った行動」をする者に対して、神は+応えられます。具体的には、①神の御名が崇められること②与えられた使命・職責を果たすこと③隣人愛の実践です。親は子に必要な「魚・卵」を与えるなら、天の父はもっと確かで良いものを与えられます。主に求める上で最も大切なものは「聖霊」と教えています。※聞かれる祈りの秘訣については『MyBible み言葉の宝宝箱 実践編 33 祈り』を参照願います。

■第97回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 コヘレト 1・2、2・21～23

この書は、伝統的にソロモン王の著とされてきましたが、文体や言語、思想の特徴により、実際には紀元前3世紀末から2世紀初頭において、無名の知者によって書かれたと考えられています。後期のヘブライ語にアラム語・ペルシャ語の影響が見られ、内容にはギリシア哲学の要素も含まれています。この箇所は、本書の背景と教えとが記されています。本書の主題は「なんという空しさ、すべては空しい」と、人生の虚しさについてです。著者は知恵と才能の一切を尽くして富や知識、地位を築きますが、(コヘレト 2・4-9) 死を迎えれば全ては消え去り、労苦の成果を「何も労苦しなかったほかの者」である相続者に渡ります。(コヘレト 2・21) しかも、その人が賢者か愚者かも分からず、(コヘレト 2・19) 人生の労苦や成果の富が後継者次第になるのは(コヘレト 2・21) 誠に「不幸なことだ」と嘆きます。この策としては、終活を行い主に委ねます。著者の幸福とは「生きている間、喜び楽しんで暮らす以上に幸せなこととはほかにはない」(コヘレト 3・12) と言いますが、これも神からの賜物(コヘレト 2・24) であり、人の努力では得られず、(コヘレト 2・26) 人生は、痛みと悩みに満ちており、夜も安らぐことはない。(コヘレト 2・23) だからこそ、「神を畏れ、その掟を守れ。これは、すべての人間のなすべきことである。」(コヘレト 12・13) と、結論づけます。私たちに与えられた「永遠の命」と「復活」に希望を抱いて日々、主から与えられた恵みに感謝しつつ歩みます。

●第2朗読 コロサイへの手紙 3・1～5、9～11

信仰者が、受洗により古い自分は死に、新たな霊的な命を得ることが(ローマ書 6・4-5)「キリストと共に復活させられた」となり、神の御心、天の価値観、イエスに似た者になることを目指すことを「上にあるものを求めなさい」です。一方、自己中心や快楽、食欲といった罪の誘惑に注意して「地上のものに心を引かれなないように」します。罪の支配下にあるのを「死んだ」と言い、これから霊的に解放され「命はキリストと共に神の内に隠されている」ので、私たちの命は、イエスの再臨の時には、主の栄光と共に現されます。(マタイ 24・30、フィリピ書 3・21) イエスご自身こそ「あなたがたの命」であり、私たちの「命の源」である彼は、信仰者を教え導くだけでなく、私たちの内に「生きて働く命」そのものです。(ヨハネ 14・6) 神を知らぬ自己中心的な「古い人」を「脱ぎ捨て」イエスに似た「新しい人」を身に着けるように勧めているのは、信仰の歩みでは聖霊に導かれ、神との交わりが「真の知識に達する」からです。また「食欲は偶像礼拝」となるのは、神よりも物や欲望を優先させて、偶像化するからです。さらに、人種や立場にかかわらず「ギリシア人もユダヤ人も…区別はなく」イエスによって一つになることで、分裂や対立のない教会が語られています。(ガラテヤ書 3・28) 現代を生きる今こそ、私たちは「古い人」を脱ぎ「新しい人」として、イエスに倣った日々を目指して歩むようにと教えています。

●福音書朗読 ルカ 12・13～21

当時のユダヤ社会では、遺産相続は律法(申命記 21・17)に基づき行われていましたが、トラブルが多く、ラビがこの調停役を担います。群衆の一人がイエスに相続問題の解決を依頼したのは、彼をラビ(律法教師)と見たからです。彼は、神の国を宣べ伝えるのが使命なので、世俗の裁定者になることを拒否します。イエスは「どんな食欲にも注意し、用心しなさい」と警告したのは、食欲は神を忘れ、物しか見えなくなり偶像礼拝に(コロサイ 3・5)なるからです。財産で一時的な安心を得ても、永遠に命の保障にならず「人の命は財産ではどうすることもできない」です。金持ちは「どうすれば今以上の安心感を得られるか」を考え、農家は「どうすれば豊作物をもっと蓄えられるか」を考えた末、大きな穀物倉庫を作り、つかの間の安心感を得ようとします。イエスは「物による安心」は、不安定・不確実なものと語ります。農家で金持ちは豊作物を蓄え、「ひと休みして、飲んで楽しもう」と言うと、神は「愚かな者」よ、今夜、お前の命は取り上げられると言います。これは、物に頼り、永遠の命への備えを怠ることの愚かさを言っています。(シラ書 11・19) 人の「生も死」も主の御手の中にあり、イエスは「自分のために宝を蓄えても、神の前に豊かにはならない」と結びます。豊かな人生は、物質ではなく、主との深い交わり、愛や信仰、善行に生きようとする事なので、「何を大切にしているのか」を問いかけています。

■第98回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 知恵の書 18・6～9

この箇所は、出エジプトの夜（過越の夜）を回想し、信仰に生きる民の姿と神の救いを讃えます。（出エジプト記 12・1-49）
「あの夜」に、神がエジプトの長子を最後の災いとして撃ち、イスラエルの民が羊の血により死から守られた夜のことです。（出エジプト記 12・1-29）「我々の先祖（イスラエルの民）たち」はこの夜、モーセより聞いた神の命令を守ります。神が戸口に羊の血を塗るよう「前もって知らされ」命じたことに従うことで救われます。彼らは「あなたへの約束」として、神がアブラハムに与えると約束したカナン^{かなん}の地（創世記 12・1-3）のことを今も信じており、過越の夜は「動揺することなく」安心して迎えます。神の命令に従うことで死から免れることが「神に従う人々の救い」です。神に逆らい、ユダヤの民を虐げた、エジプトの支配者たちへの裁きが（出エジプト記 12・29）「敵どもの滅び」で、「反対者」は、ファラオや神に従わなかった者たちのことです。神は彼らを裁くと同時に、イスラエルの民を「招き」「光栄」を与えます。信仰に生きるイスラエルの民とその子孫のことが「善き民の清い子ら」です。イスラエルの民は、密かに「過越の小羊」を「いけにえ」として献げ、「神聖な掟」である神の命令を民全体で守ることを決意しました。こうして、彼らは「順境も逆境のときも心を合わせて受け止める」ことができ、苦難の中にあっても信仰を共有して前進し続けました。この時、彼らは「先祖たちの賛歌」である「モーセの歌」（出エジプト記 15・1-3）にあるように、神の救いと偉大な御業を讃えました。

●第2朗読 ヘブライ人への手紙 11・1-2、8-19

信仰とは、神が讃えられることについては、神は実現すると確信し、このプロセスとゴールを黙想することです。アブラハムは神の声に聞き従い、行き先も知らずにハランを出て（創世記 12・1、4）、カナン^{かなん}の地に向かいますが、定住はせず仮住まいを続けたのは「神が建てた都」（黙示録 21 章）を待ち望んでいたからです。サラは 90 歳という高齢で子を産み、（創世記 18 章）アブラハム（100 歳近く）も「子は持てない」と思っていました（創世記 17・17）「星や砂のように」子孫が与えられます。アブラハムたちはハラン（元の土地）に「戻る機会もあった」のですが、神との約束を選んで、前進を続けます。彼らは、神の都を見ずに世を去り、「地上ではよそ者であり仮住まいの者」（創世記 23・4、詩編 39・13）であり、神がおられる天（神の国）の「故郷を探し求め」たのは、国籍が天国にあるからです。（フィリピへの手紙 3・20）神はこのような信仰者を誇りとされ「わたしの民」と呼び、恥としなかった。（出エジプト記 3・6）終末に完成する新しい神の国（黙示録 21 章）「都を準備されて」おり、信仰者が永遠に住む場所です。神は、アブラハムに愛する子イサクを「燔祭として献げよ」と命じます。（創世記 22 章）アブラハムは、神が死者も生き返らせると確信しており、ナタを振り下ろすその瞬間、「やめよ」との御声に従って手を止め、代わりに雄羊を燔祭として捧げます。このことは、イエスの十字架と復活を思わせます。

●福音書朗読 ルカ 12・32～48

イエスを信じた弟子たちのことを「小さな群れ」と呼び、終末に完成する神の国が、彼らに与えられるとの約束で安心します。イエスの再臨と共に実現する新しい「神の国」で、自の努力ではなく、神を信じる者にこの国が与えられます。（エフェソ書 2・8-9）イエスは、富への執着を断ち、貧しい人に愛の実践をするには「自分の持ち物を売り払い施しなさい」と言います。この施しは、擦り切れず尽きることのない「霊的な財布」のことであり、永遠の「富」として天に積まれ、神の前での報いとなります。天に積まれる富は、神が守られており、「盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない」ので、損なわれることはないのです。霊的に目覚め、備えをなして生きることを「腰に帯を締め、ともし火をともし」と言い、「賢い乙女」（マタイ 25・1-13）のたとえと通じます。「主人が給仕する」との逆転劇は、忠実な僕に対して、主が愛と喜びをもって報いられる、天の祝宴（イザヤ書 25・6）のことです。主の再臨に備え、日々を生きていないと「人の子は思いがけない時に来る」からです。このたとえ話における「信仰とは」単に信じるだけでなく、希望を抱き、忍耐し、備えを怠らずに、み言葉を忠実に歩み続ける旅路として描かれています。

■第 99 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 エレミヤ書 38・4-6、8-10

この場面は、紀元前 588-586 年、ゼデキヤ王は表向きにはバビロンに従いますが、エジプトと通じて反乱を企て、バビロニア軍から再びエルサレムを包囲されます。預言者エレミヤは、「降伏こそ神の御心であり、都が生き残る唯一の道」と語ります。しかし、この言葉は、敗北主義・裏切りと受け取られ、王に仕える高官（国政を担う支配者）たちは、民の士気を下げる者として彼の処刑を訴えます。ゼデキヤ王はバビロンに任命された傀儡王^{かいらいおう}で、軍や高官には逆らえず、王でありながら何もできない。預言は、民の状況に応じて神の言葉を伝え、常に希望や平和を預言するだけでなく、悔い改めの促し、厳しい裁きや災いなど、自ら言いたくない預言を行い、エレミヤは「裁きの預言者」としての使命を果たします。高官たちは責任の回避を図り、エレミヤを飢死させる目的で泥の水溜めに投げ込みます。泥に沈めると、食べ物も水もなく死を待つみの非常に残酷な環境となります。この時、異邦人でエチオピア人の宦官^{かんがん}（高官より地位は低い王の信任を持つ官僚）エベド・メレクはエレミヤを救おうと命がけで、王に進言し、王は 30 人を遣わして彼を救出します。エベド・メレクの行為は信仰に基づく行動であると神に認められ、彼は後に救いの約束を受けます。（エレ 39:15-18）イエスも、真理のために迫害を受ける者には祝福を語ります。（マタイ 5:10）この箇所は、「神の言葉を忠実に実行する預言者」「他者の言葉に流される王」「保身に走る高官」「信仰に生きる異邦人の宦官」これらの人物を通して、真の信仰のありようを描くと共に、私たちも、自らの立場や利害得失を超えて、神の御心に従う姿勢が求められています。

●第 2 朗読 ヘブライ人への手紙 12・1-4

「多くの証人たちが雲のように私たちを取り巻いている」のは、旧約の信仰者たち（ノア、アブラハム）は今も、私たちに励ます存在なのです。彼らの信仰を継承するには、私たちは「一切の重荷（不安、過去、プライド、自己中心的なこと）、まとわりつく罪（神の目をそらす原因）を捨て」、それぞれに定められた人生の「目標」を「忍耐」して走り抜くようにと語ります。「信仰の創始者であり完成者」であるイエスは、十字架での死と苦しみは「人類の贖い」「救いの完成」の先にある「喜び」を見ておられたのです。人類の救いが完成するには、自が受ける「恥ずかしめ」をも苦にせず、十字架上での「苦しみ」を「忍耐」し（イザヤ書 53 章）、神の右に座してもなお、私たちを神に執りなしておられます。（ローマ書 8:34）さらに、自分が辛く、苦しむとき、イエスは罪人たちの激しい敵意や苦しみにも忍耐されたことを思い起こし「考えなさい」と言われ、私たちも再度、立ち上がる力が得られます。私たちが直面する苦難は、まだ「流血」するまでの抵抗には至っておらず、「今の苦しみで信仰を捨てないでほしい」と語っています。この箇所は、信仰生活の厳しさを教えており、困難の中にあっても、イエスや信仰の先達に倣い、目標を見失わず、希望を抱き歩むよう励ましています。（2 コリント 4:16-18）

●福音書朗読 ルカ 12・49-53

イエスが語る「火」は、神の裁き、霊的な目覚め、罪を焼き尽くし、罪を浄化させて新しい力をもたらすことです。イエスは「平和を作り出す人は幸い」と山上の説教で語られておられ、多くの人は「イエスは平和をもたらす方」と考えています。イエスはこの箇所において、「対立と分裂」をもたらすために来たと語ったのは、人々が神の真理に目覚めて生きることを望んでおられるからです。イエスが言われる「洗礼」は、十字架上での死のことで、これが成就するまでの苦しみを彼は自覚しています。神と人との関係が回復されてもたらされてこそ「真の平和」が訪れます。この前提として、福音を受け入れるか否かの選択があり、信仰による選択は、最も親しい関係にある家族間にも影響を及ぼし、分裂を生じさせ、中立の立場ではいることのできない状況を作ります。イエスの使命は救いをもたらすと同時に、人に厳しく選択を迫る「火」の働きがあります。信仰を持つことは、時には孤独や分裂をもたらしますが、同時に、人が裁きや罪に目覚め、聖霊の火によって清められ、やがて真の平和に至るためには避けて通ることのできない通過点ともあうと言えます。

■第 100 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 イザヤ書 66・18～21

この箇所は、バビロン捕囚後のユダヤ人共同体に向けたもので、信仰の混乱や異邦人との関係に揺れる時代において、神は普遍的な救いと異邦人にも神の栄光を現すことが記されています。イザヤ書 66 章（最終章）では、裁きと希望、神の勝利、そして、新しい神の民の姿という終末的なビジョンが描かれています。神は、イスラエルの人々の行いと思いを知っておられ、終末には、全世界の民を集めて神の栄光を示されます。神が「しるし」を与えるのは、特別に選ばれた者たちに、奇跡や神の力を授け、彼らを全世界に遣わし、神の存在と栄光を宣べ伝えさせます。これは異邦人伝道や新約における教会の使命を先取りした革新的な預言と言えます。（マルコ 16・20、使徒 2・43）地の果てを象徴する国々（タルシシュ、ブトなど）に使者を遣わし、神を知らない人々に神の栄光を告知させます。全世界に遣わされた者たちは、ユダヤ人の同胞を世界中から神のもとに再び連れ戻す場面の表現として、馬・車・らくだなどの移動手段を記したのは、民が献げ物であるかのように、神の元に連れ戻すことをイメージさせることで、終末的な帰還を描写しています。さらに、神は異邦人からも祭司やレビ人を選ぶと語り、神に仕える新しい秩序が語られ、（1ペトロ 2・9）この預言は、全人類への救いと福音が語られています。

●第 2 朗読 ヘブライ人への手紙 12・5～7、11～13

この箇所は、（ヘブライ人への手紙 12・5）箴言（3・11 - 12）からの引用です。神が私たちを「子」として訓練していると語っています。ここでの「懲らしめ」は罰ではなく、「訓練」なので、力を落とすことなく、軽んじてはなりません。なぜなら、神よりの訓練は、自らを成長させるための「父からの訓練」だからです。この訓練は、特別ではなく、「この世の常なることばかり」で、神は「すでに」、「逃れる道と耐える力」を備えておられます。（1コリント 10・13）^{ことわざ}「諺」に「可愛い子には旅をさせろ」「獅子の子落とし」とあり、訓練で人は鍛えられます。（ヘブライ人への手紙 12・8-11）「鞭打つ」のは、放任せず、真剣に導く姿勢のことです。「鍛錬」は、千日の稽古を「鍛」と言い、万日の稽古を「錬」と言います。（宮本武蔵『五輪書』）信仰者に「耐える」ことを求めるのは「我慢」でなく、神の目的を信じて受け入れることです。「忍耐」は、^{やいば}刃の心となって耐え、心を鍛えることです。訓練のただ中にあると、たとえ訓練と理解できなくても後に、これが人格・霊的成長をもたらし、「義と平安に満ちた実」になっていることが分かります。（ローマ書 8・28）「弱った手や衰えた^{ひざ}膝をまっすぐに」するのは、信仰での疲れた状態から、自分や周囲の人を励ませ、（イザヤ書 35・3）とのことで、信仰の道は自分だけでなく、他者にも影響を与えることから、まっすぐに信仰の道を歩むことで、弱さを抱える人は癒され、主の道へと導かれます。

●福音書朗読 ルカ 13・22～30

この箇所は、イエスが十字架に向かう途中、町や村で福音宣教を行っていた時のことです。ある人が「救われる者の数について」尋ねます。当時、「イスラエル人の大多数は救われる」と考えており、イエスは数字より、救いに与ることについて教えます。悔い改め（罪から離れる）と回心（神に向く）により、救いの「狭い戸口」に立つことで、自己中心、形式的な信仰では戸口には立てないのです。「全力を尽くす」ことで「努めなさい」となり、救いは決断と行動が伴い、救いの機会を逃すと手遅れになります。「家の主人」は神のことで、「戸を閉める」のは、救いの機会（最後の審判）が閉じられることです。表面的な信仰生活をしている人を「どこの者が知らない」と呼び、内面的な深い信仰は、主との祈りを通して持ちます。イエスと接し、教えを聞いていたとしても、悔い改め（ルカ 22・61-62、1ヨハネ 1・9）と回心（フィリピ書 3・7-8）が、救いへと導きます。神に従わず罪の中にいる人が「不義を行う者」です。救いに与るには、名ばかりの信仰者から、言動が伴う信仰者へとなることです。アブラハムたちが神の国におられるのに、ユダヤ人たちが外にいと聞いて衝撃を受けます。後悔と絶望にあると人は「泣き叫び」ます。東西南北から人々が集うとは、異邦人救済の預言のことで、救いは民族を超え全世界に及びます。選民（イスラエル人）が拒まれ、異邦人が受け入れられることを「後の者が先になり、先の者が後になる」ことです。また、形式的や表面的な信徒は拒まれ、謙虚でみ言葉を生きようとする者は受け入れられます。

■第 101 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 シラ書 3・17~18、20、28~29

この書は「集会の書」と呼ばれる知恵文学で、紀元前2世紀に著され、カトリック教会では第2聖典になります。「子よ」と、著者(シラ)が父のように「知恵を学び神の道を歩もうとする人」に呼びかけます。力や権力を振りかざさず、自分の思いを持つ「自律した人」になり、穏やかに他者に接するのが「柔和」で、イエスの「柔和で、謙遜」(マタイ11・29)に倣います。物を施すよりも、笑顔、温かな言葉、態度は人を動かし、神に喜ばれます。人は財産や地位が増すほど誇らず「実るほど頭^{こうべ}を垂れる稲穂かな」となり、与えられた神の恵みに感謝をします。神は謙虚でへりくだり、従順な心を喜びます。(詩編51・19、イザヤ書66・2、ミカ書6・8) 神の威光は天地創造や神の計画の中で形づくられ「歴史の流れに沿った導き」については、救いの業に表されており、人知を超えた偉大さを持っています。謙虚な人は、自分を誇らず、神を賛美しているこの姿を周囲の人が見て、神を敬います。反対に高慢な者(驕り・高ぶり・慢心)は、人間関係を破壊させ、神の裁きを招きます。(箴言16・18) 助言を拒む人は救われず、罪や誤った価値観が根づくので、習慣化された人には回心が求められます。賢者は、知識だけでなく柔軟さと素直さを兼ね備えており、神を畏れて正しい行動を取ります。格言を思い巡らし、日常に生かすことが成長の鍵なので、聖書の格言集として、箴言、知恵の書、シラ書、詩編(MyBible み言葉を生きる)などがあります。

●第 2 朗読 ヘブライ人への手紙 12・18~19、22~24

シナイ山(カナンの地)で律法(十戒)が与えられた場所において、イスラエルの民は、雷・稲妻・雲・角笛の音・火山を見て「手で触れる…ラッパの音」は、神の臨在や声に恐れて、自然の力に圧倒され「これ以上神が語らないでほしい」と、モーセに懇願します。旧約のシナイ山は神の神聖な場所なので、祭司や特別な場合を除き、人は近づけず、新約ではイエスの贖いにより、神に近づけるようになりました。新約では神の国と救いの完成を表しているのが「シオンの山…集まり」で、「シオンの山」は、エルサレム神殿は「生ける神の都・天のエルサレム」なので、天上の神が住まう都(黙示録21章)のことです。救いの完成を祝う天の礼拝が「無数の天使たちの集い」です。イエスによって救われた信者を「長子」と呼び、天にはこの名が記されています。(ルカ 10・20)「全ての人の審判者である神」は、最後の審判において全人類を裁き、信じる者への報いは神の国へ、不信者への裁きは、「火の池」(黙示録 20・14-15)において、永遠に苦しみます。「神の国に入る」には、①イエスを救い主と信じ(ヨハネ 3・16) ②悔い改め(使徒 3・19) ③受洗し(マルコ 16・16) ④信仰告白をして(ローマ 10・9) ⑤み言葉に従い(ヤコブ 1・22) ⑥日常生活でイエスを証しする(マタイ 5・16、フィリピ 2・15) ⑦聖霊に導かれて歩み(ローマ 8・14) ます。救いは、信仰と言動とが一体となり(エペソ 2・8-10)、イエスの贖いで義とされ「完全なものとされた正しい人の霊」は、神の前で報われます。イエスの十字架での死は、神と人とが和解し、信者は、直接神に近づくことができるようになりました。(エレミヤ書 31・31-34、ルカ書 22・20)

●福音書朗読 ルカ 14・1、7~14

この箇所では、律法(出エジプト記 20:8-11)で定められた「安息日」を、ファリサイ派や律法学者たちは、形式的な規定を厳格に守りながら人を裁きます。イエスは彼らの形式主義を正すため、あえてファリサイ派の婚宴に出席し、自らも試されます。当時のユダヤ社会では、宴会の「席次」は身分や名誉を表します。イエスは「末席に座り、招き上げられる人になるように」と、「へりくだり」の大切さを教えます。「高ぶる者(誇る者)は低くされ、へりくだる者(謙虚な者)は高められる」ので、神の国とこの世での価値観が逆転します。(箴言 25・6-7、マタイ 23・12) 日本での婚宴では、座席は事前に決められており、このような現象は少ないのですが、当時の社会では自由な形式が多く、名誉をめぐる競争が起こっていたようです。また、「招いたら招き返す」との「互恵」が状態化されていました。イエスは「貧しい人、体の不自由な人」社会的な弱者を宴会などに招くように勧めたのは、主の無償の愛(見返りを求めない「喜捨」)に倣うためです。(マタイ 25・35-40)「正しい者たちの復活」とは、神は世の終末には、義人を蘇らせ、永遠の命を与えます。(ダニエル書 12・2、ヨハネ 5・28-29) 無償の愛により他者に仕えた者が、神に「報われ」神の国では、栄誉と永遠の命で報われ、「人の称賛」や「物質的な満足」では得られることのない、神との永遠の交わりがあります。

■第 102 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 知恵の書 9・13~18

知恵の書は、カトリック教会においては第二正典で、紀元前一世紀頃（に書かれ、「真の知恵は神から与えられ、人を正しい道へと導き救います。」と著者は語ります。「知恵(聖霊)」は天地創造の時から神と共に働く存在でした。（箴言 8:22-31）神の計画や御旨を人は自力で悟ることはできず、聖霊によって可能となります。（知恵 9:17）新約では「聖霊によってすべてを悟る」（1 コリント 2:10-12）とあります。「人間の考えは浅はかで思いは不確か」なので、未来を見通せずに誤ることがあり、神は「わたしの思いはお前たちの思いではなく」（イザヤ書 55:8-9）と語ります。神の計画は壮大で、知恵は確実です。（ヨブ記 38 章）「体は魂の重荷」とは、人の死後、肉体から魂が離れることです。「地上の幕屋」とは、肉体のことで、病や罪が心を束縛し、肉体や聖霊の活動を妨げます。（2 コリント 5:1）また、「地上のことでさえかろうじて推し量り」とは、人が「自然界や人間社会の事実を、正しく理解することは難しく」科学的な探求や政治的な判断を見ても誤りは多く、この人間が「天上のこと（神の計画）」を理解することはさらに困難です。「知恵」とは「神からの霊的な知恵」、すなわち「聖霊」のことであり、「神が聖霊を与えてくださることで」人は神の御心を知ることができるので、「聖霊」が必要になります。神が聖霊をこの世に遣わすことで（旧約では預言者、新約では聖霊降臨）、人は神のことを知ること、神に従うことができます。人はこうして正しい道を歩むようになり、救いへと至ります。※聖霊については、MyBible 実践編 II 2 聖霊を参照下さい。

●第 2 朗読 フィレモンへの手紙 1・9~10、12~17

パウロは、コロサイで裕福なフィレモンに対して「愛に訴えた」手紙です。「キリストの囚人」とは、パウロはキリストに忠実だったせいで、捕らえられて獄中にある（使徒 28 章）者になることです。「監禁中にもうけた子」とは、フィレモン(主人)からオネシモ(奴隷)は逃亡し、獄中でパウロと出会い、彼は福音を受け入れて信仰者となり、パウロにとっては霊的な息子になります。パウロはオネシモを「わたしの心」と呼び、信仰により結ばれた存在となります。パウロは、彼を手元に置きたいと願いますが、彼は奴隷なので、律法や社会秩序を尊重し、フィレモンに送り帰します。もし、「オネシモがパウロに仕える」なら、それは「フィレモンの奴隷が主人の同意を得て仕える」ことになると思った。また、パウロがオネシモをフィレモンに帰す善い行いは、自発的な行為なのです。さらに、パウロはオネシモの逃亡は神の計画と捉え、「主人からの一時的な別離は、永遠の関係を築くためだった」と解釈します。オネシモは今や奴隷ではなく、イエスによって「神の子」となり、同じ信仰者によって「愛する兄弟」として、迎え入れる存在となりました。最後に、パウロはフィレモンに、「オネシモを私と思って迎え入れて欲しい」と願い求めたのは、「奴隷から兄弟」への関係に転換させる為です。アブラハム・リンカーン（米国 16 代大統領）の奴隷解放は「人は皆、神の前に平等である」との聖書の真理に基づいており、「奴隷としてではなく……愛する兄弟としてです。」（フィレモン 1:16）との「聖書の言葉」は、歴史の流れに改革をもたらしました。

●福音書朗読 ルカ 14・25~33

この場面は、イエスがエルサレムに向かって進む途中での出来事です。（ルカ 9:51）イエスは群衆に向かって、弟子（聖職者）になる条件を語ります。「憎む」とは「イエスの教えを最優先にする」ことで、人には難しい要求ですが、聖霊の導きによって可能になります。「自分の十字架」とは、当時の十字架は死刑を象徴しており、十字架を担うことなので、「命をかけて従う」ことです。弟子になるとは「自分の自由意志で歩むことを放棄して、主に従って生きる覚悟」をすることです。塔の建設や戦いの^{たと}喩えでは、「事前の計画や戦略の重要性」を教えているのは、安易に「弟子になる」な、と言っており、苦難や犠牲に耐え切れなくなると、弟子の道は途絶えて挫折するからです。従って、弟子になるには「最後までやり抜く覚悟」と「本気で取り組む姿勢」が必要です。「持ち物を一切捨てよ」とは、現世において、自ら進んで物や地位を手放し、執着を断ち、主を第一に考えて歩むことです。弟子になる道は容易ではなく、イエスに倣って従うには、彼より「召し出し」をいただき、「覚悟と優先順位」「犠牲と決断」が伴います。

■第103回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 民数記 21・4~9

この箇所は、イスラエルの民が出エジプトをしている時のことです。民は出エジプトの目的（奴隷解放と約束の地への導き）を忘れ、エジプトでは奴隷の生活でしたが、おいしい物やお肉を腹一杯食べており、今の苦しみに耐え切れず「粗末な食物」(マナ)に不満や愚痴を語り、神に対して罪(逆意)を犯し、神よりの恵みの感謝を忘れます。焼きつくすような毒を持つ「炎の蛇」は「神の裁きを担った蛇」のことです。民の言動に対し神は蛇を送ります。まさに「罪を犯した報酬は死です」(ローマ書 6:23)「人は自分の蒔いたものを刈り取る」(ガラテヤ書 6:7-8、自因自果)ことになります。民は自分たちの罪を認めて悔い改め、モーセに神への執り成しを願い出たのは、救いへの第一歩になります。神は「蛇を取り除く」とは言わず「青銅の蛇を造り、見上げよ」と、モーセに命じます。これは、信仰をもって神の救いを「仰ぐ」ことを求めており、「信じて見上げる者は命を得る」との信仰の姿(民数記 21:8-9、ヨハネ 3:14-15)が語られています。青銅の蛇を見上げた者は癒やされ、後に「十字架上のイエス」を仰ぎ見る信仰の原型となります。イエスもこの出来事を引用して、「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。それは、信じる者がみな、人の子によって永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:14-15)と語られます。

●第2朗読 フィリピへの手紙 2・6~11

パウロは、獄中からフィリピの教会宛の手紙は、福音を歩むについてです。イエスは神の子ですが、この権威に執着せず、人になられて謙虚に歩まれました。イエスが「自分を無にして人と同じ者になられた」のは、人は神を直接理解することはできず、生まれ、食べて、喜び、苦しみ、死を体験することで、人の弱さに共感できる救い主となられます。(ヘブライ人への手紙 2:17) 人が「へりくだる」のは困難なので、聖書には、①自分の限界を知り、高ぶるのを認める。(詩編 103:14、箴言 16:18) ②神の愛を体験し、無条件に愛されていると知る。(ローマ書 5:8) ③神の愛は永遠に変わることがない。(エレミヤ書 31:3) ④イエスに倣い仕える姿を知る。(ヨハ 13:14-15) これらことから、へりくだるについて学べます。「従順」については、「御子をさえも惜しまれなかった」(ローマ書 8:32) 神の愛を静かに黙想することで、私たちは神の御心に近づくことができ、自発的に従順と信頼が生まれます。イエス自身が神の愛に従順であったように、(ヨハ 14:31、フィリピ書 2:8) 信徒もこれに倣います。神はイエスの姿を見て彼を高く上げ、「復活と昇天」により彼に「あらゆる名にまさる名」を与えます。全宇宙のあらゆる存在(天使・人・死者)は、「イエスは主である」と認めます。(フィリピ書 2:10-11、黙示録 5:13、ハバクク書 2:14) 信徒は、自力で「謙虚と従順」を手にするのは困難なので、神の愛と聖霊の助けにより、イエスに倣うことが可能となり、神は、彼を通して、真の謙虚と従順の姿を私たちに見せてくださいました。日々の歩みにおいて、心を低くし、聖霊の導きにより、この実践が私たちにもできるよう、求めながら歩みます。

●福音書朗読 ヨハネ 3・13~17

この場面は、ユダヤ人でファリサイ派の指導者ニコデモが夜、イエスを訪ねた時の話です。イエス自身が唯一「天から降ってきた者」そして、天と地を結ぶ存在であると語ります。自力で神に出会った者、「天に上った者」はおらず、神の救いを啓示できる者はイエスのみです。また「モーセが荒れ野……人の子も上げられねばならない」(民数記 21:8-9)とイエスは語り、彼を「信じて仰ぐ者」は罪から救われ、さらに「信じる者は皆、人の子によって永遠の命を得ます。」神の愛により、天地と人が創造され、罪人を救うために独り子を十字架に差し出され、無償で犠牲の愛により『神が、この世をいかに愛されているか』が理解できます。「子を持って知る親の恩」は、無償の愛を理解する入口にはなりますが、他者の為に自らの子を犠牲にするのには限界となります。神の愛は、この限界を超えた犠牲であり、私たちは神の愛(恩)を自らの血肉として、人生を形作り出せればと願います。神と切り離されず、永遠の交わりを保ち続けることで「滅びない」のです。神は一人も失うことがないよう、御子をこの世に遣わされたのは、裁く為ではなく、救いの扉を開いて人を救うためです。

■第104回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 アモスの預言8・4～7

アモスは南ユダで羊飼いをしていると神に召し出され、紀元前8世紀頃、北イスラエルに遣わされます。ここで彼は、支配者や富裕層が貧しい人（^{きくし}）を搾取し、不正な商取引で私服を肥やしているのを厳しく批判します。神が、貧しい人々（^{しいた}）を虐げていた商人や権力者に直接語られた言葉が「このことを聞け」です。アモスは神の代弁者として、「あなたがたの行為は神に知られている」と告げます。「新月祭や安息日」は、神を礼拝し商売を休む聖日ですが、不正を働く商人たちは、神や礼拝を軽視し「早くこの日が終わらないか」と考え、商売の再開ばかりを考え、神や礼拝よりも商売で利益を得ることを優先していました。不正な取引で儲けたいので「穀物を売りたい」と考え、粗悪な「麦を売り尽くして」利益を得ようとしたり、本来23^はの「エファ^{ます}を小さく」して量をごまかしたり、天秤の片方に「分銅を重くし、お客に多く穀物を払わせ、「偽りの天秤^{てんびん}を使い」不正な利益を得ようとし、奴隷売買では、人をわずかな金額で買ので「弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買う」と、批判します。粗悪品を良い麦と偽り「くず麦を売る」行為があり、イスラエルの神は、「彼らの不正を決して忘れない。」主は「ヤコブの誇りにかけて誓う」と宣言し、裁きの日に彼らの罪は問われます。ただし、悔い改めるなら、神は罪を赦し、罪は裁きの日には思い出されず、（ヘブライ人8・12、イザヤ書1・18）悔い改めないなら、罪は最後の審判で問われます。

●第2朗読 1テモテへの手紙2・1～8 「獄中書簡」は、エフェソ、フィリピ、コロサイ、フィレモンの4書簡です。

パウロがテモテ宛に書いた手紙には、教会での「祈りと生活」について語ります。彼は「願い、執り成し、感謝の祈り」を全ての人のために献げるように勧めたのは、神は全人類の救いを望んでおられるからです。祈りの対象は信者、未信者、敵対者を含みます。特に「王や高官」、現代の為政者（^{いせいしや}総理大臣・閣僚・官僚）のためにも祈るように命じています。当時の彼らは、信徒を迫害しており、それでも祈るように勧めたのは、支配者の決断が社会全体に大きな影響を及ぼすからです。この祈りは信者にとって「信心と品位を保ち、平穏で落ち着いた生活」の基盤が築かれ、福音を広める土台になります。また、具体的に為政者を思い描いて祈ることで、真の執り成しになり、神に喜ばれます。イエスの十字架の死による罪の赦しと復活による永遠の命。そして、イエスこそ唯一の救い主であること（ヨハネ14・6）が、ここでの「真理」です。神は唯一であり、神との仲介者はイエスただ一人です。神の計画によりイエスが世に来られ、十字架の死と復活により救いが完成した時が（ガラテヤ書4・4）「定められた時になされた証し」です。パウロは異邦人に対しても使徒として、また、教師としても務めます。彼は「偽りなく真理を語り」信徒を励まし、「怒らず」と言われたのは、「怒り」は神との交信（祈り）を不能にさせ、判断を狂わせるので、「怒りは敵と思え」徳川家康遺訓。「清い手を上げて祈る」姿は、当時の一般的なスタイルです。

●福音書朗読 ルカ16・1～13

当時の社会では地主が財産を持ち、これを管理人に任せていました。告発を受けた管理人が主人の前で弁明する場面は、神の前での最終的な裁き（清算）のことです。神は人に命や才能、時間を託し、この最終報告を求めます。管理人は自分の能力を冷静に分析し、将来に備え、債務者との新しい関係を築きます。これは不正の肯定ではなく、危機を予測し、知恵と行動の必要性を説いています。借用書では、管理人が上乗せした分の利益を減額したので、主人の損失はなく良い評判が得られ、債務者は債務が減額されて感謝し、管理人は債務者から大切にされるので「三方良し」となります。イエスは「この世の子らは賢く、光の子らは純粋すぎる」ので「蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。」（マタイ10・16）と諭します。信頼の積み重ねが大切なので「小さなことや大きなことにも忠実」になります。この世の富（金や物質）の扱いに不忠実なら、神は霊的な宝（永遠の命）は与えないので「不正な富に忠実でなければ霊的な宝は任せられない」と言います。世の富や才能は神（他人）から託されており、これに忠実でない者、神が本来あなた（自分）に与えようとしておられる「永遠の宝」「天の報い」を受けようとし、しない者には、神は世の宝さえも託されないと語られています。「二人の主人に仕えることはできない」ので、神と富との間で、優先順位を決め、忠実さと賢さを求めています。※当時の管理人は、「特権的地位」なので、これを得ると大きな利益が得られました。

■第 105 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 アモスの預言 6・1、4～7

アモスは紀元前 8 世紀（ウジャヤ王・ヤロブアム 2 世の時代）頃の預言者で、北イスラエルは繁栄の絶頂期でしたが、背後では、貧しい者の犠牲の上に成り立ち、贅沢^{ぜいたく}と墮落がはびこっていました。アモスはこの状況に対して、神の裁きとしての滅亡とバビロン捕囚（第一回目）が訪れると預言します。シオン（南王国ユダ）やサマリア（北王国イスラエル）は「神に守られている」と思い込み、安逸^{あんいつ}にふける支配者層を「災い」と呼びます。「諸国民の頭」であるイスラエルの民は、選民として他国よりも優れた立場にあるのを誇りとせず、快楽に流されていると、指摘しています。象牙の寝台は贅沢の象徴で、支配者たちは貧しい人々を顧みず、長椅子に寝そべっては宴会に明け暮れます。また、ダビデが「音楽」を「礼拝」に用いたのに、彼らは音楽を娯楽に用いて、この目的を歪めます。さらに、ぶどう酒や香油といった贅沢品を手にするには熱心でも、同胞（イスラエル全体）の苦しみや国の衰退には無関心で、自己中心的な姿が浮き彫りになります。この結果、神の裁きは、彼らが捕囚の先頭に立たされ、富や贅沢は何の役にも立たず、安逸^{あんいつ}にふけた者たちが最初に屈辱^{くつじよく}を受けると預言します。

●第 2 朗読 1 テモテへの手紙 6・1～16

パウロは、エフェソの教会での指導者であるテモテに手紙を書き、「神の人よ」と呼びかけます。これは神に属し、神の使命を受けて生きる者のことです。旧約では、モーセや預言者がこう呼ばれています。（申命記 33・1、列王記上 13・1）パウロが「避けよ」と命じたことは、①誤った教えや議論に没頭する ②信仰を金儲けの手段にする③富や欲望に支配される生き方です。（1 テモ 6・3-10）追い求めるのは、①正義（神の基準にかなう行い）②信心（神を第一に敬う）③信仰（神の約束を信じ抜く）④愛（他者を思いやる）⑤忍耐（試練に耐え神を待つ）⑥柔和（謙虚で優しい）です。「信仰の戦いを立派に戦い抜く」ことにより、誘惑や誤った教えに惑わされず、迫害や困難の中にあっても神を信じ抜き、永遠の命が得られます。テモテは洗礼や任職の場で、信仰告白を行い、信仰を表明しました。これを創造主の御前で全うするように勧めたのは、イエスがポンティオ・ピラトの前で「真理を証しするために来た」と宣言した（ヨハ 18・36-37）ように、信仰者は「おちどなく、非難されないよう」誠実な歩みが求められているからです。「掟」は、「愛の掟」や「十戒」が基本なので、信仰を守り、清く歩むことです。イエスの再臨が「定められた時」で、この時は神のみが定めています。（マタ 24・36）最後にパウロは、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まれ、見ることができない神に、誉れと永遠の支配を帰す賛美（頌栄・ハレルヤ）を献げます。パウロがテモテにした命令には、自らの経験や考えだけでなく、神の絶対的な権威に基づいています。（1 テモテ 6・13-14、2 テモテ 4・1-2、ガラテヤ書 1・12）

●福音書朗読 ルカ 16・19～31

当時のユダヤ社会では、金持ちは「神に祝福された人」で、貧しい者は「罪を犯した者」と、考えられており、イエスが言う真の祝福とは、財産や地位ではなく、神との関係にあります。ラザロは社会から見捨てられた存在で、犬（不浄とされる動物）が彼に憐れみを示します。やがて彼は天使に導かれ「アブラハム」のいる天の祝宴に招かれます。一方、金持ちは「陰府」^{よみ}（死後、裁きを待つ場所です。ヨハネの黙示録概要図を参照）に行きます。ラザロは「悪い環境」におり、飢え、病、孤独、社会的に差別され、皆から見放されていました。金持ち（ファリサイ人）が罪に問われたのは贅沢な生活ではなく、門前にいたラザロへの無関心、愛や憐れみの欠如、自己中心の生き方が陰府から地獄に至らせます。天国と陰府との間には大きな淵があるので、神との応答はできず、神の裁きを待つのみとなり、生前で神との応答ができる状態にしておくことです。金持ちはアブラハムに、兄弟たちにラザロを遣わすように頼みますが、彼は「モーセ（律法）と預言者」（旧約聖書）が既に兄弟にはあるので、神の御心は知ることができると語ります。金持ちは「死者が行けば悔い改める」との主張に彼は「聖書の言葉を信じない者に死者が復活して話しに行っても信じない」と断言したのは、イエスが復活しにも、多くの人は信じなかったからです。（マタイ 2・11-15）奇跡を見ても信じない者は信じない、との真理がここで語られています。裁きは、生前の歩みにおいて「神を第一にしていたのか、富や快楽なのか」この選択と、み言葉に従った歩みが大切になります。

■第106回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 ハバクク書 1・2～3、2・2～4

ハバクク書は紀元前 7 世紀末に著され、社会には不正・暴力・腐敗が蔓延し、正しい者が苦しめられていました。預言者ハバククは、この現実を神に訴えます。彼は、正しい者が虐げられ、悪人がのさばり、不正を裁かず、悪が栄えている現状を見て、「神は正義の方なのだから悪を裁く」と信じていたのに、自らの「祈りは無視されている」と感じ、神は「沈黙」していると思っていました。神は沈黙していたのではなく、定められた時に裁きを行う計画を既に持っておられたのです。神はハバククに、実際の暴力や不正を見せたのは、①預言者に人々の叫びを体験させ、神に訴えさせる立場なのを自覚させるためです。②具体的な状況を把握させ、神の裁きと救いを人々に告知らせるためです。神はハバククに、未来に起こる「神の裁きと救い」の「幻」を明確に書き留めるように命じます。これは、「悪人（高慢な者）は裁かれ、義人は信仰によって生きる」ことです。高慢な者は、自分の力や繁栄を誇り、神を無視する人で、義人は、神を信頼して、神の時を待ち望む人です。幻が実現する時期は、人の目には遅いと思えても必ずやってくるので、神の約束は人を欺くことはしないのです。「バビロン捕囚による裁き」と「世の終わりに来る神の救い」が「幻」です。暴力や不正に満ちた現実に惑わされず、神の約束を忍耐し、救いの時を待ち続けることが、（ローマ書 1・17、ガラテヤ書 3・11、ヘブライ人への手紙 10・38）「信仰によって生きる」ことです。

●第2朗読 2テモテへの手紙 1・6～8、13～14

パウロは晩年、ローマの獄中からエフェソの教会を導く弟子のテモテに手紙を書き、迫害の中でも信仰と働きを守り抜くように励ます。テモテは、祖母ロイスと母エウニケより受け継いだ「真の信仰」を土台にしていました。按手のことを「手を置く」といい、任職時にパウロが頭に手を置くと、奉仕に必要な賜物は聖霊で与えられます。牧者としての説教・教え・導き・忍耐など、必要な力が「賜物」です。与えられた賜物を積極的に用いることで、聖霊の火を燃やし続けるの「再び燃えたたせる」です。神の霊は、臆病にさせず、「力・勇気・強さ・愛」で、人に仕えては思いやり、「思慮分別・自己制御・知恵」を与えます。「イエスについて、堂々と言葉と行動で信仰を表すことが主を証しする」ことです。パウロがイエスに従ったことで捕らえられた状況を「主の囚人」と呼びます。迫害や嘲りを恐れずに信仰を守る抜くことが「恥じない」です。福音宣教には苦しみが伴いますが、神がこれを支えてくださるので、「忍耐」しなさいと語っています。また知識のみに留まらず、神への信頼と人への愛に根ざした実践をするには「信仰と愛をもって」行います。パウロから学んだ真理に基づく「健全な言葉を手本」して教えます。福音と信仰を「良いもの」といい、これは自力によらず「体は聖霊の宮殿」（1コリント 6・19）なので「聖霊が内に住むことで信仰は守れる」と教えています。

●福音書朗読 ルカ 17・5～10

この章の前半では、イエスは弟子たちに、「兄弟が罪を犯したら戒め、悔い改めたなら赦しなさい」「一日に七度罪を犯したら七度赦しなさい」と語ります。弟子たちはこの教えの厳しさに圧倒され、自分たちの信仰の未熟さゆえに、「信仰を増してください」と願います。神への徹底した信頼と、自らを主に委ねることを「増す」と言います。赦しや従順は人の力では不可能でも、聖霊の働きにより可能になります。「からし種」は最も小さな種なのですが、イエスは、「信仰の大小」ではなく、「信仰の有無」を言っています。ほんの僅かでも本物の信仰があれば、不可能と思えることでも可能にします。「自分を信じる」ことが「自己暗示」です。信仰は、「神を信じて委ねる」ことなので、神の御心になつていくとの確信を握りしめ、結果は主に委ねる。すると安らぎます。主人と僕との喩え話しでは、「信仰によって行動する者の姿勢」を表しています。信仰は「特別な力」を得ることではなく、仕えることにより、務めが果たせます。僕は主人の命令を実行し、感謝や報酬は期待せずに、「取るに足りない僕です」と謙虚になり、自らの行動は誇らず、「神に生かされて、当然のことをしたまで」との思いが大切だと教えています。

■第 107 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 列王記下 5・14～17

ナアマンはアラムの王（シリア）に仕える将軍で、重い皮膚病を患います。彼に仕えるイスラエルの少女が「預言者エリシャなら癒せる」と告げ、ナアマンは王の許可を得て贈り物を携えイスラエルに向かいます。エリシャは直接会わず、使者を通して「ヨルダン川に七度身を浸せ」と命じます。ナアマンは怒って帰ろうとしますが、従者の説得で、身を七度、ヨルダン川に浸すと病は癒されました。「七」は完全数を表し、川の効能で癒されたのではなく、「神の言葉に従った」結果です。ナアマンは異邦人ですが「イスラエルの神こそ唯一の神」と信仰告白をします。彼が感謝の贈り物を差し出したのは当然の行為なのに、エリシャはこの受け取りを拒否します。何故なら、受け取れば「代価の見返りに癒された」と、神の恵みが取引と誤解されるからです。エリシャは「癒しも救いも神よりの無償の賜物」であり、栄光はすべて神に帰す。との態度は「あなた方が救われたのは、恵みによるので……神からの賜物です。」（エフェソ 2・8-9）とのみ言葉と一致します。その後、従者のゲハジは贈り物を盗んで裁かれます。神々はそれぞれの土地に宿ると考えられていたので、ナアマンは「二頭のらばに負わせるほどの土」を求め、それを敷いて土台（不動産）にした上に祭壇を築き、イスラエルの神を礼拝します。彼は回心と忠誠の証しとして、「主以外の神に犠牲は^{いけにえ}献げない」と誓い、多神教の社会において、唯一の神を礼拝する、極めて異例な信仰告白をしました。

●第 2 朗読 2 テモテへの手紙 2・8～13

パウロは、獄中から弟子のテモテに手紙を書いて励ます。信仰の中心はイエスであり、イエスの死と復活を「思い起こせ」と言っており、力と希望が湧きます。パウロの言う「福音」は、イエスはダビデの家系に生まれ、十字架で死に、三日目に復活して救いをもたらしたことです。（ローマ 1・3、ルカ 24・6-7）皇帝ネロにより、パウロが福音宣教をしたことで、囚人として監禁され「鎖につながれ」ます。「神の言葉はつながれていない」とは、人を拘束しても神の言葉を鎖ではつなぐことはできず、パウロの獄中書簡によって、信徒の数は増え続けました。神によって救いに招かれた全ての人々のことを「選ばれた人々」と呼びます。「苦難を耐え忍ぶ」ことは、人の意思では難しく、祈り（ルカ 22・40）、み言葉を思い出し（詩編 119・50）、共同体の支え（ガラテヤ書 6・2）、イエスを模範とし（ヘブライ人 12・2-3）、聖霊の助けによって可能になります。イエスの十字架の死で罪は赦され、復活により永遠の命が与えられ、世の終わりには神の国で、神と共に永遠に住むことを（ヨハ 14・2-3、黙 21・3-4）「救いと永遠の栄光」と呼びます。洗礼式（浸水式）では（ローマ 6・4-5）、水中に沈むことでイエスと共に死に、水面に出ることで、新しい命に生きるの「共に死んだなら共に生きる」です。信仰を守るために困難・迫害などに「耐え忍ぶなら」終末にはイエスと共に神が「支配する」国に住むので、イエスを否定する者は裁かれます。（マタ 10・33）人は不誠実であっても、イエスご自身が救い主であり「真実」なことなので、これは永遠に変わることはないのです。（ヘブライ人 13・8）

●福音書朗読 ルカ 17・11～19

イエスは、エルサレムでの受難と十字架の使命に向かう旅の途中での場面になります。当時、重い皮膚病（らい病）は「不浄」の病とされ、人々から隔離された十人は、遠くからイエスに「憐れんでください」と、「癒しと回復」を求める切実な「叫び声」を発します。イエスが「祭司のところへ行きなさい」と命じたのは、律法で祭司が癒しを確認し、社会復帰を許可していたからです。（レビ記 14 章）彼らはイエスの「言葉」に従って行く途中で癒されます。これはナアマンがエリシャの言葉に従って癒された場面（2 列王記 5 章）と似ています。癒された一人のサマリア人は、癒しは「神のわざ」であると悟り、大声で神を賛美し、イエスの前にひれ伏して感謝します。神の恵みは国境を越え、人を分け隔てせずに与えられます。残る九人は癒されたことに満足し、神への感謝を忘れ、「九人はどこにいるのか」とのイエスの問いかけは、神からの恵みに対する感謝の大切さを教えています。神よりの恵みは当たり前と思い、感謝を忘れている姿は現代の姿にも重なります。聖書は「いつも喜び……すべてに感謝しなさい」（1 テサロニケ 5・16-18）と教えています。ここでの「信仰」は、イエスに癒しを求めて癒された後、癒しの背後におられる偉大な神を認め、神にひれ伏して感謝する姿勢こそが、「あなたの信仰があなたを救った」となるのでしょう。

■第108回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 出エジプト記 17・8～13

イスラエルの民がエジプトを脱出して荒れ野の旅で、飢えや渇きに苦しみながら、神に養われている途中、最初の戦闘の場面です。アマレク人は遊牧民で、イスラエルの民が疲れて弱っているところを襲います。(申命記 25・17-18) この戦いは、カナンに行くためではなく、生き延びるためです。新約では「平和をつくり出す人は幸い」と、神の国の完成に向かう言葉がありますがここは、イスラエルの民が生き延びて、神の約束を次世代に引き継ぐための「防衛戦」です。モーセはヨシュアを「軍の指揮官」に^{ぼってき}拔擢し、初めてのリーダーとなります。モーセが手にした「杖」とは、紅海にある海を分け、岩から水を出すときに使用した杖です。モーセはこれを両手で掲げ、丘に立ち「戦いは神の御手にある」ことを表します。アロンはモーセの兄で大祭司。フルはモーセの姉ミリアムの夫なので、近親者で信頼できる支援者です。両手を上げて祈る姿勢は旧約ではしばしば見られます。(詩編 28・2) モーセは両手を上げて、祈りの姿勢を取って杖を掲げ、神の力に依存している姿を表します。モーセは疲れて、手を下ろすと戦況は悪化し、仲間が石を運んで座らせ、両脇から二人は手を支えます。ここでは「指導者一人の力ではなく、共同体の支えにより神の御業が遂行された」ことを学ばせています。イスラエルの民による今回の戦いは、やがてメシア(救い主)をこの地に送るために、神は民を守られたのです。この戦いは単なる流血の戦いではなく、信仰と祈りによる霊的な戦いを示しており、私たちが「主に依り頼むことの大切さ」を教えています。

●第2朗読 2テモテへの手紙 3・14～4・2

この箇所は、パウロが最晩年、殉教直前に牢獄からテモテ宛に書いた手紙で、聖書の権威とみ言葉を宣べ伝える使命を記しています。テモテが「学んだ確信」は、①パウロから教えられた福音の真理②旧約聖書で神が約束されたメシア(救い主)の成就③宣教を通して聞いた福音④テモテが実生活で確信した信仰です。テモテが「学んだ」信仰は、母エウニケと祖母ロイスより継承し、パウロからは使徒の教えについて学びます。当時「聖書」に親しんだ箇所は、律法・預言者・諸書のことで、1～4世紀にかけて、キリスト教として、神の言葉を集約した書物が「聖書」と呼ばれるようになります。聖書を通してイエスを知り、信じ、救われる道を理解することが「救いに導く知恵」です。パウロは「聖書は聖霊の導きによって記された」故に、真理を示し、教え、戒め、誤りを正し、義に従う訓練に役立ち、信仰者は善い業を行い、神の御心に従うことができ、試練や使命に耐える力を備えると語ります。今を生きる者と、既に死に陰府^{うみ}にいる者の両者を普遍的に裁くことが「生きている者と死んだ者を裁く」です。パウロは主を証人として、命がけで宣言した厳粛な命令のことが「厳かに命じる」で、み言葉を宣べ伝えて真理に立ち返らせることです。具体的には、時が良くても悪くても、み言葉を伝え続け、忍耐をもって教え、誤りを正し、信者を励まし続けます。これはやがて到来する神の国において、主との親しい交わりと喜びに加えられます。

●福音書朗読 ルカ 18・1～8

イエスはファリサイ派に「神の国はあなたがたのただ中にある」と語り、弟子たちには「終末まで祈り続けることの大切さ」を教え、この箇所になります。祈ってもすぐ答えがない場合「主は祈りを聞かれず沈黙されている」と不安を抱き、気を落として、祈りを止めてしまわずに「神に信頼し続け」「絶えず祈りなさい」(1テサロニケ 5・16-18)と励まします。この裁判官は最悪の人物ですが、やもめの執拗^{しつよう}さに負けて訴えを聞きます。当時のやもめは社会的には弱く、財産が奪われても守ってくれる人はおらず、旧約では「孤児とやもめを守れ」(申命記 10・18)とあります。不正な裁判官ですら訴えに応じたのですから、「神は祈る者の声は必ず聞かれます」イエスは、ゲッセマネの園では、苦しみもだえ、切なる祈り(ルカ 22・44)や盲人は「見えるようになりたい」(ルカ 18・41)との叫ぶ祈りは聞かれます。聞かれないのは、「間違った動機」(ヤコブ書 4・3)だからであり「すべてには時がある」(コヘレト書 3・1)ので、神の時はまだ来ておらず「祈りが聞かれた」と確信するまで諦^{あきら}めずに祈り続けます。イエスは「人の子が来るとき、果たして信仰を見いだすだろうか」との問いは、世の終わりには、人類が信仰を失うほどの艱難時代が到来するで、「祈り続ける信仰」こそが、再臨を待ち望む者にとっては必要だと教えています。

■第 109 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 シラ書 35・15～17、20～22

今回のテーマは、神の公正な裁きと祈りです。神は人を偏り見ず、正しく裁かれる方です。特に、社会的弱者（虐げられている者・みなしご・やもめ）、謙虚な人の祈りは顧みられます。「主は裁く方」なので、裁くのは、不正を行う者、他人を虐げる者、神を敬わずに正義を無視する者です。一方、正しい人の行いは報われます。神は人の心と行動を見ておられます。人は身分・立場・国籍・宗教などを偏り見ます。聖書には、全ての人の心には神を求める思いが刻まれている（ローマ書 2:14-15）とあるので、信者・未信者を問わず、心からの叫びや嘆き、助けを求める思いが祈りとなり、神に届きます。大切なのは形式ではなく、真実な心のありようです。神の正義・愛・真理にかなうことが「御旨」で、律法や預言者の教えやみ言葉に従い、隣人を愛し、神を敬い「仕える人」の祈りと行動は主に受け入れられます。祈りが天を昇るのが「雲にまで届く」で、神に届くとの確信を表しており、祈りが障害を越えて神に届いて顧みられるのが「雲を突き抜ける」ことで、神よりの応答が遅くても、焦らずに待ちます。謙虚に祈り続けている人には、やがて「いと高き方」が訪れ、神よりの応答が必ずあります。最後の審判において、不正な者を裁き、正しい者が救われることが「正しい人々のために裁き、正義を行われる」で、神が正義を行うことについては、聖書に記されています。（出エジプト記 3:7-8、詩編 103:6、イザヤ書 1:17、ルカ 1:52-53、使徒 10:34-35）

●第 2 朗読 2 テモテへの手紙 4・6～8、16～18

この箇所は、パウロが殉教直前に獄中から弟子のテモテ宛の手紙です。旧約の「注ぎの供え物」（ぶどう酒を祭壇に注ぐ儀式）のように、自らの命を殉教により神に献げるのが「いけにえ」です。皇帝ネロの迫害により、殉教が近づいている時が「世を去る時」です。神の言葉に従い、肉の欲望や迫害、誤った教えとの「戦いを戦い抜き」神よりの使命である、異邦人への宣教をやり抜き「決められた道を走りとおし」ます。困難の中でも、イエスを信じ抜き、信仰を捨てなかったことが「信仰を守り抜く」です。勝利の冠である「永遠の命」が「義の栄冠」のことで、死後には審判者であるイエスより、主の再臨を待ち望む全ての信者に授けられます。パウロにおける最高の報いは、人々の救いです。ローマでの最初の裁判において、パウロは仲間に見捨てられますが、彼らへの赦しの祈りには、十字架でのイエスの言葉を思い出させます。（ルカ 23:34）パウロの福音宣教は、広大なローマ帝国全土に拡大され、世界宣教の基盤を築きます。彼は聖霊に導かれて、知恵と力が与えられたので、宣教の偉業が成し遂げられました。迫害やサタンの象徴が「獅子」で、パウロの使命が達成されるまで聖霊で守られます。宣教を妨げる悪を「悪い業」のことで、聖霊によりこれらから守られて、新しい神の国に迎え入れられ「主に栄光が世々限りなくあるように」との、神への感謝と賛美になります。

●福音書朗読 ルカ 18・9～14

直前の「やもめと不正な裁判官の喩え」では、忍耐する祈りと神の正義が語られ、この箇所では「祈りの姿勢」が語られています。自分は正しい人と思い、自らの力で救われると考え、慢心に^{おちい}陥っているのが「他人を見下す人」です。ファリサイ派は、律法を^{じきんしゆ}遵守することに熱心で、社会の模範ですが、神の視点（^{ふかん}俯瞰）から見ようとはしておらず一方、徴税人は、重税や不正行為から「罪人」と、さげすまれます。ファリサイ派の祈りには「感謝」します。とありますが、実際は「自己の礼賛」になっています。徴税人は、天を仰ぐこともできずに胸を打ち、「罪人を憐れんでください」と、罪を認めて「へりくだり」、主の憐れみにすがる声を聞いたイエスは、「義人は徴税人」だと断言します。神との関係が回復することが「義にされる」です。「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」のは、神がよくご覧になっておられるからです。日々のありようで裁きや恵みが示されるので、毎日の歩みについて黙想をします。悔い改める者には主の恵み（癒し・赦し）が注がれるのを「医者が必要と…病人である」（ルカ 5:31）と言います。『歎異抄』の「善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」も、自らを悪人と認めて悔いる者こそ、救いの門が開かれると語っています。

■第 110 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 知恵の書 3・1～6、9

この箇所は、義人（神に従う人）の死や苦難は、悲劇ではなく「神の守り」と「永遠の希望」に包まれており、死後の「希望」と「神の裁きの確かさ」を教えています。神を畏れ、律法を守り、信仰と正義を歩み、神を中心に生きる人を「神に従う人の魂」と呼びます。死や苦難、肉体は朽ちても魂は滅びず、絶望に陥ることもないのが、「神の御手で魂が守られている」と言います。苦難や罪からの裁きや死後の滅びもなく、神より永遠の安らぎを得ることが「責め苦も受けない」と言い、信仰のない者には、義人の「死は敗北」に見え、「人生の終わり」と映り「旅立ちには災い」や不幸と思われ「離別は破滅」に見え、「愚か者…死んだ者と映り」ます。しかし、神の目に義人は「平和のうちにいる。」義人に対する「懲らしめ」は罰ではなく、神の訓練と救いのプロセスです。義人の魂は滅びることなく、「試練の一時的な苦難」を経て、永遠の命へと導かれ、神より「豊かな恵みを得る」ので「不滅への希望」となります。神は義人を「鍛えて試し」彼らが「ふさわしい者」であるかを確かめられます。義人は「るつぼの中の金」のように火で精錬^{せいれん}されて純化され、神に全身全霊を「焼き尽くすいけにえ」として献げます。死や苦しみを超えて神の愛と永遠の命の真理に至り、神との交わりに生きることが「主に依り頼む人は……主と共に生きる」です。罪の赦しと救いが与えられ、主の再臨により、神との関係が回復することが「主に清められた人……主の訪れを受ける」ことです。

●第 2 朗読 ローマ人への手紙 8・31～35、37～39

この箇所は、前章からの結論部分であり、人は罪の下にありますが、神は、イエスによって人を義とされ、聖霊が与えられて、神の子にされ、聖霊による神への執り成し、救いの恵み全体について語られています。迫害者、罪やサタン、この世での権力や苦難が「敵対する者」ですが、神が味方となっているので、彼らが勝つなど、決してないのです。赦し、義認、聖霊、永遠の命など、救いに必要なこれらの「霊的な祝福」の全てを「すべてのもの」と呼びます。御子を私たちに与えてくださった神は、惜しまずにこれらの霊的な祝福と最終的な栄光、生活に必要なもの（マタイ 6:33）を「賜り」ます。イエスを信じて義とされた者が「神に選ばれた者」です。サタンはこの人たちに告発（黙示録 12:10）しようとしませんが、「人を義とされるのは神」なので、誰も人を「罪に定めることはできない」と、パウロは断言します。イエスは今、神の右に座して大祭司となり、神の前で信徒を弁護し、「執り成し」をしてくださるので、赦しは確実なものになります。（ヘブライ人 7:25）サタンや罪、あらゆる逆境。これらは、信徒を神の「愛から引き離そうとする」ことは失敗します。神の愛を分断する手段のことを「艱難…剣」のことですが、初代教会における迫害や殉教においても、神の愛からの分断は失敗します。信仰者を襲う試練のことが「すべてのこと」で、主の言葉や聖霊の力に励まされ、試練には屈せず、最後まで信仰を守り抜き、永遠の命を得ることが「勝利」です。パウロは最後に、「神の愛は決して揺るがず、いかなる被造物も、私たちのイエスによって示された愛から引き離すことはできない」と、確信を込めた宣言をしています。

●福音書朗読 ヨハネ 6・37～40

群衆が、イエスの「パンの奇跡」を見てやって来た場面で、イエスが与えるパンとは、「永遠の命」のことです。この箇所は、「神の御心とイエスの使命」について語っています。自らの力や知識によらず、神に導かれた人を「父が与えた人」です。（ヨハネ 6:44）拒絶するのが「追い出す」で、イエスは父が与えた人を決して拒むことなく、いつも受け入ると約束しています。（ヨハネ 6:37, 17:11-12）人には、自由意思が与えられており、イエスから「離れ去る」と滅びに至り、悔い改めることで、救いに導かれます。（ルカ 15 章）イエスを遣わした神の「御心」は、人類を罪から解放し、復活を通して永遠の命を与える救いの計画のためです。もう一つの神の「御心」は、主を信じる者を一人も失うことなく、終わりの日に復活させ、新しい神の国で共に歩ませることです。

■第 111 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 エゼキエル書 47・1～2、8～9、12

この箇所は、「神殿から流れ出る命の水の幻」と呼ばれ、バビロン捕囚により、神を見失ったイスラエルの民に、回復と希望を与えます。聖霊（ヨハネ 7:39）が「命の水」です。「ドライアイスが霧のように地面を這っているような感覚」エゼキエルは幻の中で神の使い（天使）は、新しい神殿（未実現）の東の入口へと導き、神殿（神が臨在する至聖所の場所）の下から湧き出る水「命の源」を見せます。この水は神の力・祝福・癒しを象徴しており、すべてを生かす霊的な力を示します。イエスも「わたしを信じる人は……生ける水が川となって流れ出る」（ヨハネ 7:38）と同じ真理を語っています。神殿の正面である東は、神の臨在と新しい始まりを象徴しており、南には祭壇が置かれています。神殿の東入口の敷居の下から水が湧き出し、南にある祭壇の下をくぐって、南側の壁の下から外へ流れ出し、さらに東へ進みます。この流れは、神の恵みが神殿（神の臨在）からあふれ出し、祭壇（犠牲と赦し）を通して清められ、全世界に「命と癒し」をもたらします。水はアラバ（荒地）を潤し、死の海も清めて生命を与えるので、神の恵みは、「罪と死」を清めることを表します。神の命（聖霊）は死を超えた命となり「すべての生き物が生き返る」のです。神の神殿から流れ出る水により、果樹は絶えず実を結び（黙示録 22・1-2）、この葉は癒しの葉となり、神の恵みは途絶えることなく、永遠に続く癒しと祝福を象徴しています。ここでの幻は、「神の国の完成」への預言となっています。

●第 2 朗読 1 コリント人への手紙 3・9～11、16～17

当時、コリントの教会では信徒間で「パウロ派・アポロ派」といった分裂が起こり（1 コリント 1:10～12）、互いに伝道の成果を競い合い、パウロはこれを正すために語ります。パウロとアポロが「私たち」のことで、共に力を合わせて福音を伝える目的は「人々を神に導くこと」です。神が建てられた教会が「神の建物」です。神より教会を建てる使命を受けたことが「神からの恵み」です。（エフェソ 3:7）イエスの十字架と復活による救いを「土台」にして、イエスを中心としない信仰はやがて崩れ去ります。（マタイ 7:24-27）信仰生活や教会形成、人格の成長を「家を建てる」と言い、イエスを土台として働きます。「建てる時の注意点」は、良い材料を使えば堅固な建物ができるように、信仰や教会の歩みも行動や教えにより評価されるので、信仰・愛・真理について誠実に行い、神の目に堪えうる教会と信仰生活を築きます。自己中心的な者は「火で試される」とパウロは語ります。（1 コリント 3:13）「あなたがたは神の神殿であり、神の霊が宿る」とは、神が臨在される教会共同体のことであると同時に、各信徒の内にも聖霊が宿ることです。（1 コリント 6:19）「神殿を壊す者」とは、心や信仰、教会共同体を損なう者のことで、怒り、不満、恐れ、悲しみ、嫉妬、分裂、偽りの教えなどがこの要因となります。心を清め、「一の心」「玲瓏」の状態を保つことで、聖霊が住まうのにふさわしい魂の神殿となり、この清さは顔・言葉・行動にも現れます。神は、このような清い心を喜ばれます。（詩篇 51:10-11）

●福音書朗読 ヨハネ 2・13～22

この箇所は、カナで「水をぶどう酒に変える」しるしの後、「神殿から商人を追い出す」場面です。ヘロデ大王が 46 年かけて再建したエルサレム神殿に、過越祭には世界より巡礼者が集い、神殿の外庭では犠牲の動物が販売され、ローマ通貨から神殿通貨への両替も行われ、神殿は商売の家となり、イエスは神への礼拝を失った人々の姿に強い憤りを覚えます。「縄で鞭を作り」動物を追い出し、神殿を清めて神の権威を表します。普段より柔和なイエスも、激しい行動をしたのは、神の名が汚され、信仰が形骸化していることへの怒りからです。「父の家を商売の家としてはならない」神殿を「祈りの家」の姿に取り戻す呼びかけは、今も信仰や教会が形骸化して利益を追求するとき、イエスは同じようにされるでしょう。イエスが神の家を思う熱意ゆえに拒絶され、十字架での苦しみを受けることの預言が「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」（詩編 69:10）です。ご自身の体を神殿にたとえ、イエスは「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と、復活を語ります。神殿はイエスの体であり、復活後には、教会「神殿⇒イエスの体⇒教会」となります。弟子たちは、イエスの復活によって、旧約の預言（詩編 16:10）とイエスの言葉とが一致していることを悟り、彼の復活こそが信仰の「鍵」であることを理解しました。

■第112回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 マラキの預言 3・19～20

この箇所は、バビロン捕囚からの帰還後、神殿は再建されても祭司は墮落し、人々の信仰は形骸化^{けいがいか}していました。マラキは、神の裁きの「その日が来る」そして、正しい者と悪人との区別を神は明確にする。(マラキ 3・18) と告げ、人々に悔い改めを促します。神の正義が現れ、悪を罰して義を示す「主の日」(ヨエル 2・1、アモス 5・18) が「その日」で、逃げることの出来ない神の裁きが「炉のように燃える日」です。高慢な者や悪を行う者は「わら」のように焼き尽くされて滅びます。全ての力を従える神の威厳と主権が「万軍の主」です。生命の源(根)と未来への希望(葉)を断ち、悪人を完全に滅ぼすことを「根も枝も残さない」です。一方、苦難の中にあっても神を信じて従い続ける信者たちを「わが名を畏れ敬うあなたたち」のことで、主は、この人たちの声に耳を傾けます。(マラキ 3・16) 神の救いと正義の「光」が世界を照らし、魂を癒して、再び命を与えることが「義の太陽が昇る」です。イエスは「世の光」(ヨハネ 8:12) として義と救いをもたらします。神の保護と慈しみにより、(詩編 91:4) 人々の罪や苦しみは解放され、癒されることが「その翼には癒す力がある」です。

●第2朗読 2テサロニケへの手紙 3・7～12

テサロニケ教会の一部では、「世の終わりが近づくなら働く必要はない」と考え、怠惰^{ないだ}に陥って他者に頼る者がいました。パウロの手紙はこの誤解を正し、「働くことで信仰を表わしなさい」と教えています。信徒たちを「あなたがた」と呼び、パウロや同行者(シラス、テモテ)を「わたしたち」と言っています。彼らは宣教中でも自らが働き、他者には負担をかけずに生活をしました。テサロニケ(ギリシア北部の都市)を「そちら」と呼び、施しを受けない生活を「パンをただでもらって食べず」と言い、パウロたちは副業として、テント作りで「夜昼苦勞して働き続けた」ことで生活費を得ており、信徒たちには負担をかけずに福音は無償で行い、模範を示しました。彼には支援を受ける権利(1コリント 9:14)がありましたが、それを行使せずに働いたのは、奉仕者の努力は決して無駄ではなく、永遠の御国において報われると約束されているからです。(ガラテヤ 6:9,2 テモテ 4:7-8) 終末・再臨が近いので働いても無駄だ。との誤解から、怠惰な者への戒めとして「働きたくない者は食べてはならない」と語り、働くことは神への務めだと教えています。働かずに他人の生活に干渉して、教会共同体を乱す人を「余計なことをしている者」です。パウロは「主に結ばれた者」、主に仕える使徒として、「落ち着いて生活しなさい」との勧めは、「世の終わり」は神に委ね、人は恐れず、焦らず、主の再臨を待ち望みながら「置かれた場所で咲くよう」にと教えています。

●福音書朗読 ルカ 21・5～19

この箇所は、イエスが神殿で語られた最後の説教で「オリーブ山の説教」「終末預言」と呼ばれ、エルサレム神殿の崩壊と、世の終わりに関する徴^{しるし}や忍耐について語られています。弟子たちを「ある人たち」と呼び、「奉納物」は、金銀や宝石などで作られた装飾品です。紀元70年、ローマ軍により神殿は破壊され、石の上に石が残らないほど焼き尽くされるとの預言が「一つの石も崩されずに」です。弟子たちがイエスに「いつ起こるのか、どんな徴があるのか」との質問は、神殿の崩壊と彼が再臨する際の徴を知るためです。偽メシア、偽預言者を「わたしの名を名乗る者」のことで、「時が近づいた」と唱える者に惑わされるな・飛びつくな、とイエスは語ります。「戦争や暴動」は終末の徴ではなく、神の時は人の予想よりも遅れて成就します。世界規模での戦争や民族紛争を「民は民に、国は国に敵対し」とのことで、天変地異^{てんぺんちい}が「天の恐ろしい現象」です。終末前に、信徒への迫害が起きますが、これは福音を「証し」する機会となります。神はその時、聖霊により知恵を授け、語るべき言葉を与えるので、事前に「準備する」必要はない。信者は裏切りや憎しみに遭遇しますが、「髪の毛一本も失われぬ」とあるのは、神が完全を守る、との約束です。(ルカ 12:6-7、サムエル記上 14:45) 迫害に耐え、信仰を守り抜く者には永遠の命が与えられる、との約束が「忍耐により命(霊の命)を勝ち取る」です。

■第 113 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 サムエル記下 5・1～3

サウル王の死後、(サム上 31 章) サウル王の子 (イシュ・ボシェト) が北イスラエル (11 部族) の王になった後、国は分断され、王の暗殺で (サム記下 4 章) サウル王家は滅亡。イスラエルを導く者はダビデのみとなります。ヤコブ (息子 12 人) の子孫 (12 部族) により「イスラエルの全部族」は構成されます。ダビデはサウルから^{ねた}妬まれ、王から命を狙われ、逃亡生活の中でも彼は神に守られ、神の時を待つ訓練期間となります。逃亡中の地、ヘブロンでダビデはサムエル (預言者・司祭) より油が注がれ、ユダ族の王となります。(サムエル記下 2・4) 同胞との一体を表す言葉が「骨肉」です。サウル王の時、ダビデが軍の指揮を執り、(サエルム記上 18・5-7) ダビデの指導力は民も認め、「主はあなたに仰せになり」神はダビデをサウルの後継者に選び、スラエル全土の長老たちはヘブロンに集い、神の前で契約を結びます。この内容は、王 (ダビデ) は律法に従って民を治め、民は王に忠誠を誓う。神の選びと聖別の徴に「油を注ぎ」神は、ダビデを王として立て、民 (長老たち) はダビデを承認する。この一致で正統な王権は確立され、ダビデが「イスラエルの王」となり、神の計画に^{かな}適う者としてダビデがこれを成就させます。「キリスト」は「油注がれた者」のことで、ダビデの家系はメシアが出る血統ではないのですが、メシア誕生の霊的な家系を引継ぎ「ダビデの子」の王権と、「アブラハムの子」の信仰。この二つを継承する (マタイ 1・1) 存在となり、イエスが誕生します。

【油】主成分はオリーブ油に香料を混合、出エジプト記 30・22-25 参照、祭司・王・預言者の任命式に使用。

●第 2 朗読 コロサイへの手紙 1・12～20

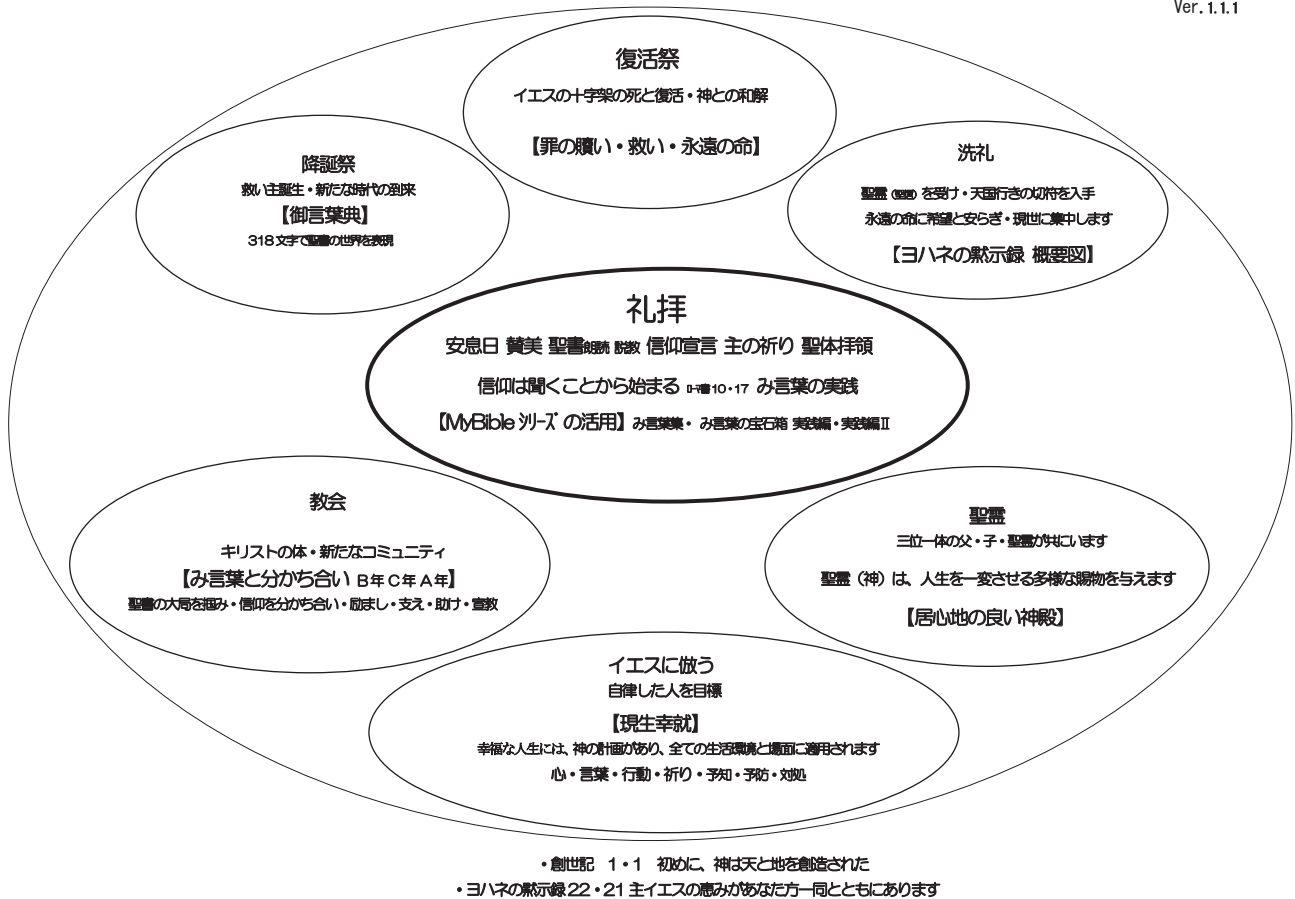
パウロは、弟子エパfrasによって誕生したコロサイの教会に、誤った教えに流されないよう、信仰の再確認を促す手紙を出します。神に選ばれ、イエスにより罪が清められた信者が「聖なる者」で、神の国を「光の中」と言います。神の子となり永遠の住まいとなる神の国に入る「資格」を得るのが「相続」です。旧約のカナンは相続地、新約の神の国と永遠の命が霊的な「相続物」です。罪の支配を「闇の力」と言い、闇の光・滅びからの救い、罪の奴隷から神の子への「支配下に移る」のは、イエスの十字架を代価として、私たちの罪が買い取られて「^{あがな}贖われ」(ヨハネ 8・34-36) 罪の奴隷から解放されたからです。「神の姿」は天地創造の前から存在しており、自然界・人間社会の現実が「見えるもの」で、霊的存在 (天使など) が「見えないもの」です。天地万物は、父が計画され、子が創造し、聖霊による完成へのプロセスが「三位一体」の働きです。全宇宙の物理的・霊的な秩序の維持は「御子によって支えられ」ています。(ヘブライ書 1:3) 救われる者を新しく創造された最初の方であるイエスが「初めの者」で、イエスの死後、最初に復活された彼が (1 コリント 15・20) 「死者の中から最初に生まれた方」です。全てにおいて唯一の存在者イエスが「第一の者」となり、イエスの内には、神の本質と栄光が「満ちあふれ」ているので「宿る」と言い、イエスの死によって万物と神との和解は成立し、天地に平和が訪れます。

●福音書朗読 ルカ 23・35～43

イエスはゲッセマネで捕えられ、カイアファ (大祭司) の偽証で裁かれ、ピラトは群衆の声に負け、彼はゴルゴタの丘で犯罪人と十字架刑になります。(ルカ 23・26-33) 民衆と議員たちは「メシアなら自分を救え」と罵声^{ののしり}を浴びせ、救いを「この世的な力」と理解しています。兵士たちは、「偽りの王」と見なし、安ワイン (酸いぶどう酒) を与え、「王なら自分を救え」と、笑い者にします。ピラトは罪状書に、「ユダヤ人の王」と書かせ (ヨハネ 19・19-22) 神の真理を表します。罪人の一人は「メシアなら自分と我々も助けろ」と、条件付きの信仰 (利己的信仰) を語り、他の罪人 (善い盗賊) は、イエスは^{ばとう}罵倒されても沈黙し、敵を赦す祈り (ルカ 23・34) を献げている言動から、神の存在に触れ「本当に正しい方だ」との信仰が芽生えます。彼は、死の直前で罪を自覚し、悔い改め、彼はイエスに、「御国においてになるとき」神の国に一入られる時には、「わたしを思い出してください」との謙虚な信仰告白は、イエスの憐れみにすぎる言葉により、彼は「今日」この瞬間、「わたしと一緒に楽園にいる」と、未受洗者の罪人への確約は、「悔い改めによる救い」と、イエスへの「信仰による救い」(エフェソ 2・8-9) が語られています。

人生のトータルソリューション 概要図

Ver.1.1.1



人生のトータルソリューション 概要図 解説

Ver1.1

◆ 概要

～7つの福音を柱とする生き方～

信徒は、この世の生活だけでなく、新しい神の国に向かう旅路も理解でき、神との永遠に続く交わりが保証されるとの確信は、永遠の希望を生み出し、あらゆる生活環境（職場・社会など）での試練や苦難を乗り越えられる原動力になり、愛と赦しに基づいた豊かな人生は、夢を達する土台となります。

1. 復活祭

イエスの死で、人類の罪は赦され、神との和解と救いが実現し、イエスの復活により永遠の命が与えられ、信徒には新たな命を生きる日となります。

2. 受洗

1) 受洗（聖信）で聖霊が注がれ、天国行きの切符を手にし、永遠の命は保持しており、新しい神の国に入る条件は整い、現世を生きることに専念します。

2) 信徒は神の子となり、神との永遠の交わりや霊的な成長、神への誠実な行動が開始される最初のステップとなります。 【ヨハネの黙示録 概要図】

3. 聖霊

1) 聖霊は、信徒の決断や言動を導き、人ではなし得ない賜物が与えられるので、聖霊（神）が常時、心に存在する環境（心の心）にしておきます。

2) 三位一体（神・イエス・聖霊）：水の元素記号は H₂O。水（神）・氷（イエス）・蒸気（聖霊）の各働きは異なりますが、元素記号は共通です。 【居心地の良い神殿】

4. 礼拝

安息日は主を讃美し、み言葉を聞いて信仰を鍛錬し、信仰告白、主の祈り、聖体拝領で、主の導きと恩恵に与るので、人生での選択や方向性が明確になり、神との親しい交わりで信仰が育まれ、日々の生活に自信と活力の溢れる歩みとなります。 み言葉集【MyBible シリーズの活用】

5. イエスに倣う

1) 主を模範（心・言葉・行動・祈り）にし、自律した人を目指として、信仰を道具化せず、神のシナリオに基づく人生は、試練や困難で自己の成長と喜びが得られます。

2) 主の教えは、人生のあらゆる生活環境に適用され、愛の掟（マタイ 22:37-40）と十戒（出エジプト記 20:3-17）の実践は、人生をより豊かにします。 【現生幸就】

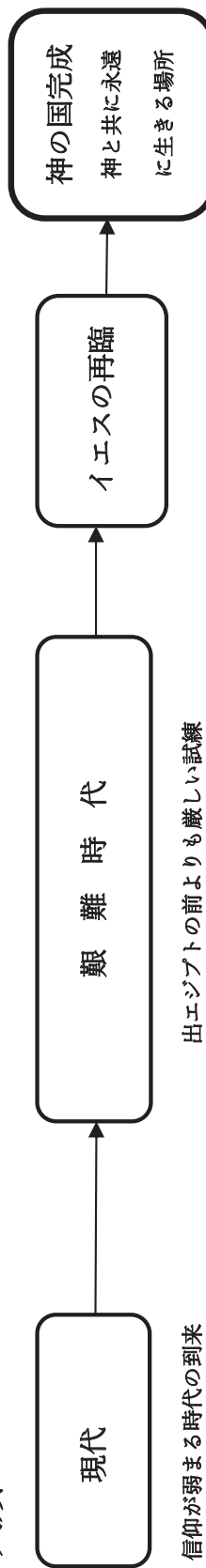
6. 降誕祭

預言が成就した主のご降誕は、全人類の救いと神の子に招こうとする新時代の到来であり、未来への希望と喜びに感謝し、沈黙を忘れない。 【御言葉集】

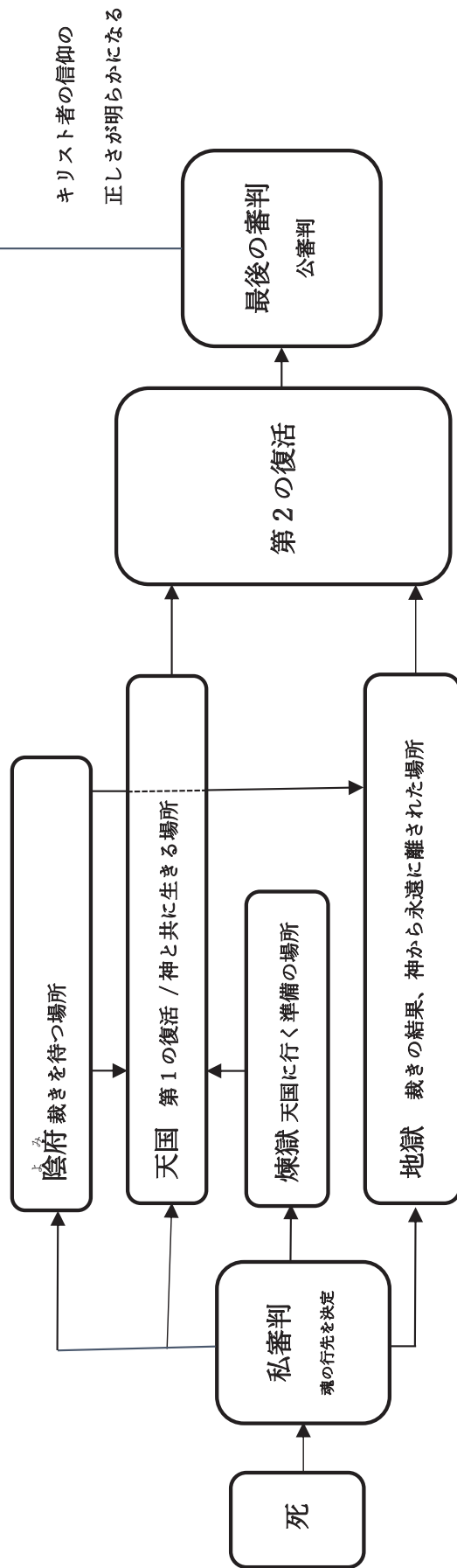
7. 教会

信仰の教会共同体（コミュニティ）では、信仰やみ言葉を分かち合い・経験・知恵を共有して信仰を充電し、支援・奉仕、恩恵を伝える宣教活動は、自己を霊的に成長させる道場になり、信仰を高め・深め・広め、人生に立ち向かうための強力な砦となります。 【み言葉と分かち合い B年 C年 A年の活用】

1. 人類についてのフロー



2. 人の死後についてのフロー



※主に倣う者（心・言葉・行動・祈り）を魂の土台  主の死と復活の恵みに希望を抱き現世を生きる

概要図は MyBible の付録に掲載しています

げん せ こう じゆ
現生幸就

神は人を幸福な人生を歩ませるために創造された

Ver1.8.16

1. 信仰は、希望していることを保証し、見えないものを確信させるものです。(ハブライムへの手紙11・1)
2. 昼も夜もその教えを口ずさむ人……業もしおれることがなく、その業はみな生い茂る。(詩編1・2~3)
3. 主がヨセフとともにおられたので、彼の行うことはすべてうまくいった。(創世記39・2)
4. 人は生きている間、喜び楽しんで喜ばず以上には幸せなことはほかにはない。(コヘレト書3・12)

I. 概要

1. 目標：永遠の命を固く握りしめ闇死の恐怖を断つ。自らを聖霊が宿る神殿にし、神を畏れ主の知恵を得て、現世に集中して生き抜く。
2. 対処：主に倣い(1コリント4・16)、心、言葉、行動、祈りのありようを学び、聖霊に満たされ自律した人になる。

II. 心のありよう【意業】心のありようが言葉となり、行動となり、祈りとなる

心を騒がせてはならない。あなた方は神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。(ヨハネ14・1)

- (1) 恩恵に報いる (2) 愛 (3) 忘己喜主・忘己喜他 (4) 自を愛す (5) 罪は逆恩 (6) 芥子種の信仰で望みは通う (7) 試験は魂を磨く砥石 (8) 不安・心配は妄想 (9) 真心で疑い、迷い、断つ
- (10) み言葉(命のパン・真鏡)を聞く (11) 忍耐 (12) 黙想 (13) 前後際断 (14) 身心自他一如 (15) とわの連峰路を断つ (16) 報復夜讐は主に委ねる (17) 欲の奴隸は渴き・足を知り・掟を守る
- (18) 有無煩尽 (19) 主の轡を負い任せる (20) 主に従順 (21) 怒りは敵 (22) 心を俯瞰 (23) 革新進化 (24) 鍛錬 (25) 執着離脱 (26) アドナイ・エレ (27) インマヌエル。

III. 言葉のありよう【言葉】言葉は人生を造る

み言葉は神であった。み言葉は初めに神とともにあった。すべてのものは、み言葉によってできた。(ヨハネ1・1~3)

1. 幸せを招く言葉(言葉)：賛美、愛している、ありがとう、幸せ・楽しい、感謝、許します、ついている、褒める、寛容、優しく丁寧に言葉は骨を癒す。
2. 不幸を招く言葉：弱音、愚痴、不平、不満、妬み、陰口、誹謗・中傷、唇を制してリフレーミングをする。

IV. 行動のありよう【身業】態度で示す

律法を聞く者が神の前に正しい人ではなく、律法を実行する者が義と認められるのです。(ローマへの手紙2・13)

1. 善い行いには良い実が、悪い行いには悪い実となる。自因自果、主は全てを因果益成となす、幸せ・恵みの種(親切・言葉・寄付)を蒔くと30~100倍に実る。
2. 知行合一：学んだことを実践しようと……熱心に善行に励んだ(シラ書51・18)、善行罪断、愛(掟・戒・仮面を被る主・情けは人の為ならず・喜捨)の実践、おもてなし(マタイ7・12)、誠実。

V. 祈りのありよう【祈業】神との深い交わり

あなた方が信じて祈るなら、求めることはすべてかなえられる。(マタイ21・22)

神への賛美と感謝、主の祈り、聞かれる祈りを実践(主に喜ばれる祈り・執り成しの祈り)、平和の祈り、ロザリオの祈り。

御言葉典

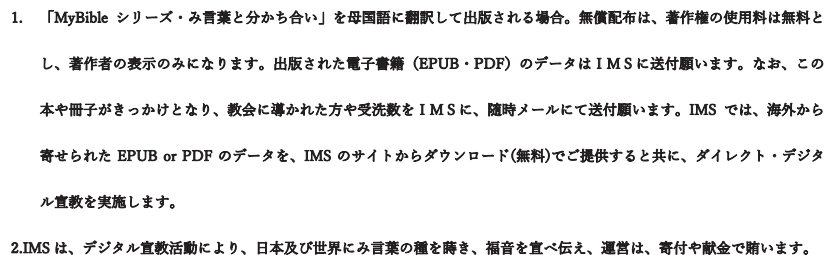
神天地創造 土男骨女生蛇唆罪入神人間
溝生贖主誕生預言 聖靈救主誕生主受洗
神国宣教開始癒慰勵喜奇跡 最後晚餐主体
食血飲 受難十字架刑 三日目復活 昇天
聖靈降臨 受洗罪赦 人死煉獄罪償天国地獄
父子聖靈三位一体 体靈宿神殿 欲執着苦招
主提十戒 一心成 他許寛容 善聴惡疎先祖敬
主畏知恵得 恐失望主不在 試練訓練忍耐救
主山備有 無所有悩断 愛人思心 思悩妄想
言葉実践 主道真理 悲死招 疑怒断復讐主委
苦悩主軛負 主正人報 不誠実滅 陽気良葉
陰氣骨枯 錢慾惡 惜与善 言葉言靈 舌制成功
真福八端 主心言葉行動祈倣自律人 主感謝
求与探見叩開 主神僕遜 前後際断 忘己喜他
靈満熱心祈委 疲黙想 言葉主知恵健康財産
命捨与守失 造福音宣教 信仰望保証見確信
言葉羅針盤 見栄虚栄断 主靈繫言葉有望叶
知恵英明良動機祈叶 主祈薔薇唱 信祈全叶

御言葉典 解説

神は天地を創造された。土から男骨、女、生蛇に唆罪が入り、神と人の間に溝が生じる。贖主の誕生を預言。聖霊が救主誕生。主の受洗。神の国は宣教を開始した。癒慰勵喜の奇跡を。最後の晚餐で主体を食べ血を飲む。受難十字架刑。三日目復活。昇天。聖霊降臨。受洗。罪は赦される。人は死で煉獄に罪償い、天国と地獄へ父子聖霊の三位一体。体は霊が宿る神殿。欲や執着は苦を招く。主は提し十戒を。一心に成る。他を許し寛容となる。善に聴き、惡に疎い。先祖を敬ぶ。主は畏れ、知恵を得る。恐れや失望は主が不在。試練は訓練と忍耐を救う。アドナイエレ。主の山に備え有り。無所有が悩断。愛人と思ひ、思悩は妄想。言葉の実践。主道と真理。悲しきは死を招く。疑いや怒りを断つ。復讐は主を委ねる。苦悩は主の軛を負う。主の罰に正しい人は報われる。不誠実は滅ぶ。陽気は良葉。陰気は骨を枯す。錢の欲は惡。惜しみなく与える善。言葉は言靈。舌で制して成功。真福八端を知る。主の心は言葉の行動と祈を倣う自律の人になる。主で感謝を求め、主と探見し叩開する。主は神の僕となり、遜る。前後に際断。忘己喜他。靈は満ち、熱心に祈り委ねる。疲れた黙想。言葉は主の知恵と健康と財産。命を捨てる者と守る者と失う。造福の音は宣教。信仰は望の保証。見ないことを確信する。言葉は羅針盤。見栄や虚栄を断つ。主の靈は繫る言葉は有望な叶。知恵と英明、良動機での祈りは叶う。主の祈りや薔薇を唱へる。信じて祈りは全て叶う。

御言葉典は、My Bibleシリーズを要約した内容です。これを写経して活用される場合は、御言葉典の漢字のみの内容をご利用ください。本文の文字数は318文字です。

Ver1.6



2. IMS は、デジタル宣教活動により、日本及び世界にみ言葉の種を蒔き、福音を宣べ伝え、運営は、寄付や献金で賄います。

57

序文者紹介 菊地 功（きくち いさお）

1958年 11月 岩手県宮古市生まれ

1986年 司祭叙階

その後94年まで宣教師として西アフリカのガーナに派遣。

帰国後、神言会の役職に就く。

2004年 新潟司教に任命され司教叙階

2017年 東京大司教に任命、着座

2024年 枢機卿に親任される

著者紹介 蒲池 明憲（かまち あきのり）

1950年 8月生まれ

日本自由メソヂスト教団大阪日本橋キリスト教会にて受洗

父の知人が所属する日本キリスト教団池田五月山教会に転会

両親が所属する日本キリスト教団むさし小山教会に転会

結婚にともない、日本キリスト教団東京池袋教会に転会

家族一同、福川 正三氏（カトリック麻布教会信徒）を代父として、

カトリック東京カテドラル関口教会信徒となる

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、カトリック西千葉教会に転入

千葉朝祷会所属（開催日 毎月第1、第3金曜日 開催場所・千葉 YMCA 7F

株式会社 三和銀行（現 三菱 UFJ 銀行）入行

株式会社 千代田情報システム 代表取締役社長

国際 MyBible 協会 理事長

み言葉と分かち合い C年

フランシスコ会聖書研究所訳注使用（原文校訂による口語訳聖書サンパウロ刊）については、サンパウロ企画編集部 2024年4月5日使用許諾済。

聖書の原文は、フランシスコ会聖書研究所訳注を使用しており、句読点や「」などの約物については、前後の文章の関係から一部修正しています。

著 者 蒲池 明憲

発行元 国際 MyBible 協会

URL <https://mybible.tokyo/>

2025年 12月 15日 初版発行

Kamachi Akinori 2025 Printed in Japan

©Kamachi Akinori 2025

